村田町文化財調査報告書第22集

菅　生　館　跡

平成18年３月

村田町教育委員会

菅生館跡（すごうたてあと）

序　　文

村田町教育委員会
教育長　吉野　薫

蔵王連峰の麓、柴田郡のほぼ中央部に位置する村田町は、旧石器時代から中世にかけて180箇所もの多くの遺跡が見つかっています。菅生地区は、村田町でも北東部に位置しており、自動車やバイクなどのレーシングコースがあるＳＵＧＯとして国際的にも有名なところです。

菅生地区にも多くの遺跡があり、その中心的な存在として菅生助八郎が城主であったと伝えられる菅生館跡があります。館跡のある山を、地元の人々は親しみをこめて館山とか城山と呼んでいます。昔は、小学校の遠足で登ったというところでしたが、近年は訪れる人々も少なくなったと聞き及んでいます。

このような菅生館跡を、県営中山間地域総合整備事業ほ場整備事業の一環で地域住民の憩いの場としての農村公園に整備するという事業が計画され、それに伴って発掘調査を行いました。

その結果、本丸の周辺などから掘立柱建物跡や、大規模な堀切や土塁などの遺構が見つかりました。また、中世に使用された陶器や磁器の破片、石臼、石鉢などが出土しました。これらの遺物から、菅生館跡は鎌倉時代後半に造られ、戦国時代に再び使われたものと考えられます。

さらに、菅生館を造る以前の縄文時代の土器や石器も出土し、この館跡のある山において縄文時代の人々が生活を営んでいた場所であったことが判明するなど、数々の貴重な成果がありました。

ここに、そのような成果を広く紹介するために、村田町文化財調査報告書第22集として、菅生館跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

最後になりましたが、夏の暑い最中の発掘作業に当たられた方々、発掘調査のご指導や調査報告書の作成にご協力をいただきました、機関や個人の皆様に感謝申し上げます。

平成18年３月

例　　言

1. 本書は村田町文化財調査報告書第22集で、県営中山間地域総合整備事業ほ場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事に伴う菅生館跡の遺構確認調査の報告書である。本書の内容は、『平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』（宮城県考古学会・平成17年12月18日）に優先するものである。
2. 本書は、石黒伸一朗が執筆・編集した。
3. 本書の図版および注記表・観察表などは下記の者が作成した。
   只野宗一・渡邊香織・秋葉泰徳・小原豊
4. 本書に掲載した写真は、石黒が撮影した。
5. 石器の石材については蟹澤聡史氏、中世陶磁器については佐藤洋氏に鑑定していただいた。
6. 発掘調査および本書の作成については、次の機関および方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して感謝するものである。（敬称略・順不同）
   宮城県教育庁文化財保護課・宮城県大河原地方振興事務所・村田町農林振興課
   佐々木安彦・柳田俊雄・佐川正敏・吉井　宏・小荒井太一・佐藤則之・須田良平・菊地逸夫・相原淳一
   山田晃弘・吉岡恭平・主浜光郎・高橋健寿・日下和寿
7. 調査に当たっては、菅生下区長の佐藤英勝氏をはじめとして、地元の方々の多大なるご協力をいただいた。
8. 出土遺物および調査・報告書作成に関する資料・記録類は、村田町教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本報告書の土色については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業）を使用した。
2. 本文中および図中の標高は海抜高である。
3. 図中の北は真北である。
4. 第１図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「仙台西南部」「岩沼」「陸前川崎」「村田」を使用した。
5. 第２図は、村田町発行の2,500分の１国土基本図（X-QD・78-3、X-QD・78-4）を50％縮小して使用した。
6. 第３図は、村田町発行の2,500分の１国土基本図（X-QD・78-4）を250％拡大再トレースしたものに、村田町教育委員会が作成した菅生館跡の概要図を組み合わせたものである。
7. 付図は、菅生館跡中央部の測量図で、宮城県大河原地方振興事務所が作成したものである。
8. 平面基準は、平面直角座標系第Ｘ系を使用している。
9. 遺構図は、調査時に20分の１で作成したものを、適宜縮小して掲載し、スケールは各図版に示した。
10. 遺物図は実寸で作成したものを、陶磁器・土器は原寸または３分の１か３分の２、石器は３分の２、石製品は３分の２または４分の１、木製品は３分の２で掲載し、スケールは各図版に示した。
11. 遺物写真は、原則として３分の２にしたが、原寸または３分の１で掲載したものもある。
12. 引用・参考文献については、本文中では（文献１）などとし、リストは巻末に掲載した。

目　　次

（1）調査に至る経過…… 1
（2）調査要項…… 1
（3）位置と歴史的環境…… 1
（4）菅生館跡の概要と館主…… 4
①菅生館跡の概要…… 4
②菅生館の館主…… 9
（5）調査の方法…… 10
（6）菅生館跡の地層…… 10
（7）調査結果…… 15
①第1トレンチ…… 15
②第2トレンチ…… 15
③第3トレンチ…… 15
④第4トレンチ…… 15
⑤第5トレンチ…… 19
⑥第6トレンチ…… 19
⑦第7トレンチ…… 19
⑧第8トレンチ…… 19
⑨第9トレンチ…… 29
⑩第10トレンチ…… 29
⑪第11トレンチ…… 29
⑫第12トレンチ…… 29
⑬第13トレンチ…… 29
⑭第14トレンチ…… 35
⑮第15トレンチ…… 35
⑯第16トレンチ…… 35
⑰第17トレンチ…… 39
⑱第18トレンチ…… 39
⑲第19トレンチ…… 39
⑳第20トレンチ…… 39
㉑第21トレンチ…… 39
㉒A区…… 48
（8）まとめ…… 54
①中世…… 54
②縄文時代～古代…… 55
付編 菅生館跡副郭土塁下出土遺物の年代に関わる自然科学分析 …… 58
写真図版…… 63
報告書抄録…… 116

図 版 目 次

第１図　菅生館跡位置図…… 2
第２図　菅生館跡周辺地形図…… 3
第３図　菅生館跡概要図…… 5
第４図　調査区配置図…… 11
第５図　層序模式図…… 13
第６図　第１トレンチ…… 16
第７図　第２トレンチ…… 17
第８図　第３トレンチ…… 18
第９図　第４トレンチ…… 18
第10図　第５トレンチ…… 20
第11図　第６トレンチ…… 21
第12図　第６トレンチ断面…… 22
第13図　第６トレンチ出土遺物・櫓状遺構表採遺物…… 23
第14図　第７トレンチ…… 24
第15図　第７トレンチ断面…… 25
第16図　第８トレンチ…… 26
第17図　第８トレンチ断面…… 27
第18図　第８トレンチ出土遺物…… 28
第19図　第９トレンチ…… 30
第20図　第９トレンチ出土遺物…… 30
第21図　第11トレンチ…… 31
第22図　第13トレンチ…… 32
第23図　第13トレンチ出土遺物①…… 33
第24図　第13トレンチ出土遺物②…… 34
第25図　第14トレンチ…… 36
第26図　第16トレンチ…… 37
第27図　第16トレンチ断面…… 37
第28図　第19トレンチ…… 40
第29図　第20トレンチ…… 40
第30図　第21トレンチ…… 41
第31図　第21トレンチ愛島軽石層上面…… 41
第32図　第21トレンチ断面…… 41
第33図　副郭土塁下８層遺物出土分布図…… 44
第34図　副郭土塁下８層炭化物出土分布図…… 44
第35図　副郭土塁下出土遺物①…… 45
第36図　副郭土塁下出土遺物②…… 46

第37図　副郭土塁下出土遺物③…… 47
第38図　A区土壙・深掘トレンチ配置図…… 48
第39図　A区土壙…… 49
第40図　A区土壙出土遺物…… 49
第41図　A区深掘トレンチ…… 49
第42図　A区深掘トレンチ断面…… 50
第43図　A区深掘トレンチ出土遺物…… 51
第44図　A区表採遺物①…… 52
第45図　A区表採遺物②…… 53

写真図版目次

第46図　菅生館跡遠景…… 65
第47図　菅生館跡遠景…… 65
第48図　主郭…… 65
第49図　主郭…… 65
第50図　主郭西側の土塁…… 65
第51図　主郭西側の土塁…… 65
第52図　主郭南側の土塁…… 65
第53図　主郭南側の土塁…… 65
第54図　主郭東南角の土塁…… 66
第55図　主郭の段状遺構…… 66
第56図　主郭の段状遺構…… 66
第57図　副郭…… 66
第58図　副郭…… 66
第59図　副郭の土塁…… 66
第60図　副郭の土塁…… 66
第61図　櫓状遺構…… 66
第62図　櫓状遺構…… 67
第63図　櫓状遺構…… 67
第64図　櫓状遺構の土塁…… 67
第65図　第1堀切…… 67
第66図　第1堀切…… 67
第67図　第1堀切…… 67
第68図　第1堀切の西斜面…… 67
第69図　第2堀切…… 67
第70図　第2堀切…… 68
第71図　第2堀切の北端…… 68

第72図　第２堀切…… 68
第73図　第３堀切…… 68
第74図　第３堀切北部・両側の土塁…… 68
第75図　第３堀切…… 68
第76図　第４堀切…… 68
第77図　第４堀切…… 68
第78図　第１土塁…… 69
第79図　第２土塁…… 69
第80図　通路状遺構…… 69
第81図　溝状遺構…… 69
第82図　第１腰郭北部…… 69
第83図　第１腰郭中部…… 69
第84図　第１腰郭東部・角柱は三角点…… 69
第85図　第２腰郭西部…… 69
第86図　第２腰郭東部…… 70
第87図　第３腰郭西端…… 70
第88図　第３腰郭中央部…… 70
第89図　第３腰郭南端…… 70
第90図　第４腰郭…… 70
第91図　第５腰郭…… 70
第92図　第５腰郭…… 70
第93図　第６腰郭…… 70
第94図　第７腰郭…… 71
第95図　第８腰郭北端…… 71
第96図　第８腰郭中央部…… 71
第97図　第９腰郭…… 71
第98図　第10腰郭北端…… 71
第99図　第10腰郭東部…… 71
第100図　第10腰郭中部 …… 71
第101図　第10腰郭西部 …… 71
第102図　第10腰郭西部 …… 72
第103図　第10腰郭西端 …… 72
第104図　第11腰郭 …… 72
第105図　第11腰郭 …… 72
第106図　第12腰郭 …… 72
第107図　第12腰郭 …… 72
第108図　第13・14腰郭 …… 72
第109図　第13・14腰郭 …… 72
第110図　第15腰郭 …… 73

第111図　第16腰郭 …… 73
第112図　第17腰郭 …… 73
第113図　第18腰郭 …… 73
第114図　第19腰郭 …… 73
第115図　第20腰郭 …… 73
第116図　第21腰郭 …… 73
第117図　第22腰郭 …… 73
第118図　第１トレンチ調査前状況 …… 74
第119図　第１トレンチ遺構確認状況 …… 74
第120図　第２トレンチ調査前状況 …… 74
第121図　第２トレンチ遺構確認状況 …… 75
第122図　第２トレンチ西南壁断面 …… 75
第123図　第３トレンチ調査前状況 …… 75
第124図　第３トレンチ遺構確認状況 …… 76
第125図　第４トレンチ調査前状況 …… 76
第126図　第４トレンチ遺構確認状況 …… 76
第127図　第５トレンチ調査前状況 …… 77
第128図　第５トレンチ遺構確認状況 …… 77
第129図　第５トレンチ北壁断面 …… 77
第130図　第６トレンチ調査前状況 …… 78
第131図　第６トレンチ調査前状況 …… 78
第132図　第６トレンチ遺構確認状況 …… 78
第133図　第６トレンチ遺構確認状況 …… 79
第134図　第６トレンチ・溝状遺構確認状況 …… 79
第135図　第７トレンチ調査前状況 …… 79
第136図　第７トレンチ遺構確認状況 …… 80
第137図　第７トレンチ・ピット確認状況 …… 80
第138図　第８トレンチ調査前状況 …… 80
第139図　第８トレンチ遺構確認状況 …… 81
第140図　第８トレンチ・掘立柱建物跡確認状況 …… 81
第141図　第８トレンチ・整地層確認状況 …… 81
第142図　第８トレンチ・整地層断ち割り部分断面 …… 82
第143図　第８トレンチ・石核SG44出土状況 …… 82
第144図　第９トレンチ調査前状況 …… 82
第145図　第９トレンチ遺構確認状況 …… 83
第146図　第９トレンチ・中世陶器SG128出土状況 …… 83
第147図　第10トレンチ調査前状況 …… 83
第148図　第10トレンチ確認状況 …… 84
第149図　第11トレンチ調査前状況 …… 84

第150図　第11トレンチ遺構確認状況 …… 84
第151図　第11トレンチ遺構確認状況 …… 85
第152図　第12トレンチ調査前状況 …… 85
第153図　第12トレンチ確認状況 …… 85
第154図　第13トレンチ調査前状況 …… 86
第155図　第13トレンチ調査前状況 …… 86
第156図　第13トレンチ遺構確認状況・土塁部分 …… 86
第157図　第13トレンチ遺構確認状況 …… 87
第158図　第13トレンチ・土塁部分断面 …… 87
第159図　第13トレンチ・中世陶器SG120・SG121出土状況 …… 87
第160図　第13トレンチ・中世陶器SG118出土状況 …… 88
第161図　第13トレンチ・中世陶器SG129出土状況 …… 88
第162図　第13トレンチ・剥片SG37出土状況 …… 88
第163図　第14トレンチ調査前状況 …… 89
第164図　第14トレンチ遺構確認状況 …… 89
第165図　第15トレンチ調査前状況 …… 89
第166図　第15トレンチ確認状況 …… 90
第167図　第16トレンチ調査前状況・主郭西側土塁 …… 90
第168図　第16トレンチ調査前状況・第１堀切部分 …… 90
第169図　第16トレンチ調査前状況・第１堀切部分 …… 91
第170図　第16トレンチ遺構確認状況・主郭部分 …… 91
第171図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切東斜面 …… 91
第172図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切底部 …… 92
第173図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切西斜面 …… 92
第174図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切西斜面の土塁 …… 92
第175図　第16トレンチ遺構確認状況・副郭部分 …… 93
第176図　第16トレンチ・第１堀切底部断面 …… 93
第177図　第16トレンチ・第１堀切西斜面中間部断面 …… 93
第178図　第17トレンチ調査前状況 …… 94
第179図　第17トレンチ確認状況 …… 94
第180図　第18トレンチ調査前状況 …… 94
第181図　第18トレンチ確認状況 …… 95
第182図　第19トレンチ調査前状況 …… 95
第183図　第19トレンチ遺構確認状況 …… 95
第184図　第20トレンチ調査前状況 …… 96
第185図　第20トレンチ遺構確認状況 …… 96
第186図　第21トレンチ調査前状況・第２堀切東斜面 …… 96
第187図　第21トレンチ調査前状況・第３堀切西斜面 …… 97
第188図　第21トレンチ遺構確認状況・副郭土塁部分 …… 97

第189図　第21トレンチ遺構確認状況・第２堀切西斜面 …… 97
第190図　第21トレンチ遺構確認状況・第１土塁部分 …… 98
第191図　第21トレンチ遺構確認状況・第２土塁部分 …… 98
第192図　第21トレンチ遺構確認状況・第３堀切東斜面 …… 98
第193図　第21トレンチ遺構確認状況・第３堀切西斜面 …… 99
第194図　第21トレンチ・第２堀切断面 …… 99
第195図　第21トレンチ・第２堀切底部断面 …… 99
第196図　第21トレンチ・第３堀切底部断面 …… 100
第197図　第21トレンチ・副郭土塁断ち割り状況 …… 100
第198図　第21トレンチ・副郭土塁下の砥石SG135出土状況 …… 100
第199図　第21トレンチ・第１土塁と第２土塁の断ち割り状況 …… 101
第200図　第21トレンチ・副郭土塁下の炭化物出土状況 …… 101
第201図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況 …… 101
第202図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況 …… 102
第203図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況 …… 102
第204図　第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパー SG19出土状況 …… 102
第205図　第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパー SG27出土状況 …… 103
第206図　第21トレンチ・副郭土塁の断ち割り断面 …… 103
第207図　第21トレンチ・第１土塁の断ち割り断面 …… 103
第208図　第21トレンチ・第２土塁の断ち割り断面 …… 104
第209図　第21トレンチ・副郭土塁下の愛島軽石層上面 …… 104
第210図　第21トレンチ・第１土塁と第２土塁下の愛島軽石層上面 …… 104
第211図　Ａ区の調査前状況 …… 105
第212図　Ａ区・土壙 …… 105
第213図　Ａ区・土壙断面 …… 105
第214図　Ａ区深掘トレンチ・４層からの縄文土器SG91-1出土状況 …… 106
第215図　Ａ区深掘トレンチ・４層からの剥片SG54出土状況 …… 106
第216図　Ａ区深掘トレンチ・川崎スコリア層上面 …… 106
第217図　Ａ区深掘トレンチの最終状況 …… 107
第218図　Ａ区深掘トレンチ・南壁断面 …… 107
第219図　Ａ区深掘トレンチ・西壁断面 …… 107
第220図　第６トレンチ・第８トレンチ・櫓状遺構遺物 …… 108
第221図　第９トレンチ・第13トレンチ遺物 …… 109
第222図　第13トレンチ遺物 …… 110
第223図　第21トレンチの副郭土塁下遺物 …… 111
第224図　第21トレンチの副郭土塁下・第１土塁遺物 …… 112
第225図　Ａ区遺物 …… 113
第226図　Ａ区表採遺物 …… 114
第227図　発掘調査風景 …… 115

（1）調査に至る経過

平成５年９月、柴田郡旧富岡村（現、村田町菅生地区・川崎町支倉地区）が特定農山村法による指定を受け、これに伴って平成７年12月に菅生地区農林業等活性化推進連絡会議が発足した。その連絡会議により、菅生地区の県営中山間地域総合整備事業ほ場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事計画が平成９年６月に策定され、菅生館跡の中央部を公園にするという事業が計画された（文献１）。これにより、農村公園の概要設計図が作成された。この図面により、宮城県大河原地方振興事務所・宮城県教育庁文化財保護課・村田町教育委員会の三者間で、平成10年４月８日と平成15年７月９日に現地協議を行った。この結果、館跡の遺構を保存するように計画が変更され、実施設計図が作成された。平成16年９月２日、実施設計図に基づき３回目の現地協議を行い、農村公園内の管理用道路・遊歩道の階段部分・四阿・駐車場部分について遺構の確認調査を行うこととなった。

（2）調査要項

遺 跡 名：菅生館跡（遺跡登録番号07025）

調査場所：宮城県柴田郡村田町大字菅生字舘

遺跡略号：ＳＧ

調査原因：県営中山間地域総合整備事業ほ場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事

調査面積：445㎡

調査期間：平成17年８月８日～平成17年10月21日

調査主体：村田町教育委員会

調査担当：村田町教育委員会

調 査 員：石黒伸一朗

（3）位置と歴史的環境

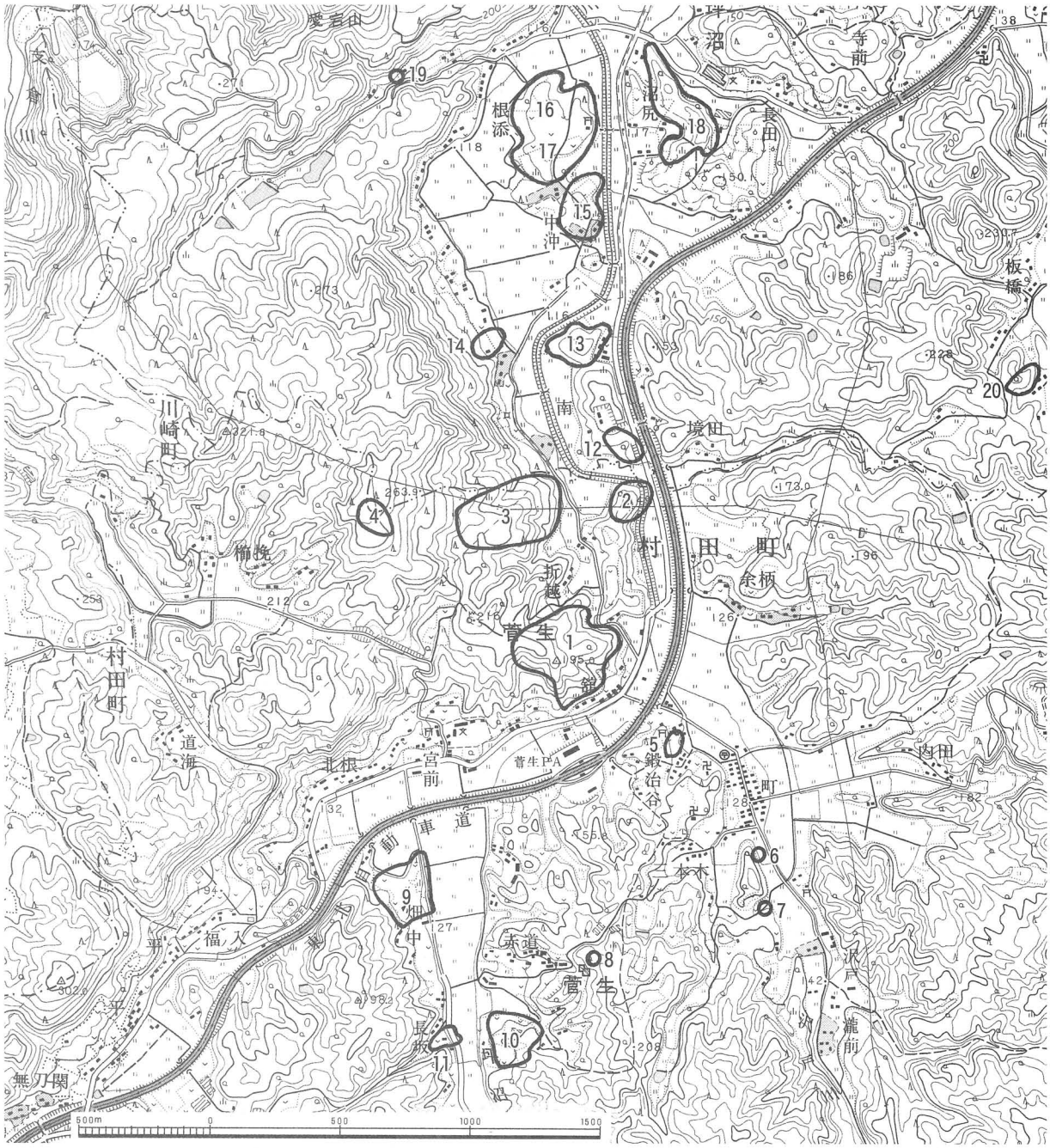
菅生館跡は、村田町の最北部、仙台市太白区との境界近くにあり、東北自動車道菅生パーキングエリアの西北西約500mに位置している。この付近は、高舘丘陵から派生した低い丘陵が連なる地形で、ちょうど仙台市・村田町・川崎町の市町界がある標高321mの低い山から、東南方向へ延びた狭い尾根上に築城されている。菅生館跡の下には坪沼川が流れており、この川は北方へ流れ仙台市太白区坪沼字赤石において名取川に合流するので、この地域は名取川水系に属している。

菅生館跡の周辺からは旧石器の出土は確認されていない。しかし、村田町小泉付近にある旧石器時代後期の新川流域遺跡群において、石器の素材に用いられている玉髄と同様の原石が数箇所で見つかっており、川崎スコリア層などのテフラも確認されているので、将来的に旧石器時代の遺跡が発見されることも十分予想される。

縄文時代の遺跡は比較的多く、高寺下遺跡（早期）、鍛冶屋遺跡、宮前遺跡、樽火遺跡、長坂遺跡（後期～晩期）、境田遺跡、中沖遺跡、館前東遺跡（早期）がある。弥生時代の遺跡としては、高寺下遺跡、樽火遺跡の２箇所がある。古墳時代の遺跡や古墳は確認されていない。

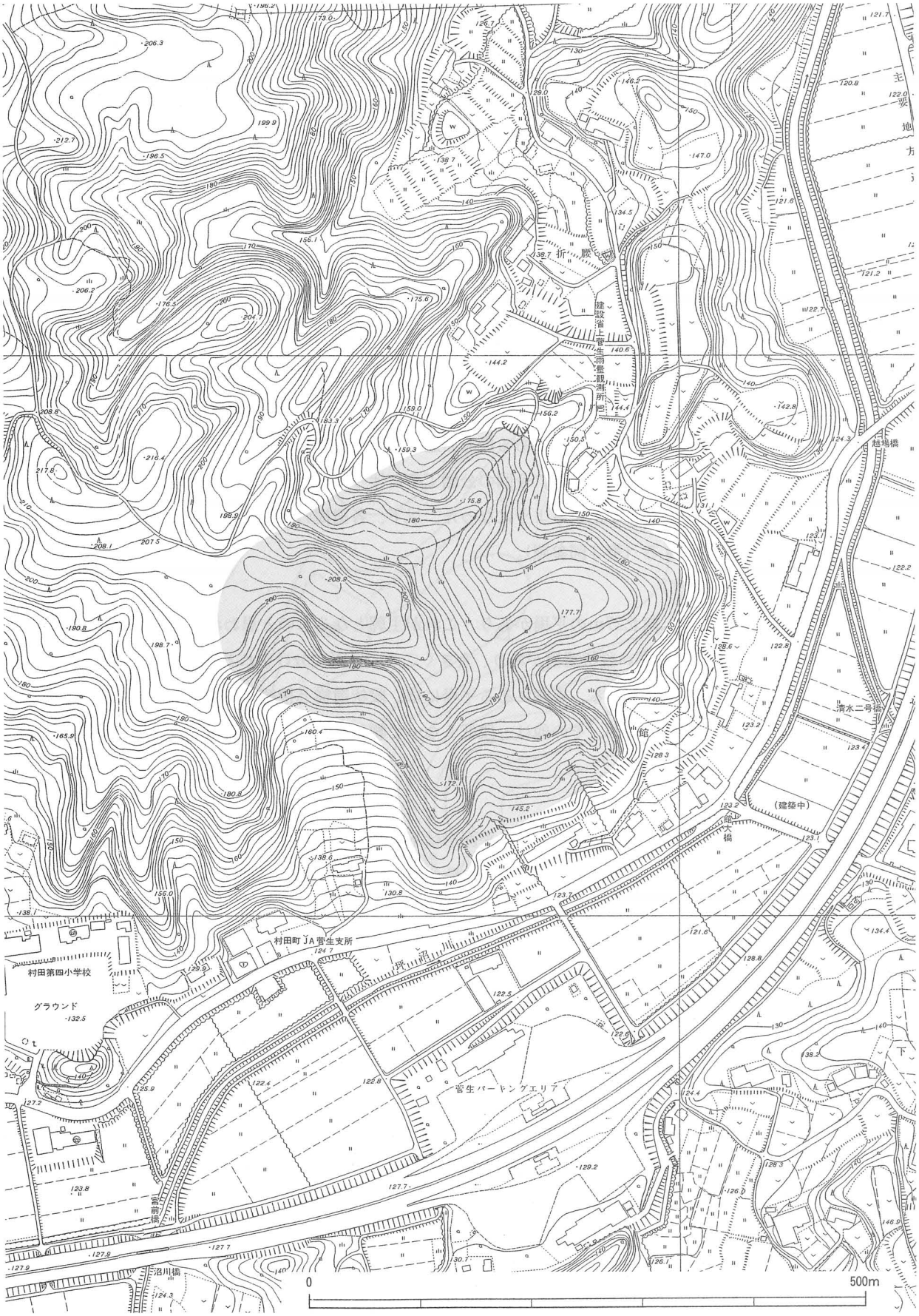
古代または平安時代の遺跡としては、高寺山遺跡、鍛冶屋遺跡、宮前遺跡、樽火遺跡、右京内遺跡、南沖東遺跡、中沖遺跡、館前東遺跡、沼尻遺跡がある。高寺山遺跡は、標高263mの高寺山の山頂付近にあり、山岳寺院の跡と思わる大きな段状の遺構が確認されており、山頂には観音堂がある（文献２）。

中世の館跡としては、巻渕館跡と根添館跡がある。巻渕館跡は、菅生館跡の東北方約650mにあるが、明確な館跡の遺構は確認できない。根添館跡は、巻渕館跡の北方約1500mに位置し、高さ約20mの丘陵上に築造された平



No.	遺跡名	種別	年代	No.	遺跡名	種別	年代
1	菅生館跡	城館跡	中世	11	長坂遺跡	散布地	縄文後・晩
2	巻渕館跡	城館跡	中世	12	境田遺跡	散布地	縄文
3	高寺下遺跡	散布地	縄文早・弥生	13	右京内遺跡	散布地	平安
4	高寺山遺跡	寺院館	平安	14	南沖東遺跡	散布地	平安
5	鍛冶谷遺跡	散布地	縄文・古代	15	中沖遺跡	散布地	縄文・平安
6	源蔵沢板碑	板碑	中世	16	館前東遺跡	散布地	縄文早・平安
7	源蔵沢遺跡	製鉄	中近世	17	根添館跡	城館跡	中世
8	大門岬塚	塚	不明	18	沼尻遺跡	散布地	平安
9	宮前遺跡	散布地	縄文後・平安	19	愛宕神社登口板碑	板碑	中世
10	樽火遺跡	散布地	縄文・弥生・古代	20	上前十三塚	塚	不明

第１図　菅生館跡位置図（縮尺1/25,000）



第２図　菅生館跡周辺地形図（縮尺1/5,000）

山城である。北方に東西・南北とも80mの主郭が、その南側に副郭がある。主郭と副郭の間には、幅５m、深さ３mの大きな堀切がみられる。主郭の周囲には、数段の腰郭が巡っている。館主は不明である（文献３）。中世から近世の製鉄遺跡としては、源蔵沢遺跡がある。板碑は、源蔵沢板碑と愛宕神社登口板碑の二基がある。塚は、大門岫塚と上前十三塚の２箇所がある。

（４）菅生館跡の概要と館主

①菅生館跡の概要

菅生館跡は連郭式の山城で、その大きさは東西220m、南北210mある。最も高い地点の標高は206m、館跡から東南方向の東北自動車道付近にある水田面との比高差は88mである。館跡の現状は、雑木林や杉の植林、畑跡などとなっており保存状態は非常に良く、各遺構がはっきりと残っている。主郭の西南側から東側および東北側にかけての斜面には、22箇所の腰郭が確認された。これらの腰郭には、任意に第１腰郭から第22腰郭と名称を付した。主郭と最も下にある第14腰郭との比高差は33mである。この館跡へ登るには、以前は県道仙台村田線沿いの、旧ＪＡ村田町菅生支所の建物から東北方にある民家の近くを通って登る小道があったといわれるが、現在は雑木や笹藪に覆われており登ることは難しい。今回の公園工事に伴って、館跡の北方を迂回し館跡西側へと登る舗装道路が造られ、簡単に登ることが出来るようになった。以下、各遺構の調査前の状況について、現地での観察と概要図をもとにして説明する（第３図参照）。

【主郭】（写真図版第48～56図）

館跡の中央部に、東西62m、南北27mの平場があり、これが主郭となるものと思われる。主郭中央部の標高は201mで、やや東側に斜めに走る低い段状遺構があり、大きく二つの区画に分けられる。西側の平場には、南から西側にかけて低い土塁が巡らされている。東側にある平場には、段状遺構と接続するように南辺に低い土塁がある。主郭の西側は大きな堀切であるが、その他は一段低くなって腰郭が巡っている。腰郭から主郭に登る道は、確認できない。

【副郭】（写真図版第57～60図）

主郭の西方、第１堀切で隔てられた位置にある。平面形は不整形な台形を呈しており、大きさは東西21m、南北23mあり、ほぼ平坦な平場となっている。西側のみに長さ22m、幅５m、高さ1.2mの土塁がある。標高は、主郭よりも若干高く206mある。

【櫓状遺構】（写真図版第61～64図）

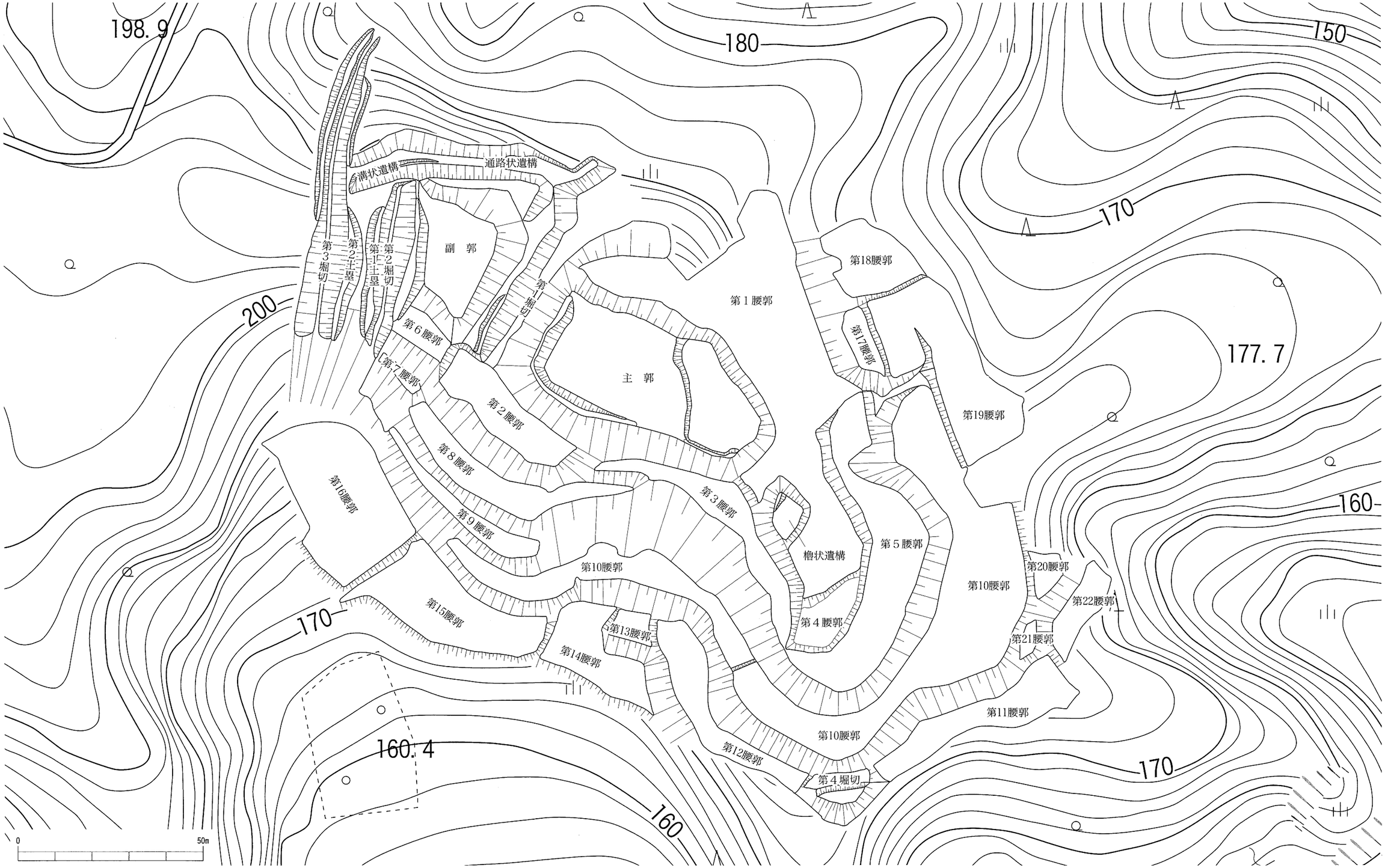
主郭の東側に、平面および立面ともに台形の遺構がある。この大きさは、底辺は東西13m、南北19m、上辺は東西８m、南北11mある。高さは２mあり、小さな平場がみられるが、この平場は南側に傾斜している。西側のみに低い土塁がある。土塁は南北６m、幅１mある。この小規模な土塁は、主郭の東南角の土塁と対置しているように見える。

【第１堀切】（写真図版第65～68図）

主郭と副郭との間には、長さ45m、幅22m、深さ3.5mの大きな堀切があり、これを第１堀切とする。この第１堀切の副郭側には中間に段があり、小規模な堀切と部分的に小さな土塁が設けられている。第１堀切の南端は、第２腰郭と接続する。北側は、自然の傾斜面に続き堀切の北端は明瞭ではない。

【第２堀切・第３堀切】（写真図版第69～75図）

副郭の西側には、南北方向に二本の堀切があり東側のものを第２堀切、西側のものを第３堀切とする。第２堀切は、長さ43m、幅7.3m、深さ2.6mある。第３堀切は、長さ82m、幅9.5m、深さ3.1mあり、中央付近から北



第３図　菅生館跡概要図（縮尺1/1,000）

方にかけては両側に低い土塁がみられる。第３堀切の西方は、尾根上の緩やかな自然斜面で、館跡に関する遺構などは確認できない。

【第４堀切】（写真図版第76・77図）

館跡の東南端に、小さな尾根を分断した堀切が造られている。この堀切の規模は、東西18m、南北５ｍあり、第10腰郭から堀切底部までの比高差は3.4mである。底部の幅は３ｍで、ほぼ平坦である。東西にある腰郭との間には段がみられる。

【第１土塁・第２土塁】（写真図版第78・79図）

第２堀切と第３堀切の間には、平行する二本の低い土塁があり、東側の土塁を第１土塁、西側の土塁を第２土塁とする。第１土塁は、長さ35m、幅4.6m、高さ0.4mある。北端は、第２堀切の角から６ｍほど南で無くなり、南端は自然の急斜面へと続いている。第２土塁は、長さ36m、幅4.2m、高さ0.5mある。北端は、第３堀切の中央付近で無くなり、南端は第１土塁と同様に自然の急斜面へと続いている。

【通路状遺構】（写真図版第80図）

副郭の北側から第３堀切にかけては、東西方向に長さ48m、幅1.2～2.8mの通路状遺構がある。西端は第３堀切と接続するが、東端は自然斜面へと続いている。北側には幅3.2～5.7mの人工的な法面があり、それは自然斜面へと続いている。

【溝状遺構】（写真図版第81図）

通路状遺構の西半分に平行する溝状遺構がみられる。東西23m、幅2.5m、深さ0.4mある。南側は、幅2.8mの人工的な法面がある。

【第１腰郭】（写真図版第82～84図）

主郭の北側から東南側を取り囲むような腰郭で、菅生館跡の中では第10腰郭に次いで大きく、平面形は鉤状を呈しており、東西75m、南北108m、最大幅は41mある。主郭の北側から東側にかけては、東北方へやや傾斜しているが、東側はほぼ平坦である。櫓状遺構の中心部から東南方９ｍに、館山三等三角点（Ｘ＝－202966.230・Ｙ＝－6020.685）が設置されている。

【第２腰郭】（写真図版第85・86図）

主郭の西南側に位置している。平面形は長方形で、東西37m、南北18m、最大幅は12mある。西北側はやや傾斜しているが、中央部から東南にかけてはほぼ平坦である。東端には安山岩の大きな角礫が並んでおり、その角礫の中には矢穴の痕跡が認められるものが数個ある。現在は杉が植えられているが、以前は畑であったといわれており、この角礫は耕作の邪魔になるので、動かすために矢穴を開けて割り、現在の場所に寄せ集められたものと思われる。

【第３腰郭】（写真図版第87～89図）

主郭と櫓状遺構の南側に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西49m、南北50m、最大幅は11mある。東南方へやや傾斜しているが、全体的にはほぼ平坦である。安山岩の大きな角礫が数個ある。

【第４腰郭】（写真図版第90図）

第１腰郭の南端、一段低いところに位置している。平面形は台形を呈しており、東西18m、南北13m、最大幅は11mある。南方へやや傾斜している。

【第５腰郭】（写真図版第91・92図）

第１腰郭と第４腰郭の東に位置している。平面形はＳ字状を呈しており、東西37m、南北81m、最大幅は15mある。中央部がやや高く、北部は東北方へ南部は東南方へやや傾斜している。

【第６腰郭】（写真図版第93図）

副郭南側の斜面下に位置する小さい腰郭である。平面形は長方形で、東西16m、南北10m、最大幅は８ｍある。杉が植林されており、第２堀切から第２腰郭へ向かう山道が通っている。

【第７腰郭】（写真図版第94図）

第６腰郭の南側、斜面下に位置している小さい腰郭である。平面形は長方形で、東西12m、南北10m、最大幅は４ｍある。南方へやや傾斜している。

【第８腰郭】（写真図版第95・96図）

第２腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西60m、南北30m。最大幅は10mあるが、東部は幅が４～５ｍと狭くなる。東南方へやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。

【第９腰郭】（写真図版第97図）

第８腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形は細長い弧状を呈しており、東西38m、南北34m、最大幅は東部にあり７ｍを測るが、西端へ行くにしたがって次第に狭くなる。東南方へやや傾斜しているが、全体的に見るとほぼ平坦である。

【第10腰郭】（写真図版第98～103図）

菅生館跡の中で最大の腰郭である。第３腰郭・第５腰郭・第９腰郭の一段下に位置しており、上にある腰郭との間は急斜面となっている。平面形は不正なＳ字状を呈しており、東西156m、南北101mある。最大幅は、東部にあり23mを測る。中央部の幅は12m、西部の幅は７ｍである。東部は東方へ、中央部と西部は南方へ、それぞれやや傾斜しているが、全体的に見るとほぼ平坦である。中央部から西側に小さな段が一箇所認められるが、これは後世のものと思われる。

【第11腰郭】（写真図版第104・105図）

第10腰郭東部の一段下に位置している。平面形は細長い長方形で、東西54m、南北32m、最大幅は15mある。東南方へやや傾斜している。東部は小さい尾根へと続いている。

【第12腰郭】（写真図版第106・107図）

第10腰郭中部の西南側、急斜面下に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西37m、南北46m、最大幅は11mある。全体的にほぼ平坦である。中ほどに低い段が見られるが、これは後世のものと思われる。

【第13腰郭】（写真図版第108・109図）

第12腰郭の西側、一段下に位置している。非常に小さい腰郭で、平面形は長方形を呈しており、東西11m、南北８ｍある。

【第14腰郭】（写真図版第108・109図）

第10腰郭西部および第13腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形はＬ字形を呈しており、東西30m、南北29m、最大幅は22mある。南方へやや傾斜している。

【第15腰郭】（写真図版第110図）

第10腰郭西端の南側、斜面下に位置している。平面形は不正形で、東西55m、南北30m、最大幅は19mある。西南方へ傾斜している。

【第16腰郭】（写真図版第111図）

第９腰郭の西南側、急斜面下に位置している。平面形は、隅丸の長方形を呈しており、東西41m、南北43m、最大幅は28mある。南方へやや傾斜している。この腰郭の西南側にも、東西25m、南北28mの、三角形を呈する平場が認められるが、腰郭かどうかは不明である。

【第17腰郭】（写真図版第112図）

第１腰郭中央部の東側、急斜面下に位置している。平面形は長方形に近く、東西10m、南北18m、最大幅は７mある。東方へやや傾斜している。

【第18腰郭】（写真図版第113図）

第１腰郭中央部の東側、急斜面下に位置している。平面形は正方形に近く、東西27m、南北21m、最大幅は21mある。東方へやや傾斜している。

【第19腰郭】（写真図版第114図）

第17腰郭および第10腰郭北端の斜面下に位置している。平面形は長方形に近いが、中ほどに段がある。東西42m、南北51m、最大幅は23mある。東方へやや傾斜している。この腰郭の東側に、東西20m、南北23mの平場が認められるが、腰郭かどうかは不明である。

【第20腰郭】（写真図版第115図）

第20腰郭東部の斜面下に位置している。小さな腰郭で、平面形は台形を呈しており、東西８m、南北12m、最大幅は７mある。

【第21腰郭】（写真図版第116図）

第20腰郭東部の斜面下に位置している。非常に小さな腰郭で、平面形は菱形を呈しており、東西４m、南北11mある。

【第22腰郭】（写真図版第117図）

第20腰郭および第21腰郭の東側、急斜面下に位置している。平面形は菱形を呈しており、東西14m、南北27m、最大幅は８mある。この腰郭の東方は、急な沢となっており地滑りが発生している。

②菅生館の館主

菅生館跡についての最も古い記録は、延宝年間（1673～1681）の『仙台領古城書上』である（文献４）。これには、「山　菅生城　同　四十間　三十間　城主菅生助八郎」と記されている。同様の記述は、『仙台領古城書立之覚』にもみられ、「山　菅生城　東西四十間　南北三十間　右城主菅生助八ト申者御座候此子孫家中ニ有之候ノ名聢ト相知不申菅生古城ト申伝候」とある（文献５）。また、安永６年（1777）の『柴田郡菅生村風土記御用書出』には、「古内館　竪九拾間　横七拾間　右御城主菅生助八郎様之由御座候得共何歳之頃御住居候哉申伝ニ茂年月相知不申候」と記されている（文献６）。これらによると、菅生館の館主は菅生助八郎である。『仙台領古城書立之覚』には「菅生助八」と記されているが、これは書き間違いと思われる。菅生館のことを、『仙台領古城書上』と『仙台領古城書立之覚』はともに「菅生城」としているが、『柴田郡菅生村風土記御用書出』は「古内館」と書かれており、館の大きさにも違いがみられる。

菅生氏は平士で、『伊達世臣家譜』によると、下野国国主小山下野守高朝の後裔といい、小山氏が滅亡した後、柴田郡菅生村に移り住んで菅生を称したという（文献７）。菅生家の祖は伯耆で、伯耆の子の与作は相馬氏との戦いの際、宇多郡坂本で戦死した。その子の助八郎は、天正18年（1590）の宮崎の役で軍功をあげた。文禄４年（1595）に伊達政宗から菅生村に100石を給された。その後、栗原郡刈敷村（現在の栗原市志波姫刈敷）に改められた。助八郎の子の助六郎の跡は、常陸国筑波郡鹿島社の神主中島氏の子が継いで定朝と称し300石の禄となった（文献８）。菅生氏にかかわる古文書は非常に少ないが、天文12年（1543）の大崎義宣起請文には「菅生ひこ三郎」（文献９）、元和９年（1623）の伊達政宗山追人数書には「菅生助八郎」の名が見えている（文献10）。

『柴田郡誌』には、菅生氏は維新前まで菅生村の領主であるとともに菅生館の館主で、菅生助八郎は安倍宗任の

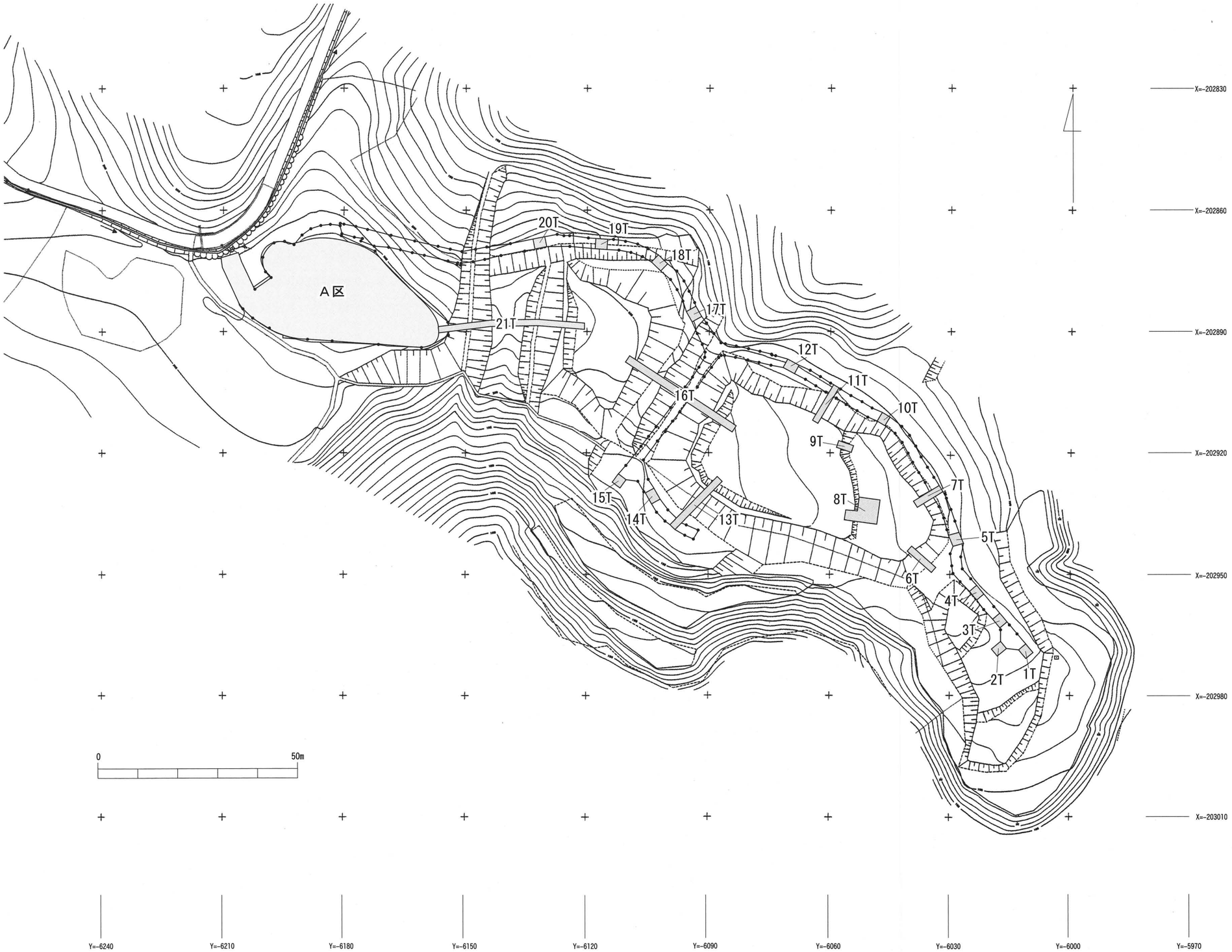
部下であったが八幡太郎に殺されたという言い伝えが載せられている（文献２）。安倍宗任は、平安時代中頃の奥州在地の武将であるが、この言い伝えが何の資料に拠るのかは示されていないので不明である。このことは、『村田町史』にも引き継がれ、菅生館跡を平安時代頃のものとしている（文献11）。菅生館跡を最初に詳しく調査したのは紫桃正隆氏と思われ、本丸・二の丸・東曲輪などが描かれた略図を公表された（文献３）。紫桃氏のいう本丸は、本報告書の主郭、二の丸は第１腰郭から櫓状遺構にかけて、東曲輪は第10腰郭付近を指している。しかし、副郭や館跡西端にある第２・３堀切などについては、踏査されなかったのか略図には入っていない。

（５）調査の方法

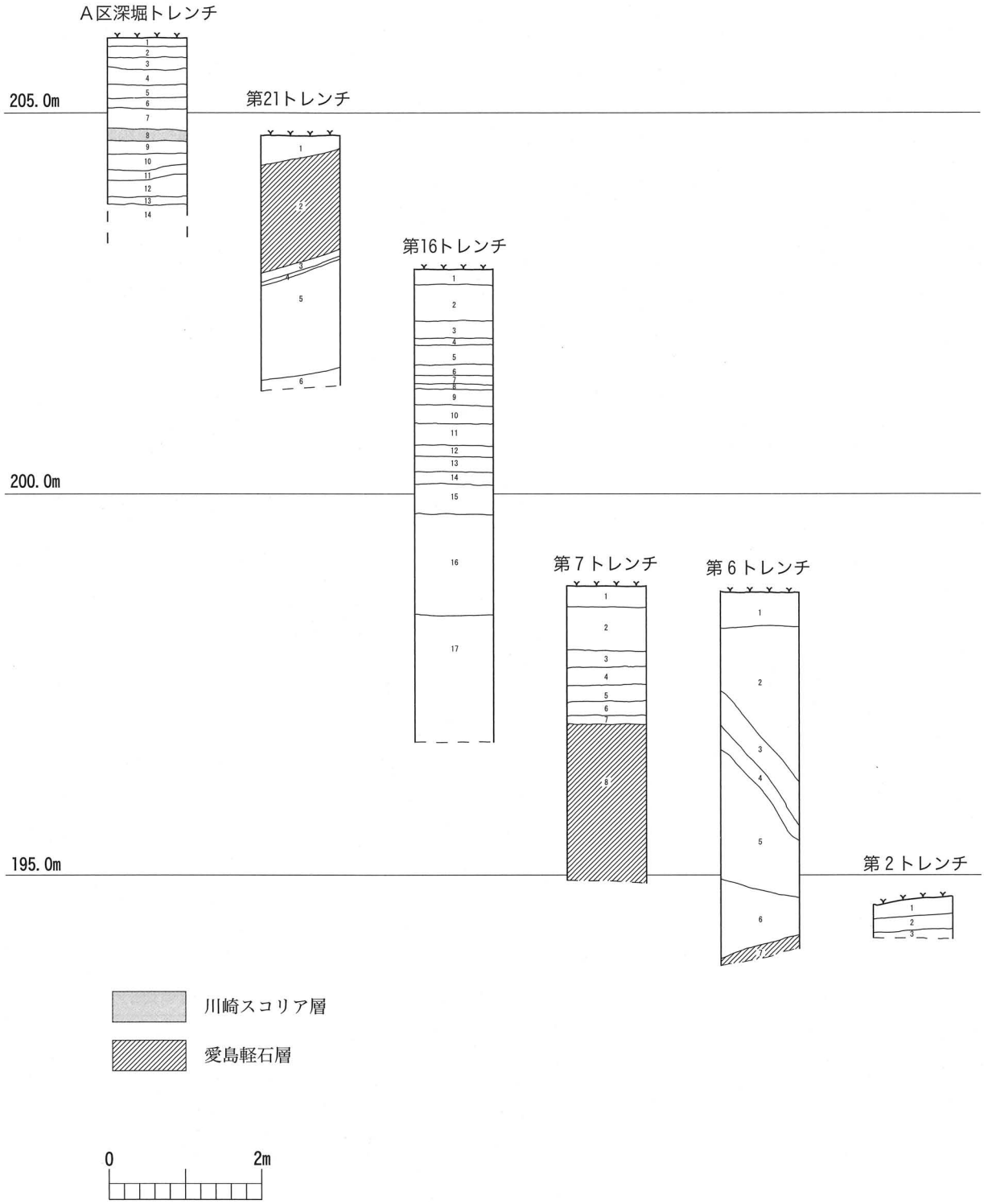
今回の調査目的は、館跡の中央部を公園として整備するために工事が行われる、遊歩道の階段部分・管理用道路・四阿・駐車場について、遺構の有無を確認することである。調査区名は、駐車場部分の範囲が広いのでＡ区とし、そのほかは東から西へ第１トレンチから第21トレンチとした。遊歩道の階段部分・作業用道路・四阿は、人力で表土を剥いで遺構の確認を行った。Ａ区のみは、重機を用いて表土を剥いで遺構確認を行った。基本的に各調査区では、表土を剥ぎ遺構が確認された時点で、記録を取って埋め戻した。しかし、調査区内に堀切があった場合には、堆積土をすべて除去し底面まで検出した。土塁の中で、副郭西側の土塁、第１土塁、第２土塁については、断ち割りを行い積み土の状況などを観察した。遊歩道の階段は、堀切や土塁、郭の斜面に設置され、全部で13箇所ある。階段の上下に郭があるので、郭の方へ任意に調査区を延長し、管理用道路と近接する階段については管理用道路の端まで延ばした。四つの階段が近接して作られるところは一つの調査区としたので、調査区は全部で７箇所となった。調査区名は、第６・７・９・11・13・16・21トレンチとした。第16トレンチおよび第21トレンチは、四つの階段が作られるところなので、長細い調査区になった。第21トレンチからは、副郭西側にある土塁下から石器類が出土したので、記録を取った後に遺物を取り上げた。その出土層の下層にも、石器類が含まれているかどうかを確認するために、愛島軽石層の上面まで掘り下げた。また、石器類が出土した地層はテフラと思われたので、自然科学分析用に土壌と炭化物を試料として採取した。管理用道路は、全長が303mあるので、任意に13箇所の調査区を設定した。これらの調査区名は、第１・２・３・４・５・10・12・14・15・17・18・19・20トレンチとした。調査区の大きさは、2.5m四方を基本としたが、部分的に拡張したところもある。四阿は、主郭中央部のやや東側を斜めに走る段状遺構の隣に建てられるため、段状遺構の上にも一部を拡張しＬ字形の調査区で第８トレンチとした。調査により、段状遺構は整地層があったので、一部を断ち割って断面の観察を行った。駐車場部分のＡ区では、西端で土壙が１基確認されたが、ここは公園の駐車場へ出入りする場所に当たり、削平される範囲に入っていたため、通常の調査を行った。また、Ａ区の南端に深掘トレンチを一箇所設定し、地山の層序を観察した。主郭を取り巻くように配置されている腰郭の中で、工事が行われない腰郭については公園工事が行われる腰郭は第１腰郭・第２腰郭・第４腰郭・第５腰郭の４箇所であるが、館跡の全容を知る必要があると思われたので、工事が行われない腰郭については土地所有者の許可を得て雑木や笹藪などの刈り払いを行い、300分の１で平面図を作成するとともに写真撮影を行った。測量原点は、Ａ区の北側に設定されていたＡ10杭（Ｘ＝－202859.253・Ｙ＝－6186.494）を使用した。各調査区の平面図および断面図は20分の１で作成した。写真は、35㎜カラーリバーサルフィルム、35㎜モノクロフィルムおよびデジタルカメラで随時撮影した。

（６）菅生館跡の地層

菅生館跡では、すべての調査区に対して共通する層位は認められなかった。多くの調査区では、表土を剥いだ段階で遺構が確認されたが、第１トレンチと第２トレンチでは３層上面、第14トレンチでは２層上面で遺構が確



第4図　調査区配置図（縮尺1/1,000）



第5図　層序模式図（縮尺1/80）

第２トレンチ

層位	土　色	土　質	備　考
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	炭化物を少量含む
3	5YR2/4　極暗褐色	シルト	赤褐土・明黄褐色土をブロック状に含む　遺構検出面

第６トレンチ

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2	7.5YR5/6　明褐色	シルト	
3	10YR8/3　浅黄橙色	粘土質性シルト	
4	10YR7/3　にぶい黄橙色	粘土	.
5	2.5YR4/6　赤褐色	礫	風化した安山岩
6	2.5YR4/6　赤褐色	礫	上層よりも少し灰色が強い　風化した安山岩
7	10YR6/6　明褐色	軽石	愛島軽石層（Ac-Md）

第７トレンチ

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	表土
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色のブロックを多量に含む　整地層
3	10YR2/1　黒色	シルト	旧表土
4	7.5YR4/6　褐色	シルト	
5	7.5YR5/6　明褐色	シルト	
6	7.5YR6/6　橙色	シルト	
7	7.5YR6/6　橙色	シルト	軽石層を含む　川崎スコリア層を粒状に含む
8	10YR7/6　黄橙色	軽石	愛島軽石層（Ac-Md）

第16トレンチ（第1堀切東壁面）

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2	7.5YR4/4　褐色	シルト	
3	7.5YR4/6　褐色	シルト	
4	7.5YR6/6　橙色	シルト	マンガン粒を多量に含む　全体的に白っぽい　砂礫を多く含む
5	7.5YR5/8　明褐色	粘土	
6	7.5YR8/4　浅黄橙色	シルト	砂粒を多く含む　マンガン粒を多く含む　全体的に白っぽい　4層と類似
7	7.5YR5/6　明褐色	粘土	
8	5YR4/6　赤褐色	シルト	マンガン粒を多く含む
9	7.5YR4/4　橙色	粘土	マンガン粒を多く含む　砂粒を含む
10	7.5YR4/3　橙色	粘土	マンガン粒を多く含む　砂粒を含む
11	7.5YR4/4　橙色	粘土	マンガン粒を少量含む　黄褐色のブロックを少し含む　砂粒を含む
12	7.5YR4/6　褐色	粘土	マンガン粒を少量含む　砂粒を含む
13	7.5YR8/3　浅黄橙色	粘土	マンガン粒を縞状に多量に含む
14	7.5YR5/6　明褐色	粘土	
15	2.5YR5/8　明赤褐色	シルト	白色の風化した岩片を多量に含む
16	10YR3/4　暗赤色	シルト	岩が風化した層　白色の風化した岩片をブロック状に含む
17	10YR4/8　赤色	シルト	7.5YR5/6明褐色シルトの互層　すじ状に黒い粒子の層を多く含む

第21トレンチ（第3堀切東壁面）

層位	土　色	土　質	備　考
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2	7.5YR7/8　黄褐色	軽石	黒色土の塊を多く含む　角礫凝灰岩片を多く含む　愛島軽石層（Ac-Md）
3	7.5YR7/8　黄橙色	粗砂	上層よりも黒い塊を多量に含む　白い岩片を多く含む
4	10YR7/1　灰白色	粗砂	
5	7.5YR5/6　明褐色	粘土	暗褐色のマンガンの砂礫を多く含む
6	7.5YR4/6　褐色	砂質シルト	

A区深掘トレンチ

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土をブロック状に含む
3	7.5YR4/4　褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む　縄文土器片・剥片・砕片を含む
4	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	縄文土器片・剥片・砕片を含む
5	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	上層よりやや黄色
6	10YR4/6　褐色	シルト	上層よりやや黄色
7	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	0.5cm～２cmの川崎スコリアの塊を含む
8	5YR5/6　明赤褐色 10YR6/6　明黄褐色	スコリア	川崎スコリア層（Za-Kw）
9	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	0.5cmの角閃石を少量含む　0.5cm～2.0cmのスコリアの塊を少量含む
10	10YR6/6　明黄褐色	粘土	0.5cm～1.5cmの青灰色角礫を少量含む　0.1cm～0.3cmのマンガン粒を少量含む
11	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	0.2cm～1.5cmの青灰色角礫を多量に含む　0.1cmのマンガン粒を多量に含む
12	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	0.3cm～1.5cmの青灰色角礫を多量に含む　0.05cmマンガン粒を多量に含む
13	10YR7/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	0.1cm～0.5cmの青灰色角礫を多量に含む　0.05cm以下のマンガン粒を多量に含む
14	10YR7/4　にぶい黄橙色	砂礫	0.2cm～0.5cmの青灰色角礫を多量に含む

第１表　層序模式図土層註記表

認された。第３図は、菅生館跡の層序模式図である。第６・７・16・21トレンチについては、遺構の壁面で観察した地山の地層と、Ａ区深掘トレンチの地層について説明する。第６トレンチは、主郭の東側斜面で観察した。２層から４層はテフラと思われる。５層と６層は、安山岩が風化した硬い層である。３層から６層にかけては北側に傾斜している。７層は愛島軽石層（Ａｃ―Ｍｄ）で、層厚は20cm以上あり、上部の層とは逆に北側へ上がっている。第７トレンチは、主郭の東北側斜面で観察した。各層は水平な堆積層である。２層は整地層、３層は旧表土層で、４層から７層はテフラと思われる。８層は愛島軽石層で、層厚は198cm以上ある。第16トレンチは、第１堀切の東側斜面で観察した。各層は水平な堆積層である。２層から８層はテフラと思われる。16層と17層は、岩石が風化したような層で非常に硬い。ここでは愛島軽石層は確認できなかった。第21トレンチは、第３堀切の東側斜面で観察した。２層以下は北側にやや傾斜している。２層は愛島軽石層で、層厚は136cmである。第２堀切においても、厚い愛島軽石層が認められた。Ａ区深掘トレンチの西壁断面は、各層がほぼ水平な堆積層で、ほとんどがテフラと思われる。３層と４層には、縄文土器や石器などが僅かに包含されていた。８層は川崎スコリア層（Ｚａ―Ｋｗ）で、層厚は13cmある。10層以下は、非常に締まりが強く、最下層の14層は砂礫層となる。

（７）調査結果

①第１トレンチ（図版第６図：写真図版第118・119図）

櫓状遺構の東側にある第１腰郭の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約35cm掘り下げた、３層上面で遺構が確認された。３層は10YR5/8黄褐色シルトである。遺構はピットが７箇所で、直径は15～50cm、円形や楕円形を呈しており、一部重複しているものもあったが、柱痕が認められるものは無かった。遺物の出土は無かった。

②第２トレンチ（図版第７図：写真図版第120～122図）

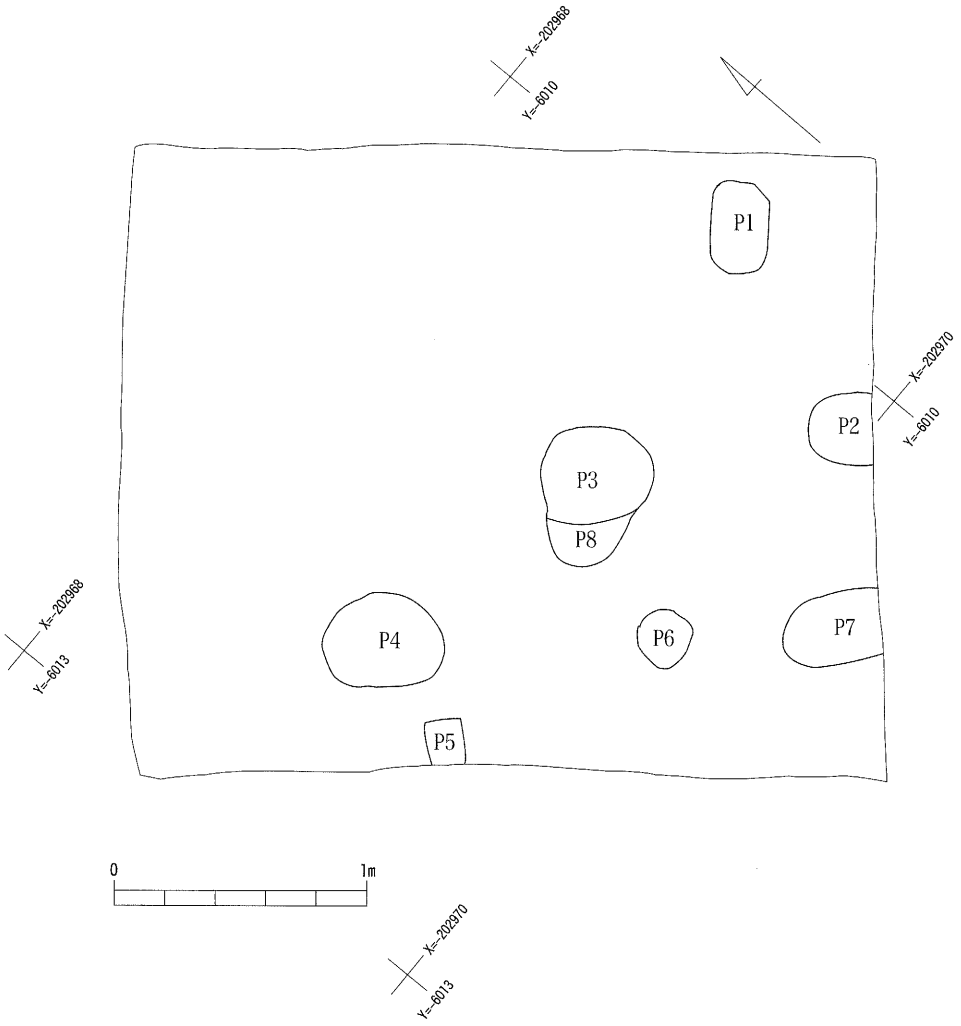
第１腰郭に設置されている三角点のすぐ傍の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約40cm掘り下げた。３層上面から遺構が確認された。３層は5YR2/4極暗赤褐色シルトで、赤褐色と明黄褐色シルトをブロック状に含む層である。遺構はトレンチの全面で確認され、重複しているものが多かった。溝状遺構２箇所、土壙２箇所、ピット12箇所を確認した。溝状遺構１は、調査区のほぼ中央で確認され、長さ170cm、幅10～30cmあり、ピット３を切っている。溝状遺構２は、調査区の北端で確認され、長さ30cm以上、幅25cmあり、ピット２およびピット３に切られている。１号土壙は、楕円形を呈しており、長径95cm、短径42cm以上ある。２号土壙も楕円形を呈しているものと思われ、長径85cm、短径56cm以上ある。ピットは、直径25～60cmで、円形や楕円形を呈していたが、柱痕が認められるものは無かった。遺物の出土は無かった。

③第３トレンチ（図版第８図：写真図版第123・124図）

櫓状遺構の東北にある第１腰郭の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約40cm掘り下げた２層上面で遺構が確認された。２層は7.5YR5/8明褐色シルトである。中央より東南側に傾斜していたが、これが人工なのか自然の傾斜なのかははっきりしなかった。南北方向の溝状遺構が１箇所確認された。長さは140cm以上、幅は30cmあった。遺物の出土は無かった。

④第４トレンチ（図版第９図：写真図版第125・126図）

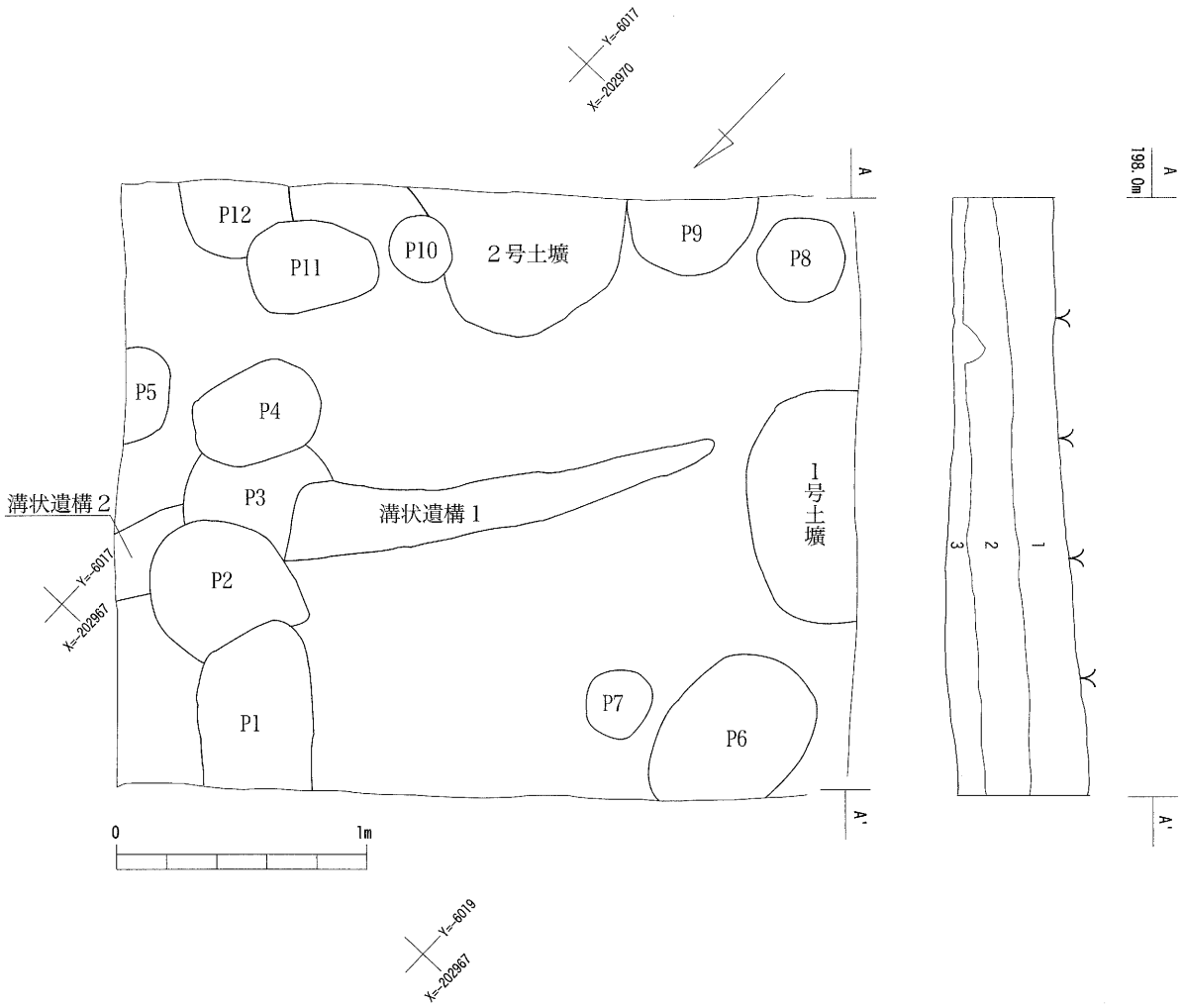
櫓状遺構の北にある第１腰郭の平場に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約45cm掘り下げた面



第1トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　　考
P1	10YR3/4　褐色	シルト	
P2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土を少量含む
P3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土を少量含む
P4	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土を含む
P5	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
P6	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土を少量含む
P7	5YR3/4　明赤褐色	シルト	褐色土と炭化物を少量含む
P8	5YR3/3　暗赤褐色	シルト	褐色土と炭化物を少量含む

第6図　第1トレンチ（縮尺1/30）



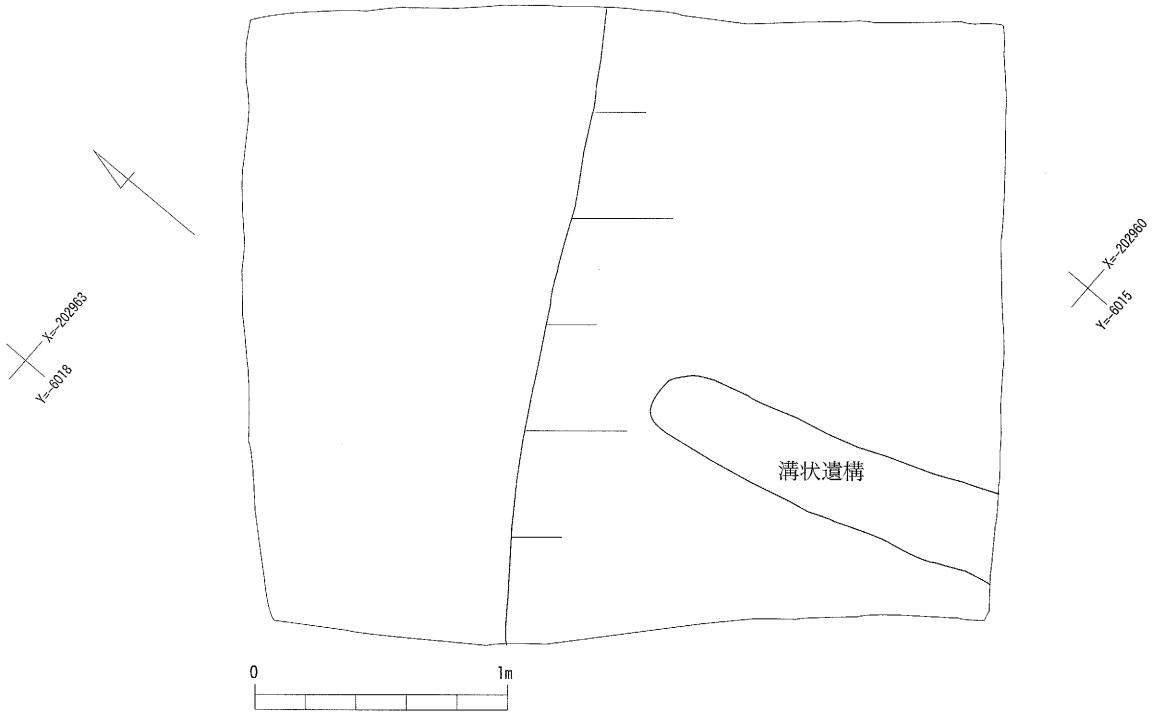
第2トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　考
1層	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2層	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	炭化物を少量含む
3層	5YR2/4　極暗赤褐色	シルト	赤褐色・明黄褐色土をブロック状に含む

第2トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　考
1号土壙	7.5YR4/4　褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む　赤褐色土を含む
2号土壙	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
溝状遺構1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
溝状遺構2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
P1	10YR3/1　黒褐色	シルト	炭化物・暗褐色土を多量に含む
P2	10YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土と炭化物を多量に含む
P3	7.5YR4/4　褐色	シルト	明黄褐色土を含む
P4	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土を少量含む
P5	7.5YR3/4　褐色	シルト	明黄褐色土と炭化物を少量含む
P6	7.5YR4/4　褐色	砂質シルト	明黄褐色土
P7	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P8	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P9	7.5YR4/4　褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P10	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P11	7.5YR3/4　暗褐色	砂質シルト	明黄褐色土を少量含む
P12	5YR3/4　暗赤褐色	砂質シルト	

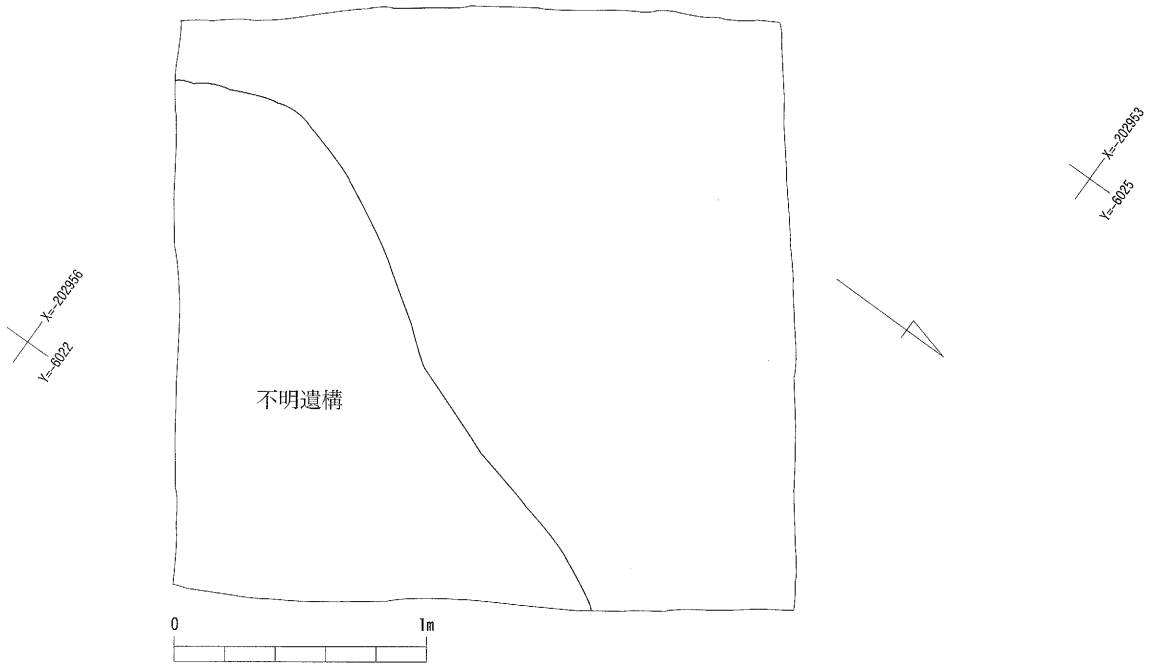
第7図　第2トレンチ（縮尺1/30）



第３トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土 質	備　　考
溝状遺構	10YR2/3　黒褐色	シルト	10YR3/4暗褐色土をまだら状に含む

第８図　第３トレンチ（縮尺1/30）



第４トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土 質	備　　考
不明遺構	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土・礫を含む

第９図　第４トレンチ（縮尺1/30）

で、不明遺構が１箇所確認された。遺構確認面は、7.5YR5/8明褐色シルトである。不明遺構は、幅140cm以上あり、溝状遺構の一部なのか自然の落ち込みなのか判別できなかった。

⑤第５トレンチ（図版第10図：写真図版第127～129図）

主郭東端の斜面の下に位置する第１腰郭の平場に、2.8m×2.3mの調査区を設定した。地表面から約55cm掘り下げた２層上面で、溝状遺構とピット３箇所を確認した。２層は7.5YR5/8明褐色シルトである。溝状遺構は、調査区のほぼ全面で確認され、南北方向であるがやや湾曲しており、幅は3.1m以上ある。ピットは、すべて溝状遺構の堆積土に掘り込まれており、直径は20～90cm、円形か楕円形を呈しており、柱痕の認められるものは無かった。ピット３は、やや大きいので土壙かもしれない。

⑥第６トレンチ（図版第11～13図：写真図版第130～134図）

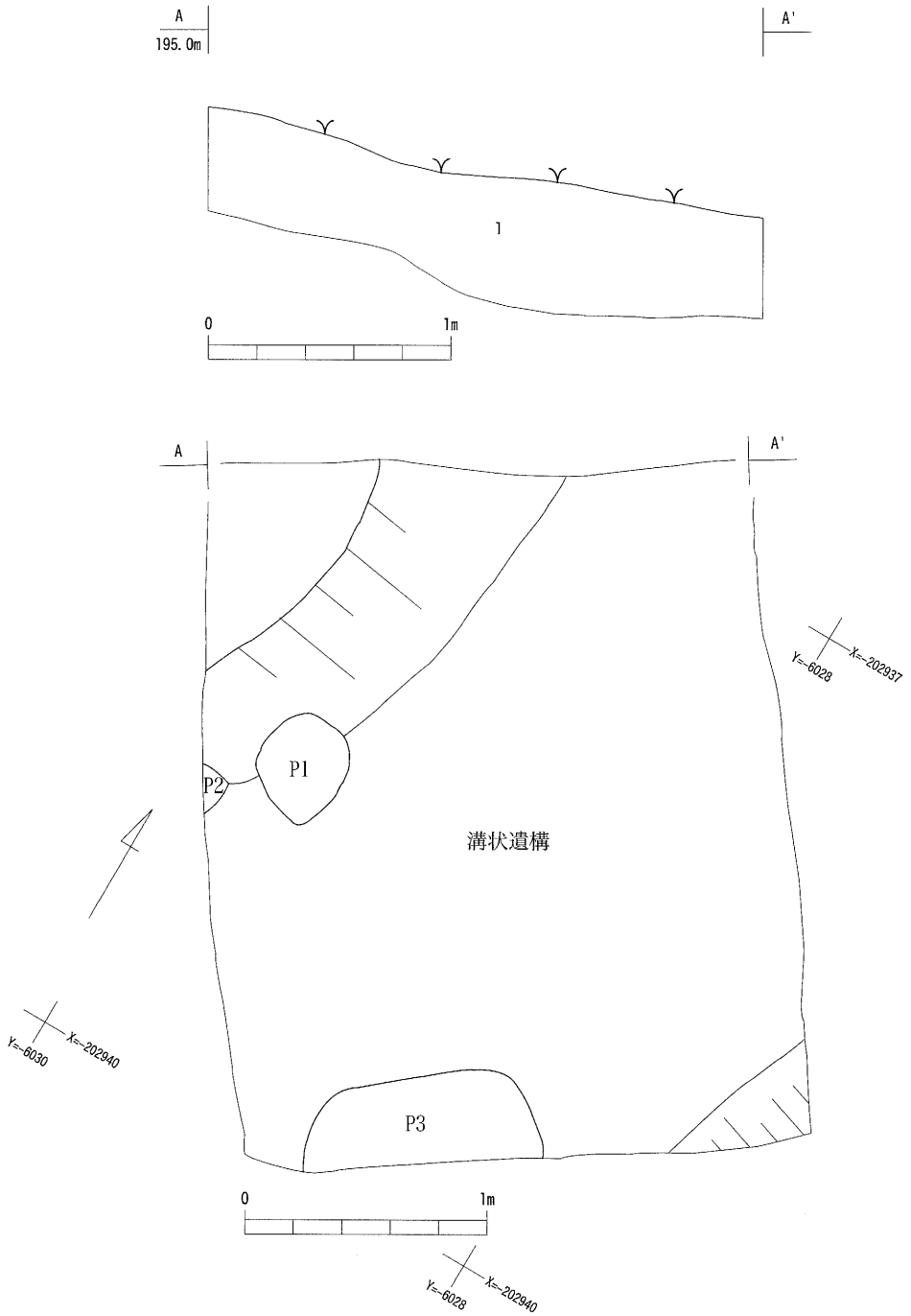
主郭の東南斜面に、8.8m×1.7mの調査区を設定した。地表面から20cm～50cm掘り下げた面で、遺構を確認した。堆積土は４層である。主郭の平場部分、斜面の近くから２箇所のピットを、斜面下の第１腰郭の平場からは３条の溝状遺構を確認した。ピットは、直径は20～35cm、円形と楕円形である。溝状遺構１は、西北から東南方向で、幅は20cm以上あり、溝状遺構２を切っている。溝状遺構２は、東北から西南方向で、幅は50cm～65cmである。溝状遺構３は、南北方向で幅は25cm以上である。主郭および第１腰郭との間の斜面は、地山を削り出した人工的なものと思われ、その角度は約45度である。遺物は、斜面下方の２層から石臼の上臼片１点が出土した（図版第13図１：写真図版第220図１）。また、調査区東側の櫓状遺構の基部から、石鉢の口縁部片１点を表採した（図版第13図２：写真図版第220図２）。

⑦第７トレンチ（図版第14・15図：写真図版第135～137図）

主郭の東北斜面に、8.3m×1.7mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から約30cm掘り下げた整地面で、その他は15cm～40cm掘り下げた地山面で遺構を確認した。堆積土は３層である。主郭の平場部分は整地層で、斜面からの観察では層厚は54cmあり、整地層の下には薄い黒褐色の旧表土が認められた。平場の斜面近くからは、整地層に掘り込まれた５箇所のピットを確認した。ピットは、直径23～35cmの円形で、柱痕の認められるものは無かった。主郭および第１腰郭との間の斜面は、地山を削り出した人工的なものと思われ、その角度は約45度である。遺物の出土は無かった。

⑧第８トレンチ（図版第16～18図：写真図版第138～143図）

主郭中央部よりやや東側にある段状遺構のすぐ下に、5.5m×6.0mの調査区を設定し、さらに段状遺構の上へ2.2m×3.5m拡張した。地表面から30cm掘り下げた面で遺構を確認した。遺構確認面は、10YR4/6褐色粘土質シルトである。遺構は、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構３条、ピット３箇所が確認された。この遺構確認面は、ほぼ平坦に整地されているようである。堆積土は２層である。掘立柱建物跡は、トレンチの中央から北側にかけて、南北方向の段状遺構と平行するように確認された。これは、桁行１間（1.7m）、梁行２間以上（3.3m）あり、その掘り方の直径は40～60cmの隅丸方形を呈しており、柱痕跡は見られなかった。溝状遺構は、すべて段状遺構の斜面下から確認された。溝状遺構１は、長さ2.8m、幅0.2mある。溝状遺構２は途中で切れているが、長さ5.9m以上、幅20～45cmあり、掘立柱建物跡に切られている。溝状遺構３は、長さ45cm、幅20cmある。ピットは、掘立柱建物跡の東側で確認され、直径30～40cmの円形を呈している。段状遺構の高さは90cmで、斜面の角度は約25度、



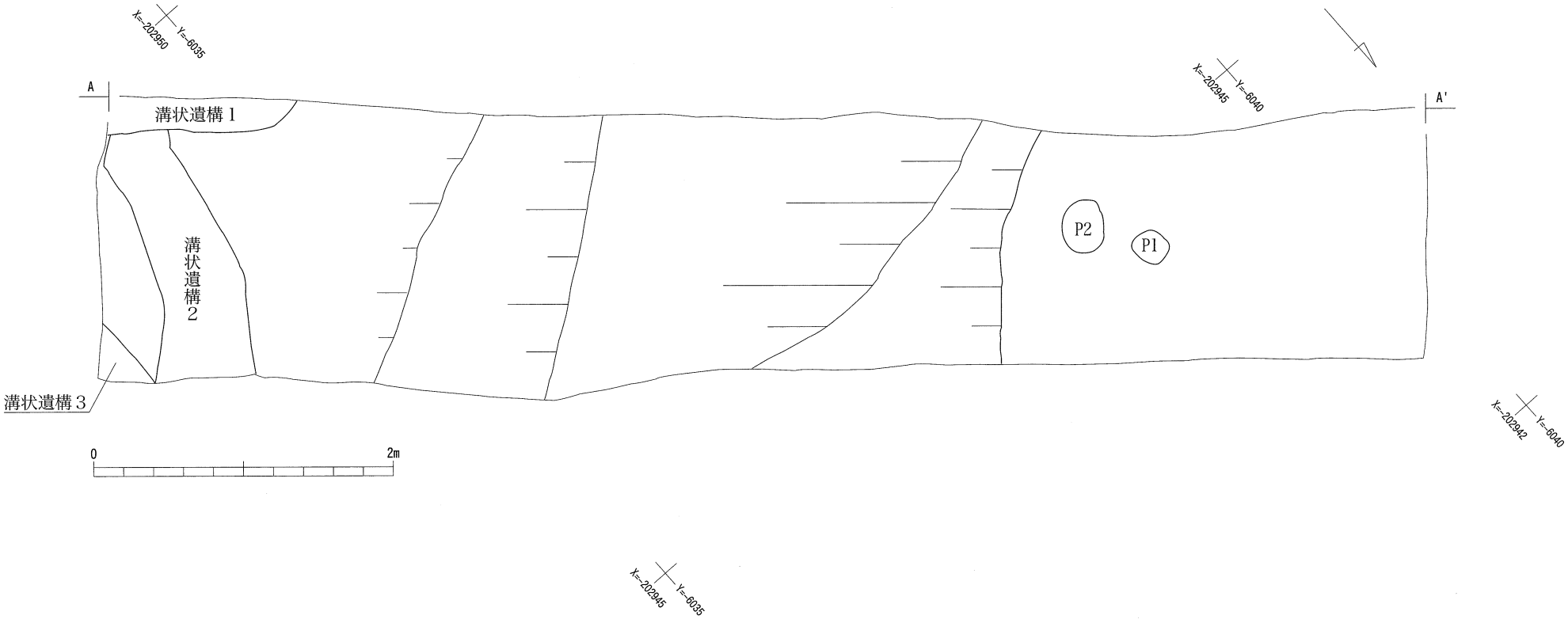
第５トレンチ土層註記表

層位	土色	土質	備考
１層	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土・炭化物を少量含む

第５トレンチ遺構註記表

遺構名	土色	土質	備考
溝状遺構	10YR4/2　灰褐色	シルト	炭化物・黄褐色土・小礫を含む
P1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P2	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P3	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR3/4暗褐色土を含む

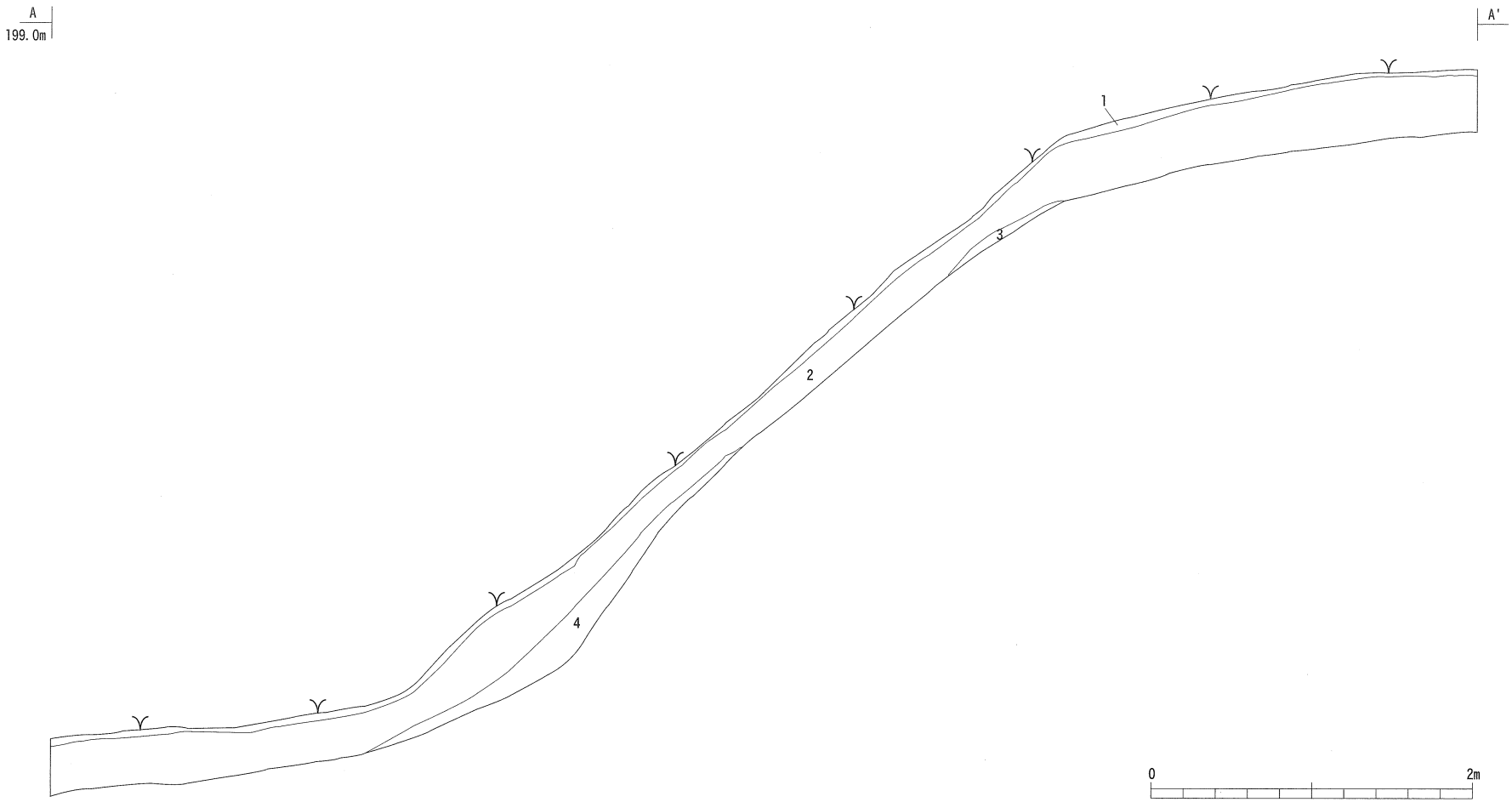
第10図　第５トレンチ（縮尺1/30）



第６トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　考
溝状遺構１	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	明黄褐色土を少量含む
溝状遺構２	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土を含む　明黄褐色土を少量含む
溝状遺構３	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	
P1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物を少量含む
P2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物を少量含む

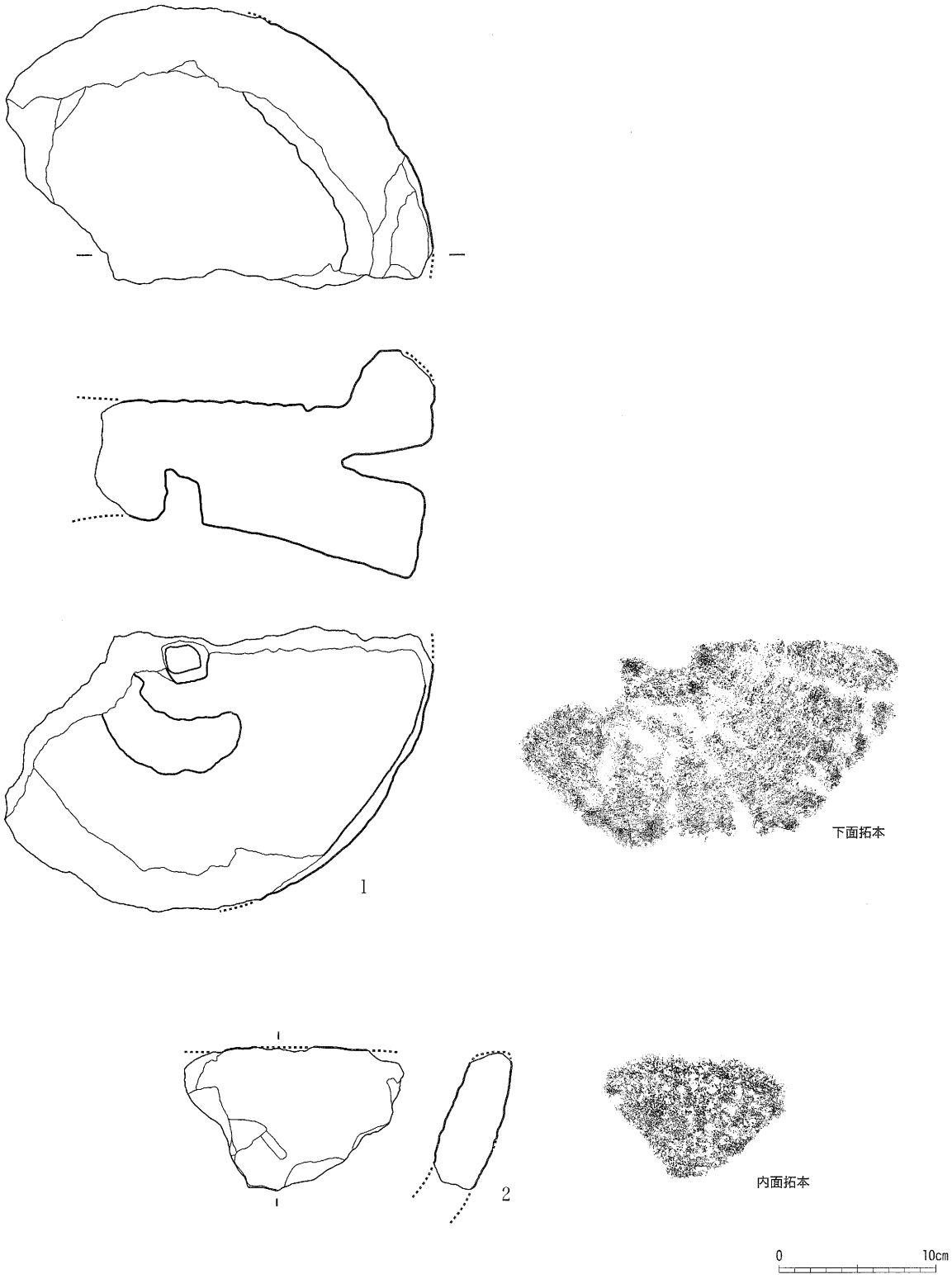
第11図　第６トレンチ（縮尺1/40）



第６トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　　考
１層	10YR3/2　黒褐色	シルト	
２層	10YR4/4　褐色	シルト	
３層	7.5YR8/3　浅黄橙色	粘土質シルト	
４層	2.5YR4/6　赤褐色	シルト	褐色土を多量に含む

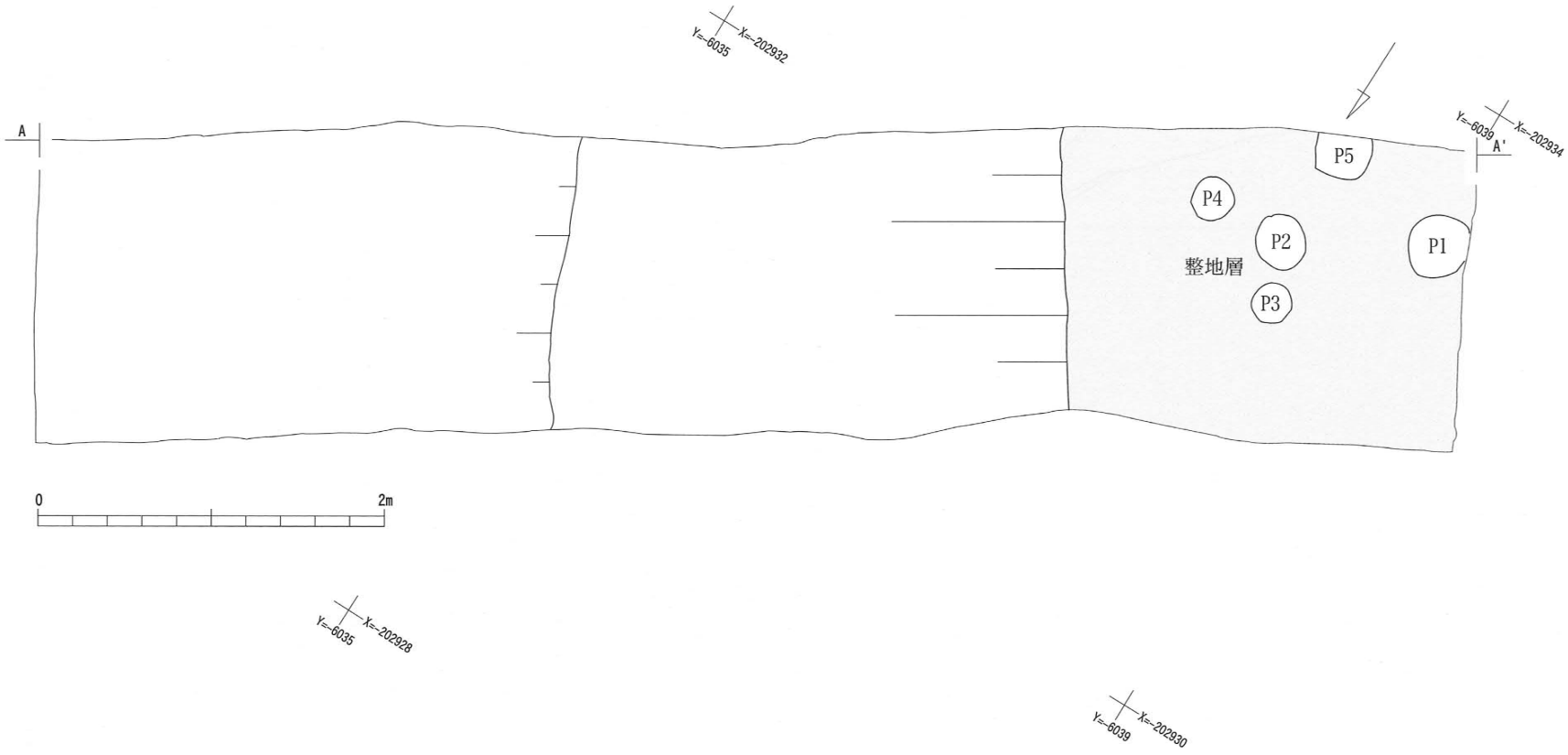
第12図　第６トレンチ断面（縮尺1/40）



第６トレンチ出土・櫓状遺構表採　石製品観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(kg)	石材	写真図版
第13図１	ＳＧ137	第６トレンチ	２層	石製品	石臼	上臼	17.1	24.5	14.3	5.85	安山岩	第220図１
第13図２	ＳＧ136	櫓状遺構	表採	石製品	石鉢	口縁部	9.1	13.7	3.4	0.35	デイサイト	第220図２

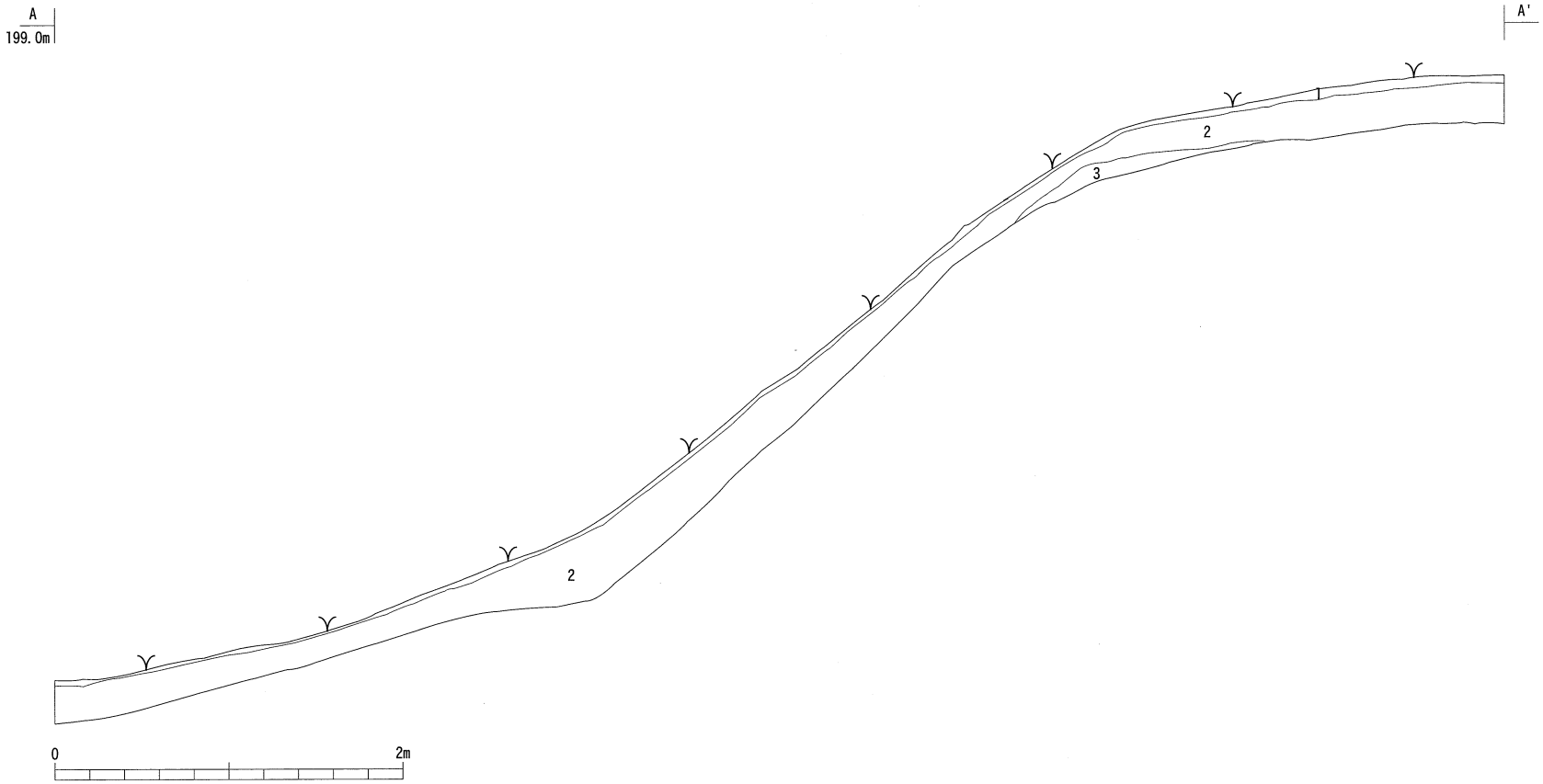
第13図　第６トレンチ出土遺物・櫓状遺構表採遺物（縮尺1/4）



第７トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　　考
P1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P2	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P3	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P4	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P5	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
整地層	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土・黒色土をブロック状に多量に含む

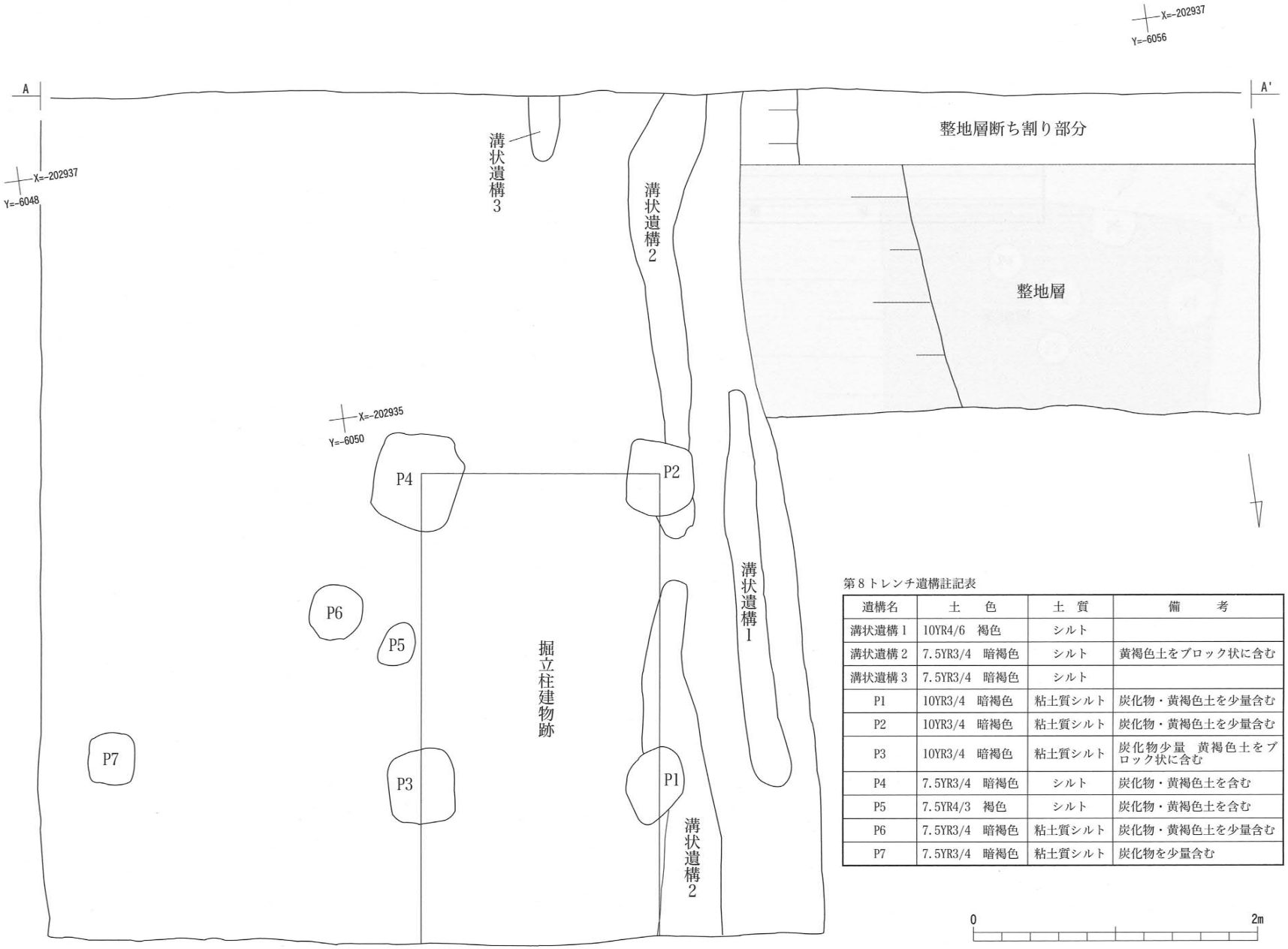
第14図　第７トレンチ（縮尺1/40）



第７トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　考
１層	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	表土
２層	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土を少量含む
３層	10YR4/4　褐色	シルト	黒褐色土を少量含む

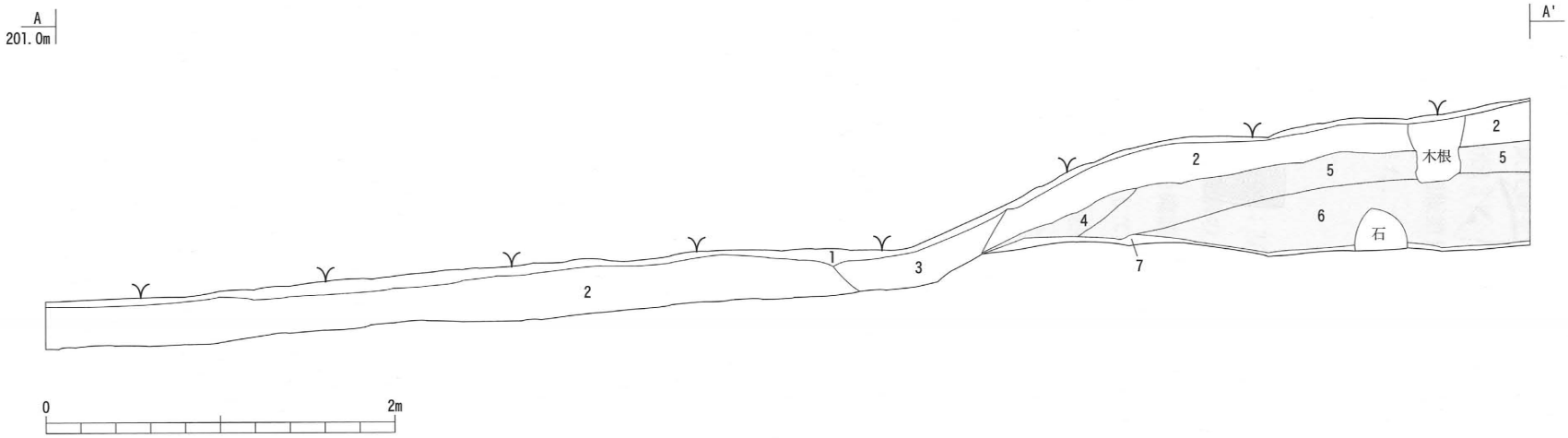
第15図　第７トレンチ断面（縮尺1/40）



第8トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　考
溝状遺構1	10YR4/6　褐色	シルト	
溝状遺構2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
溝状遺構3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
P1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量　黄褐色土をブロック状に含む
P4	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を含む
P5	7.5YR4/3　褐色	シルト	炭化物・黄褐色土を含む
P6	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物・黄褐色土を少量含む
P7	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む

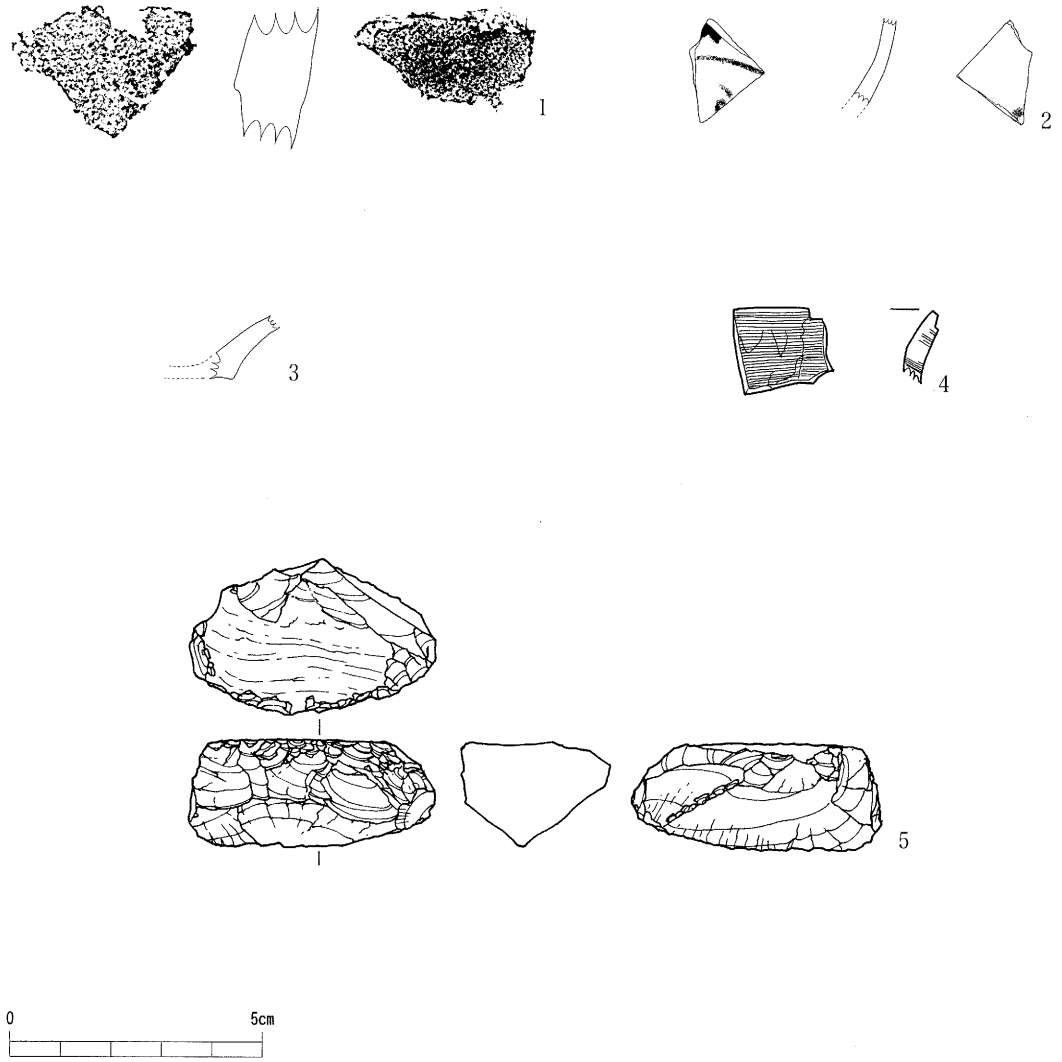
第16図　第8トレンチ（縮尺1/40）



第８トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　　考
１層	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト	表土
２層	7.5YR2/4　暗褐色	シルト	
３層	10YR3/4　暗褐色	シルト	底面に炭化物を含む
４層	10YR4/6　褐色	シルト	5YR5/8明赤褐色土をブロック状に含む　整地層
５層	10YR5/6　黄褐色	シルト	礫を少量含む　整地層
６層	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	整地層
７層	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む

第17図　第８トレンチ断面（縮尺1/40）



第８トレンチ出土　陶磁器・土師質土器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第18図１	ＳＧ125	８トレンチ	１層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第220図３
第18図２	ＳＧ133	８トレンチ	１層	磁器	碗か皿	体部	染付	染付	16世紀	中国産	第220図４
第18図３	ＳＧ117	８トレンチ	表採	土師質土器	皿	底部	ロクロ調整	ナデ			第220図５

第8トレンチ出土　木製品観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	時期	備考	写真図版
第18図４	ＳＧ134	８トレンチ	１層	木製品	椀	口縁部		炭化	第220図６

第8トレンチ出土　石器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石材	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重量（ｇ）	備考	写真番号
第18図5	ＳＧ44	8トレンチ	1層	石核	玉髄	49.7	30.6	21.4	36.6		第220図７

第18図　第８トレンチ出土遺物（縮尺2/3）

上面は主郭中央へと続いている。段状遺構は土を積んで造られていたので、調査区の南端において一部断ち割りを行い、断面を観察した。その結果、整地層は３層あり、最も厚いところは56cmであった。整地層と地山との間には、２～５cmと非常に薄い、炭化物を含む黒褐色粘土質シルト層が堆積していた。遺物は、中世陶器の小破片（図版第18図１：写真図版第220図３）、中国製磁器の椀か皿の小破片（図版第18図２：写真図版第220図４）、木製椀の口縁部の炭化した小破片（図版第18図４：写真図版第220図６）、玉髄製の石核が各１点出土した（図版第18図５：写真図版第220図７）。また、土師質土器の皿の小破片１点を表採した（図版第18図３：写真図版第220図５）。

⑨第９トレンチ（図版第19・20図：写真図版第144～146図）

主郭中央部より北側にある段状遺構の上に、4.8m×1.5mの調査区を設定した。地表面から30cm前後掘り下げた面で、溝状遺構とピット３箇所を確認した。遺構確認面は、7.5YR3/4暗褐色粘土質シルトである。堆積土は３層である。段状遺構は、地山を整地して造られており、段の高さは70cm、斜面の角度は18度である。この段状遺構の上辺に、溝状遺構が南北方向に１条確認された。長さは1.9m以上、幅は0.62～1.23mある。ピットの直径は45～70cmで、隅丸方形を呈しており、柱痕跡の認められるものは無かった。ピット２は、溝状遺構に切られていた。遺物は１層から、中世陶器の破片が３点出土した（図版第20図１～３：写真図版第221図１～３）。

⑩第10トレンチ（写真図版第147・148図）

主郭の北側斜面下の第１腰郭に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約20cm掘り下げたが、遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、7.5YR4/4褐色シルトである。

⑪第11トレンチ（図版第21図：写真図版第149～151図）

主郭北側の斜面から一段下にある第１腰郭に、11.7m×1.7mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から40cm掘り下げた面で整地層を確認した。整地層の下には薄い黒褐色の旧表土が認められた。斜面から第１腰郭の平場にかけては地表面から30～45cm掘り下げた面で遺構を確認した。遺構確認面は、10YR6/8明褐色シルトである。遺構は土壙が１基で、大きさは長径1.1m、短径0.8mの隅丸方形を呈している。堆積土は５層で、４層は地滑りを起こしたような地山のブロックを多量に含んだ層で、斜面の角度は約30度である。遺物の出土は無かった。

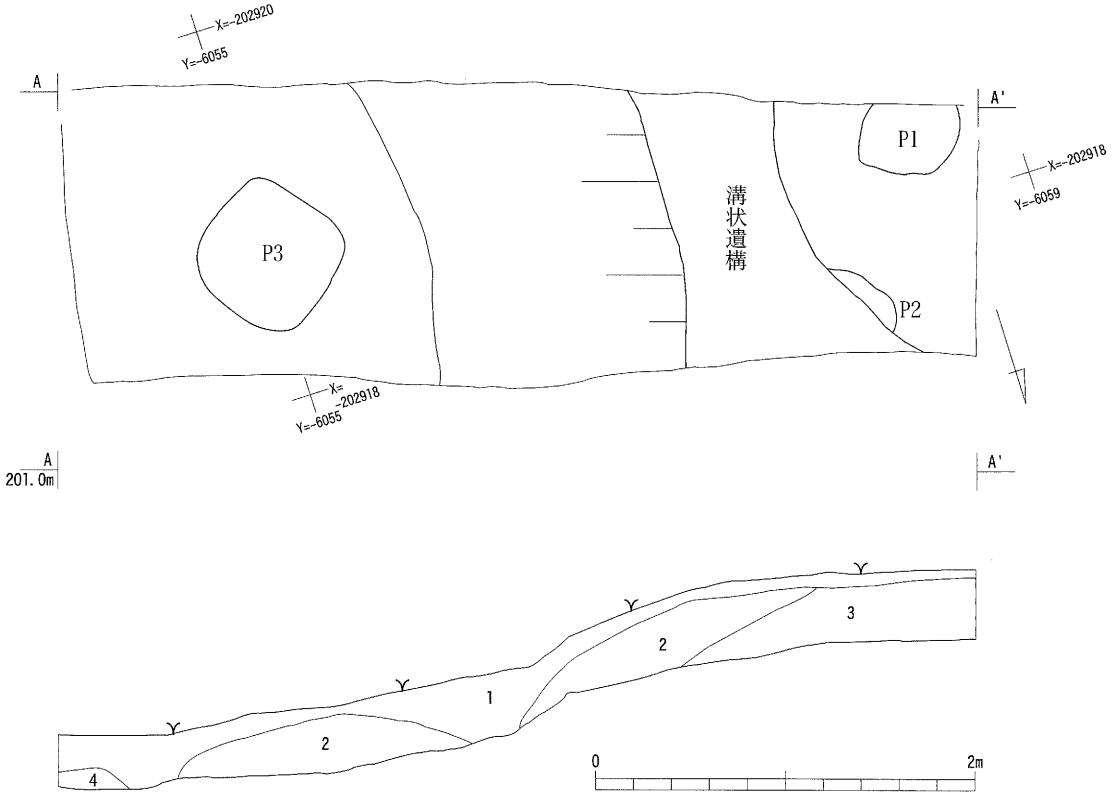
⑫第12トレンチ（写真図版第152・153図）

主郭の北側斜面下の第１腰郭に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約15cm掘り下げたが、遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、10YR5/6黄褐色粘土である。

⑬第13トレンチ（図版第22～24図：写真図版第154～162図）

主郭南側の土塁から一段下にある第２腰郭に、21.6m×1.8mの調査区を設定した。地表面から10～30cm掘り下げた面で遺構が確認された。遺構確認面は、7.7YR4/6褐色粘土質シルトで、粘性が非常に強い。主郭の平場部分からは、平坦に整地した面を5.3m確認した。この平坦面は、2.5YR5/8明黄褐色シルトで、暗褐色粘土質シルトのブロックを含んでいる。

土塁は、基底部の幅4.5m、上部の幅1.2m、高さは0.9mあるが、調査区から東側へ行くとさらに高くなる。構



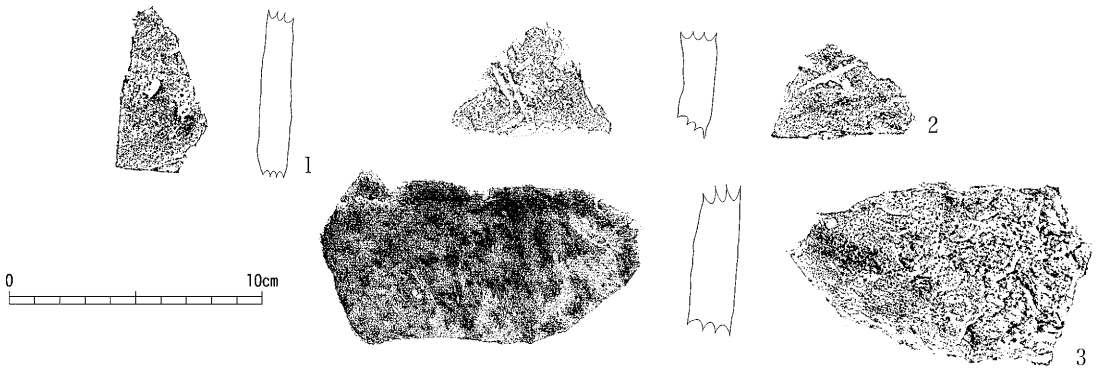
第9トレンチ土層註記表

層　位	土　色	土　質	備　　考
1層	10YR2/3　黒褐色	シルト	表土
2層	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト	
3層	7.5YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む
4層	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む

第9トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　　考
溝状遺構	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土・炭化物を少量含む
P1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P2	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P3	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト	

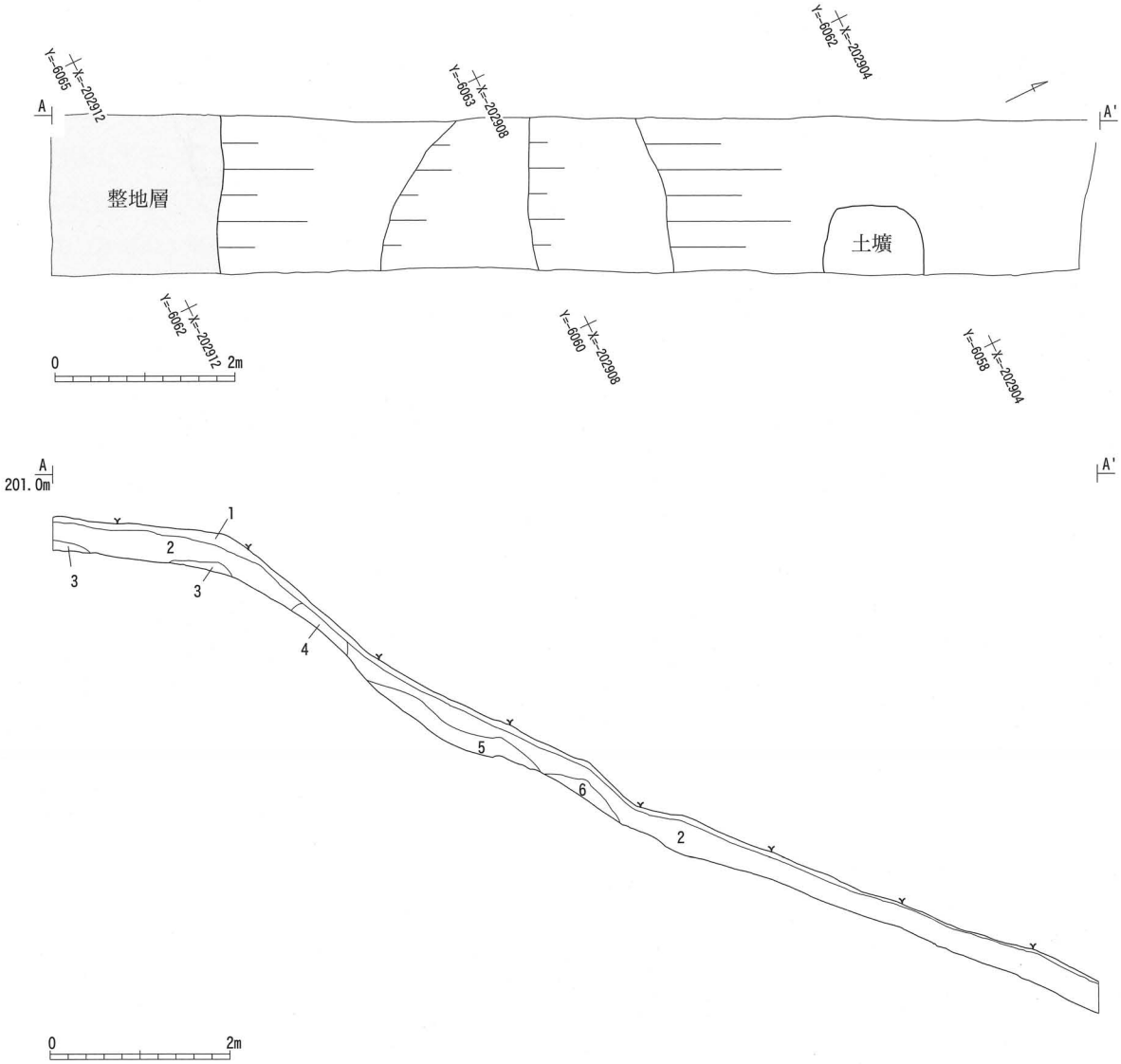
第19図　第9トレンチ（縮尺1/40）



第9トレンチ出土　陶器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第20図1	SG126	9トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	不明	13世紀後半～14世紀前半	在地産、内面剥離	第221図1
第20図2	SG127	9トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第221図3
第20図3	SG128	9トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第221図2

第20図　第9トレンチ出土遺物（縮尺1/3）



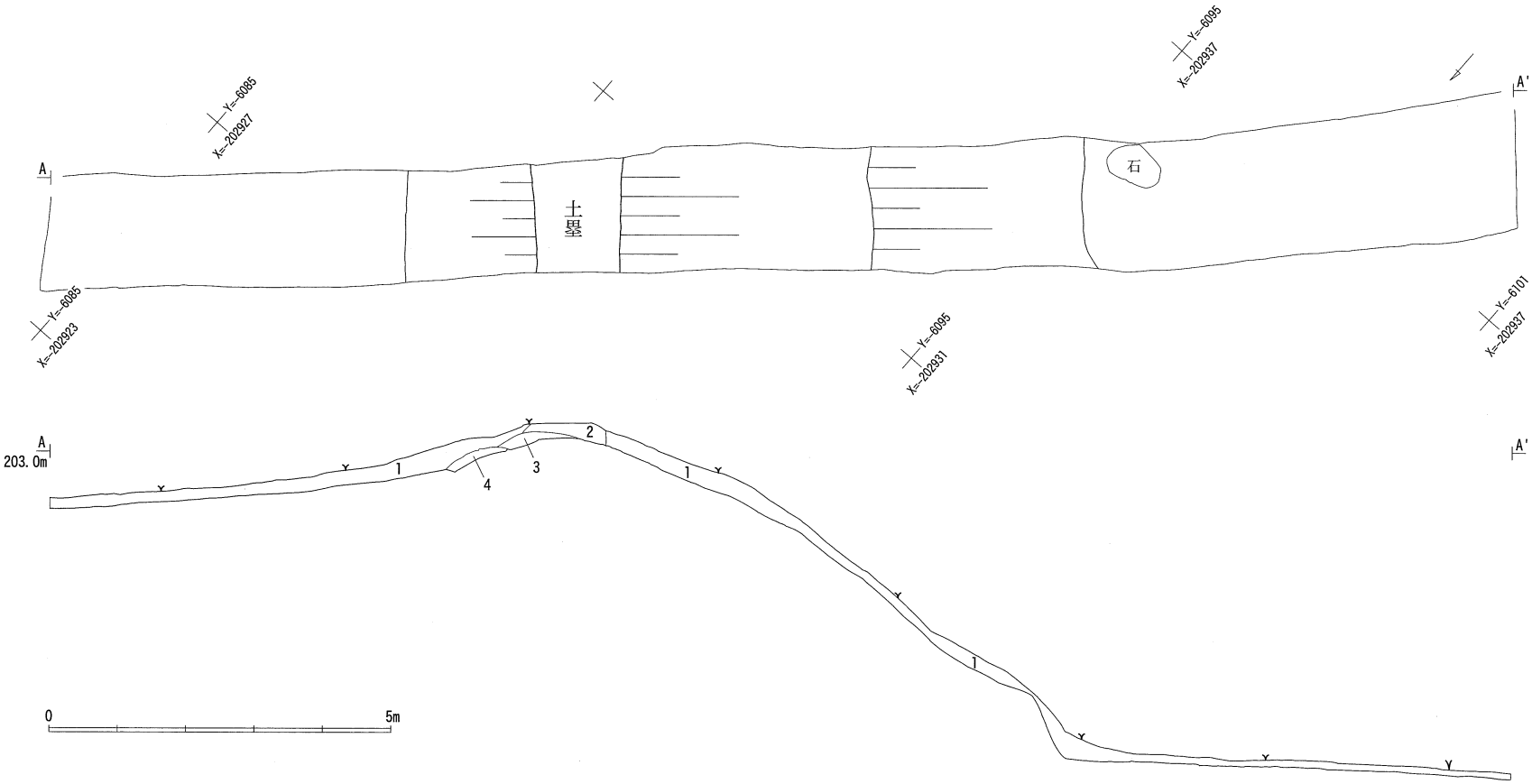
第11トレンチ土層註記表

層位	土色	土質	備考
1層	10YR2/2 黒褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 褐色	シルト	
3層	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	旧表土
4層	10YR6/8 明黄褐色	シルト	
5層	7.5YR4/4 褐色	シルト	愛島軽石をブロック状に多量に含む
6層	10YR5/6 黄褐色	シルト	

第11トレンチ遺構註記表

遺構名	土色	土質	備考
土壙	10YR4/1 褐灰色	シルト	炭化物を少量含む
整地層	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	

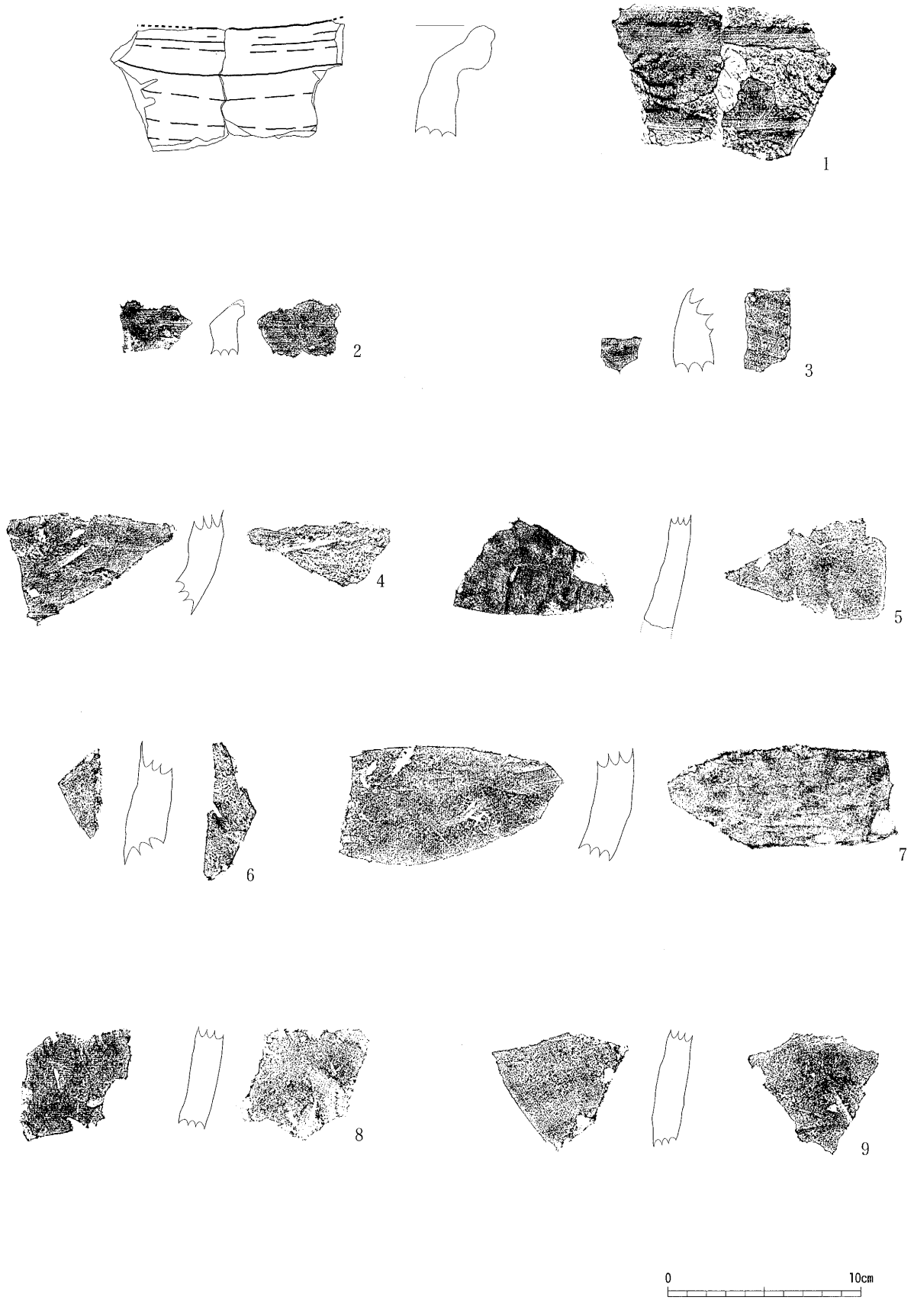
第21図　第11トレンチ（縮尺1/80）



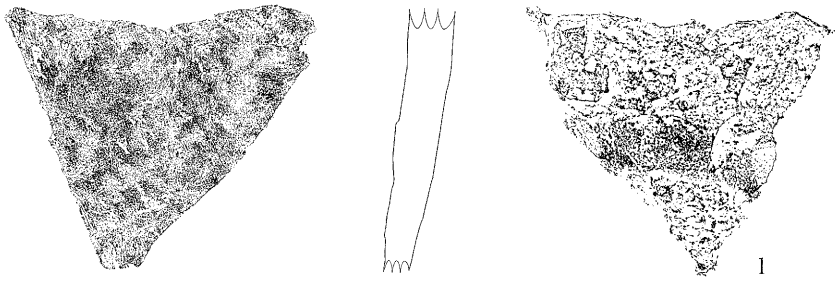
第13トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　考
1層	7.5YR4/4　暗褐色	シルト	表土
2層	2.5YR5/8　明黄褐色	シルト	土墨積土
3層	10YR1/3　黒褐色	シルト	旧表土
4層	10YR5/6　黄褐色	シルト	土墨積土

第22図　第13トレンチ（縮尺1/100）



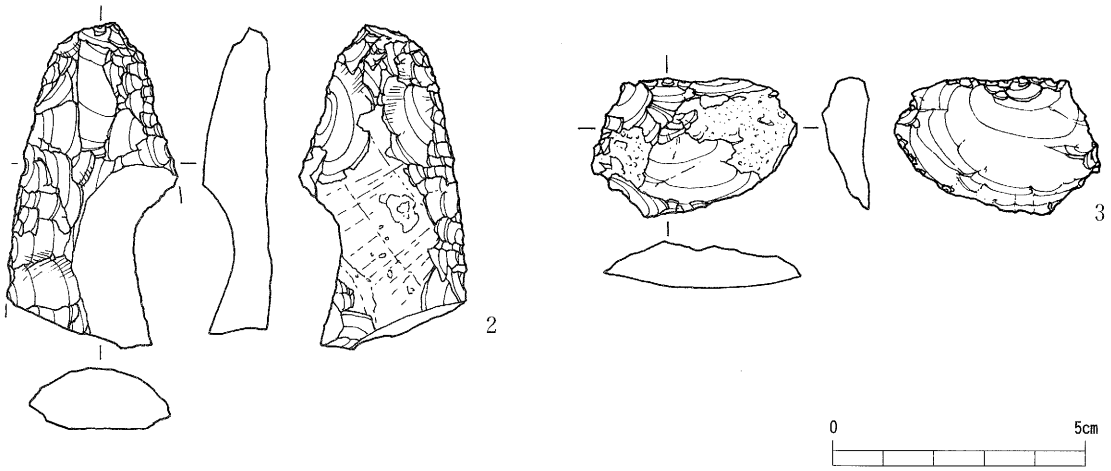
第23図　第13トレンチ出土遺物①（縮尺1/3）



0　10cm

第13トレンチ出土　陶器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第23図1	SG123	13トレンチ	1層	陶器	甕	口縁部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産、SG132と接合、漆継	第221図6
第23図2	SG129	13トレンチ	1層	陶器	甕	口縁部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第221図4
第23図3	SG120	13トレンチ	1層	陶器	甕	頸部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第221図5
第23図4	SG119	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産、内面に漆	第221図7
第23図5	SG118	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第221図8
第23図6	SG122	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第222図1
第23図7	SG121	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第222図2
第23図8	SG124	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第222図3
第23図9	SG130	13トレンチ	表採	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第222図4
第24図1	SG131	13トレンチ	表採	陶器	甕	体部	タタキ→ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地産	第222図5



第13トレンチ出土　石器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	写真番号
第24図2	SG36	13トレンチ	1層	篦状石器	デイサイト質凝灰岩	64.8	36.3	14.0	25.8	破損	第222図6
第24図3	SG37	13トレンチ	1層	剥片	玉髄	42.1	27.0	10.0	10.4		第222図7

第24図　第13トレンチ出土遺物②（縮尺は1が1/3、2・3は2/3）

築方法は、地山を削り出し、その上に明黄褐色シルトと黄褐色シルトを積んでおり、積み土の下には部分的に黒褐色の旧表土が認められた。南斜面の角度は約35度で、ここには多量の風化した安山岩が見られる。斜面下には、長径82cm、短径54cmの平らな安山岩があったが、人為的に置かれたものなのか、それとも自然にあったものなのか判別できなかった。

第２腰郭の平場部分においては、平坦面を6.4m確認したが、ピットなどは認められなかった。この平場の堆積土は、7.7YR4/6褐色粘土質シルトで、粘性が非常に強い。

遺物は、主郭の平場から土塁上にかけての１層から中世陶器の破片８点と（図版第23図１～８：写真図版第221図４～８、第222図１～３）、篦状石器、玉髄の剥片が各１点出土した（図版第24図２・３：写真図版第222図６・７）。また、調査区西側の斜面からも、中世陶器の破片２点を表採した（図版第23図９、第24図１：写真図版第222図４・５）。調査区内から出土した中世陶器の口縁部片と、表採した口縁部片は接合した。この口縁部片の断面には、漆が付着しており割れたところを接着したものと思われる。これらの中世陶器は、色調や作りが類似しており、同一の個体と考えられる。

⑭第14トレンチ（図版第25図：写真図版第163・164図）

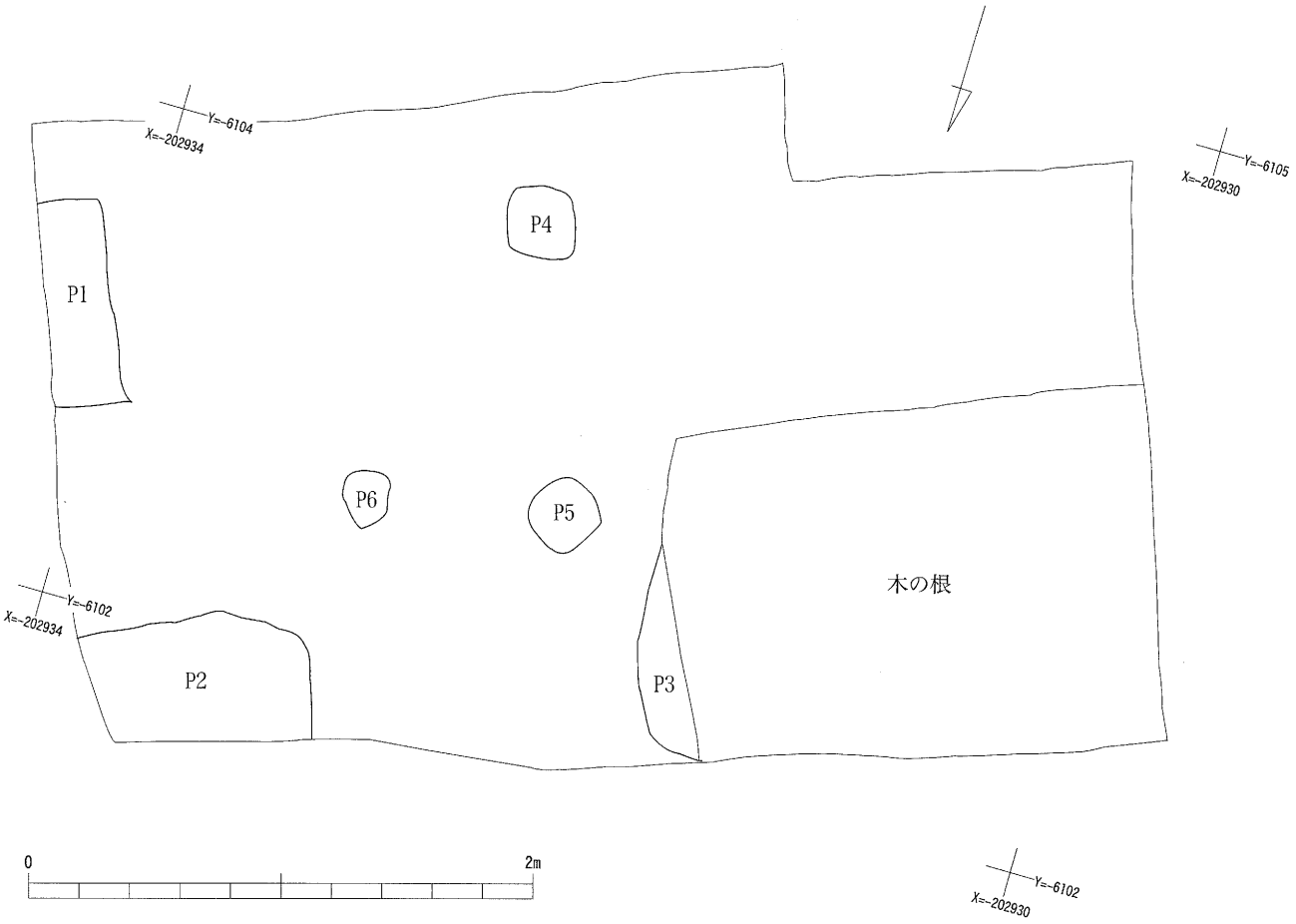
第２腰郭の平場部分に、2.5m×3.0mの調査区を設定した。地表面より約30cm掘り下げた２層上面で、６箇所のピットを確認した。１層は7.5YR4/6褐色粘土質シルト、２層は2.5YR7/8橙色の風化した安山岩層である。ピットは、全てこの風化した安山岩層に掘り込まれていた。ピット１～３は、長径70～90cmと大きく、隅丸方形を呈するものと思われるが、すべて調査区の外に伸びており全形が判るものは無かった。ピット４～６は、直径20～30cmの円形または隅丸方形を呈している。ピットには、柱痕跡が認められるものは無かった。遺物の出土も無かった。

⑮第15トレンチ（写真図版第165・166図）

第２腰郭の平場部分に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約15cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、7.5YR4/6褐色粘土質シルトである。

⑯第16トレンチ（図版第26・27図：写真図版第167～177図）

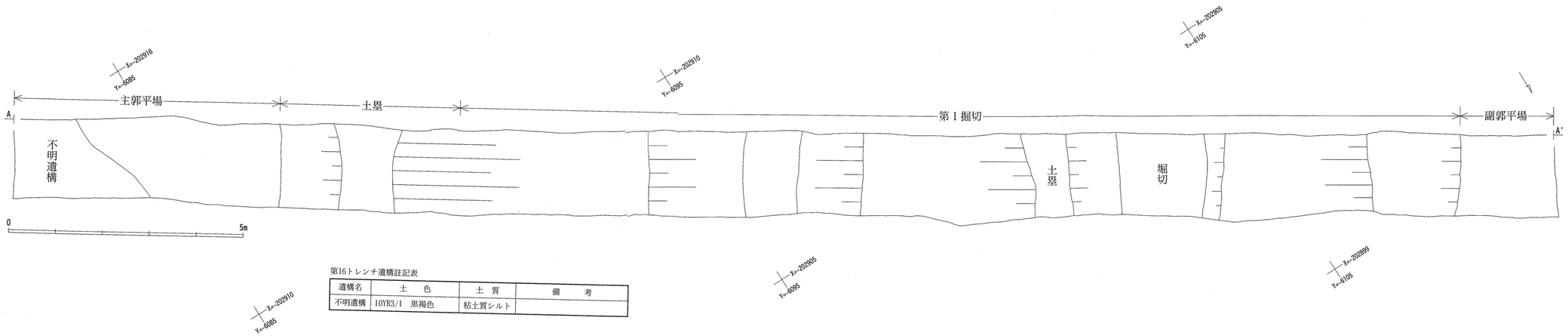
主郭と副郭の間、第１堀切の斜面に、33.2m×1.8mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から約15cmで地山となり、東端において南北方向へ伸びる不明遺構が確認された。不明遺構の内部は、黒褐色粘土質シルトである。主郭西側の土塁は、地山を削り出して構築されている。基底部の幅3.8m、上部の幅1.2m、高さは0.2mある。調査区から西南方へ行くとさらに高くなり、第13トレンチの土塁と接続するので、この間は地山を削り出した上に土を積んで構築されているものと思われる。土塁からは第１堀切の東斜面となり、上方の角度は40度、中間は25度、下方は50度と非常に急である。堀切の最も深いところは逆台形を呈しており、平底で幅は1.3mある。堆積土の最も厚いところは2.4mあり、10層に分けられたが、すべて自然堆積層である。副郭側の斜面には、小規模な土塁と堀切が見られる。土塁は上幅1.0m、高さ0.15mと低いが、調査区外の西南方へ高くなっている。堀切は上幅3.2m、深さは0.7m、底面はほぼ平らで幅2.7mあり、堆積土は３層である。小規模な堀切から副郭東斜面の角度は、下方が35度、上方が20度である。副郭の平場部分は、地山を削り出した平坦面で、ピットなどの遺構は確認されなかった。調査の結果、第１堀切の幅は21.2mあり、主郭西側の土塁上から底面までの深さは5.7mである。遺物の出土は無かった。



第14トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　考
P1	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む　風化した安山岩片を含む
P2	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	2cm以下の風化した安山岩片を含む
P3	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト	7.5YR3/4暗褐色土を含む
P4	7.5YR4/4　褐色	シルト	
P5	7.5YR4/6　褐色	シルト	2～10cmの風化した安山岩片を含む
P6	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	

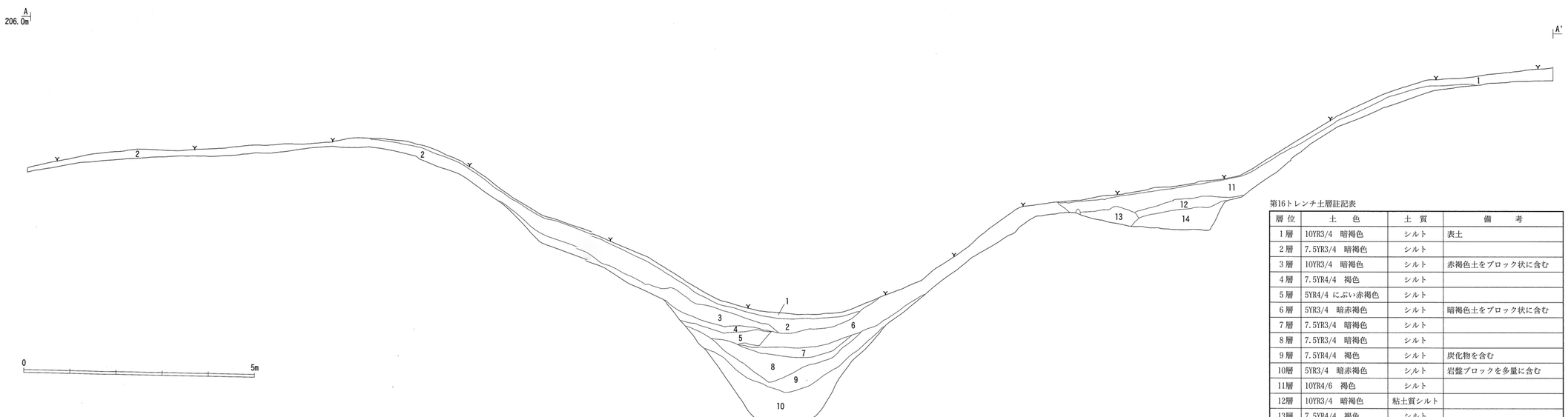
第25図　第14トレンチ（縮尺1/30）



第16トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　考
不明遺構	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	

第26図　第16トレンチ（縮尺1/80）



第16トレンチ土層註記表

層位	土　色	土　質	備　考
1層	10YR3/4　暗褐色	シルト	表土
2層	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
3層	10YR3/4　暗褐色	シルト	赤褐色土をブロック状に含む
4層	7.5YR4/4　褐色	シルト	
5層	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	
6層	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む
7層	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
8層	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
9層	7.5YR4/4　褐色	シルト	炭化物を含む
10層	5YR3/4　暗赤褐色	シルト	岩盤ブロックを多量に含む
11層	10YR4/6　褐色	シルト	
12層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
13層	7.5YR4/4　褐色	シルト	
14層	7.5YR4/6　褐色	シルト	

第27図　第16トレンチ断面（縮尺1/80）

⑰第17トレンチ（写真図版第178・179図）

通路状遺構と第１堀切の中間にある斜面に、2.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から40cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、5YR4/4にぶい赤褐色シルトである。

⑱第18トレンチ（写真図版第180・181図）

通路状遺構の東端、副郭の斜面下に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から15cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、10YR7/8黄橙色シルトである。

⑲第19トレンチ（図版第28図：写真図版第182・183図）

通路状遺構の副郭斜面下に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から20～50cm掘り下げた面で、溝状遺構を確認した。溝状遺構は、通路状遺構と平行で東西方向に伸びており、幅は0.9～1.1mである。遺構確認面は、10YR6/8明黄褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

⑳第20トレンチ（図版第29図：写真図版第184・185図）

通路状遺構の副郭斜面下に、2.0m×2.0mの調査区を設定した。地表面から10～30cm掘り下げた面で溝状遺構を２条確認した。溝状遺構１は副郭の斜面下で、東西方向に延びており、幅は0.6m以上ある。溝状遺構２も、東西方向に延びており、幅は0.2～0.5mである。溝状遺構１は、第19トレンチで確認された溝状遺構と接続するものと思われる。遺構確認面は、10YR6/8明黄褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

㉑第21トレンチ（図版第30～37図：写真図版第186～210図）

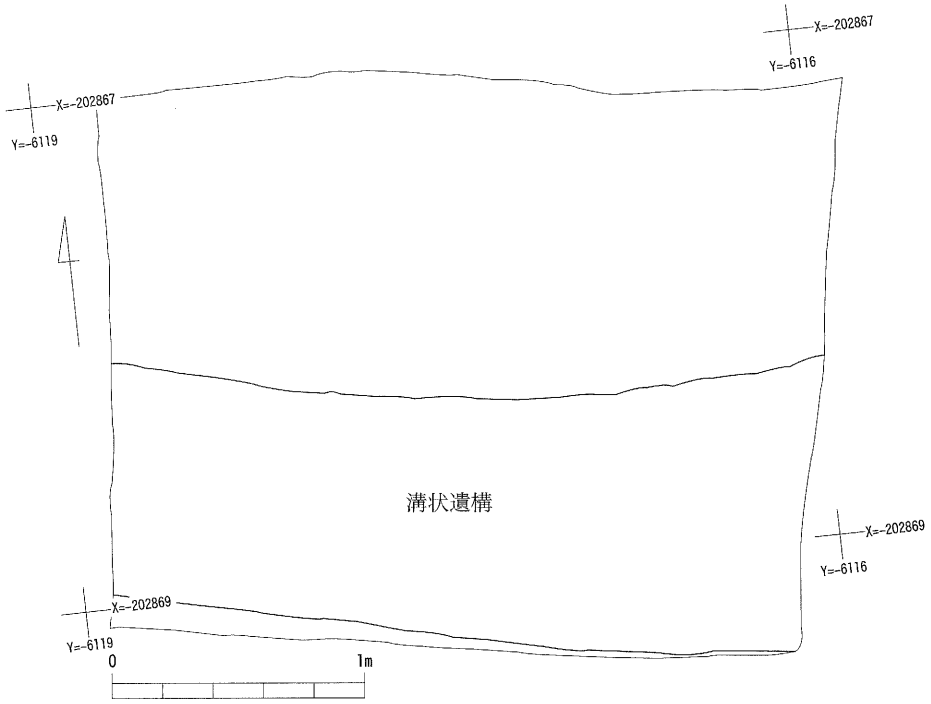
副郭から第２堀切、第１・２土塁、第３堀切の各斜面に、32.7m×1.6mの調査区を設定した。副郭の平場および第１・２土塁は、地表面から10～30cm掘り下げた面で遺構を確認した。副郭の平場は、黄褐色の地山を平坦に整地していた。副郭の西側にある土塁は、基底幅6.2m、上幅2.2m、高さ1.1m。構築方法は、第２堀切を掘った際に出たと思われる愛島軽石層を積んで造られていた。この積まれた愛島軽石は、大きく３層に分けられた。愛島軽石の下には、暗褐色の粘土質シルト層が堆積していた。７ｂ層から砥石が１点出土した（図版第35図１：写真図版第223図１）。

第２堀切は、幅6.3m、第１土塁からの深さは2.8m、東斜面の角度は35度、西斜面の角度は30度である。底面はほぼ平らで、幅は60cmである。堆積土は４層、深さは105cmある。第２堀切は、地山の愛島軽石層を掘って造られている。

第１土塁は、基底幅4.6m、上幅1.4m、高さ1.0mある。構築方法は、地山を削り出して造られている。第２土塁は、基底幅4.2m、上幅2.1m、高さ0.9mある。構築方法は、地山を削り出した上に、褐色のシルト層を積んで造られている。表土の下、６層上面から剥片（写真図版第224図11）と砕片が各１点出土した。この６層は、副郭西側の土塁下の８層と対応する層である。第２土塁は、愛島軽石層の上面まで掘り下げたが遺物の出土は無かった。

第３堀切は、幅10.0m、第２土塁からの深さは3.9m、東斜面の角度は35度、西斜面の角度は30度である。底面はほぼ平らで、幅は90cmである。堆積土の最も厚いところは64cm、堆積土は３層あり、すべて自然堆積層である。堀切は、愛島軽石層などの地山を掘り込んで造られている。

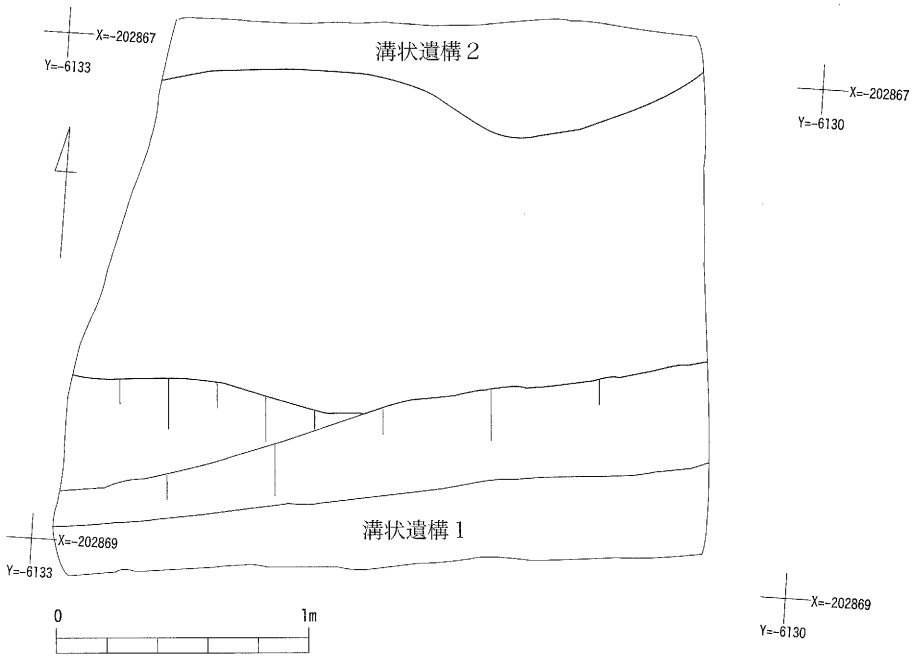
副郭西側にある土塁の、盛土下の７ａ層および７ｂ層を掘り下げた８層で遺物が多数出土した。８層は褐色シ



第19トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　　考
溝状遺構	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	10YR3/4暗褐色土をブロック状に含む　炭化物・焼土を少量含む

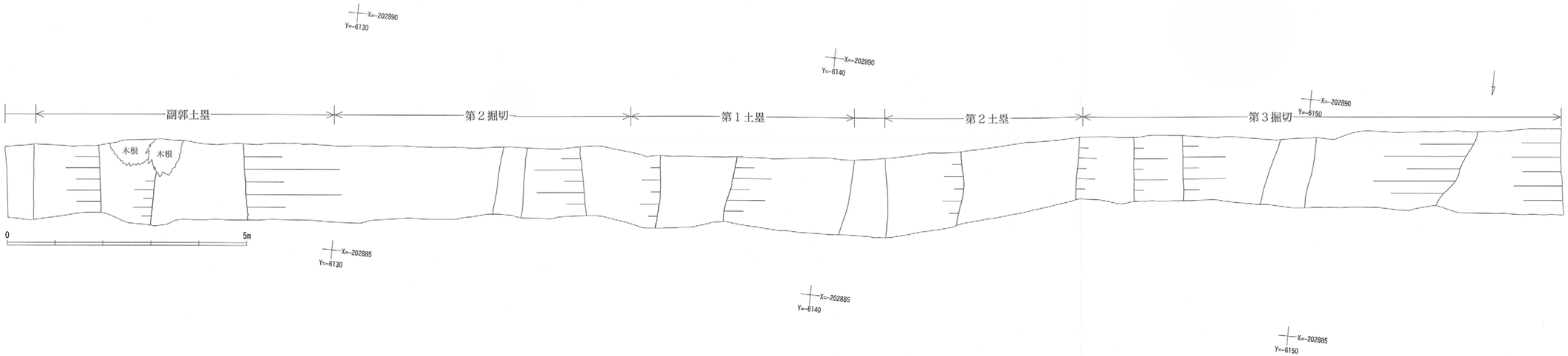
第28図　第19トレンチ（縮尺1/30）



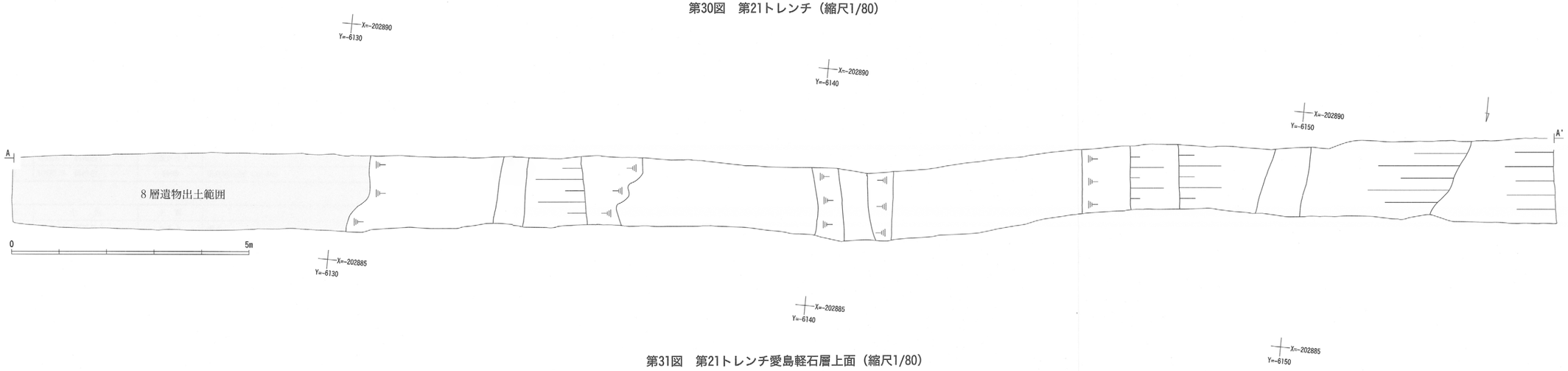
第20トレンチ遺構註記表

遺構名	土　色	土　質	備　　考
溝状遺構1	10YR3/4　暗褐色	粘土	
溝状遺構2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	

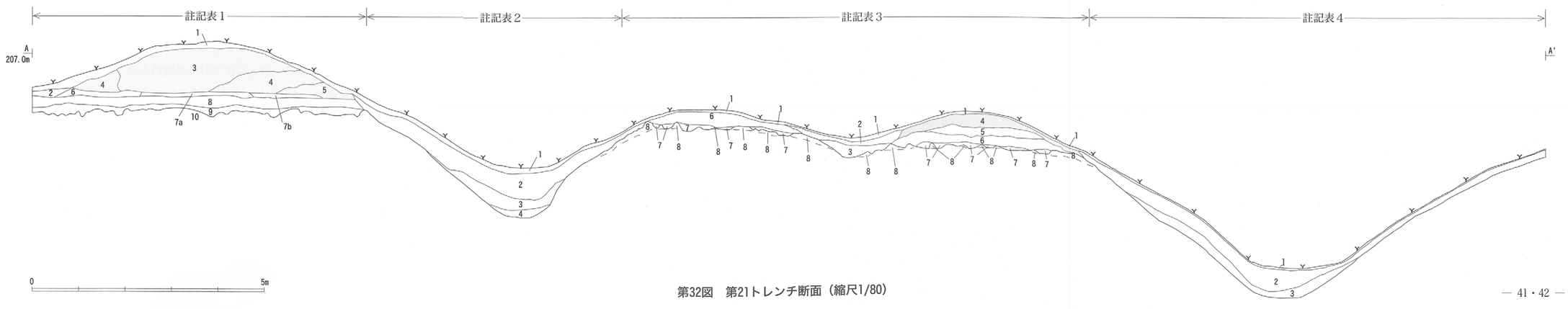
第29図　第20トレンチ（縮尺1/30）



第30図　第21トレンチ（縮尺1/80）



第31図　第21トレンチ愛島軽石層上面（縮尺1/80）



第32図　第21トレンチ断面（縮尺1/80）

註記表1

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 褐色	シルト	
3層	10YR7/8 黄橙色	砂礫	愛島軽石の副郭土墨積土
4層	10YR4/6 褐色	砂質シルト	愛島軽石をブロック状に含む 副郭土墨積土
5層	10YR4/6 褐色	シルト	愛島軽石の1cm～2cmの塊を少量含む 副郭土墨積土
6層	7.5YR4/4 褐色	シルト	5mm前後の小礫を少量含む 10YR4/4褐色シルトをブロック状に含む
7a層	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性が強い
7b層	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性は7a層より弱い 炭化物を少量含む 5mm前後の小礫を少量含む 砥石出土
8層	7.5YR4/4 褐色	シルト	2mm～5mmの川崎スコリアの細かい塊を少量含む 0.5cm～5cmの青灰色の角礫を含む 石器・縄文土器片・炭化物出土
9層	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	0.5cm～5cmの青灰色の角礫を多量に含む 2mm～5mmの磁鉄鉱を少量含む
10層	10YR7/8 黄橙色	砂礫	愛島軽石層 (Ac-Md)

註記表2

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
3層	10YR5/8 黄褐色	砂質シルト	愛島軽石をブロック状に含む
4層	10YR4/6 褐色	砂質シルト	愛島軽石を多量に含む

註記表3

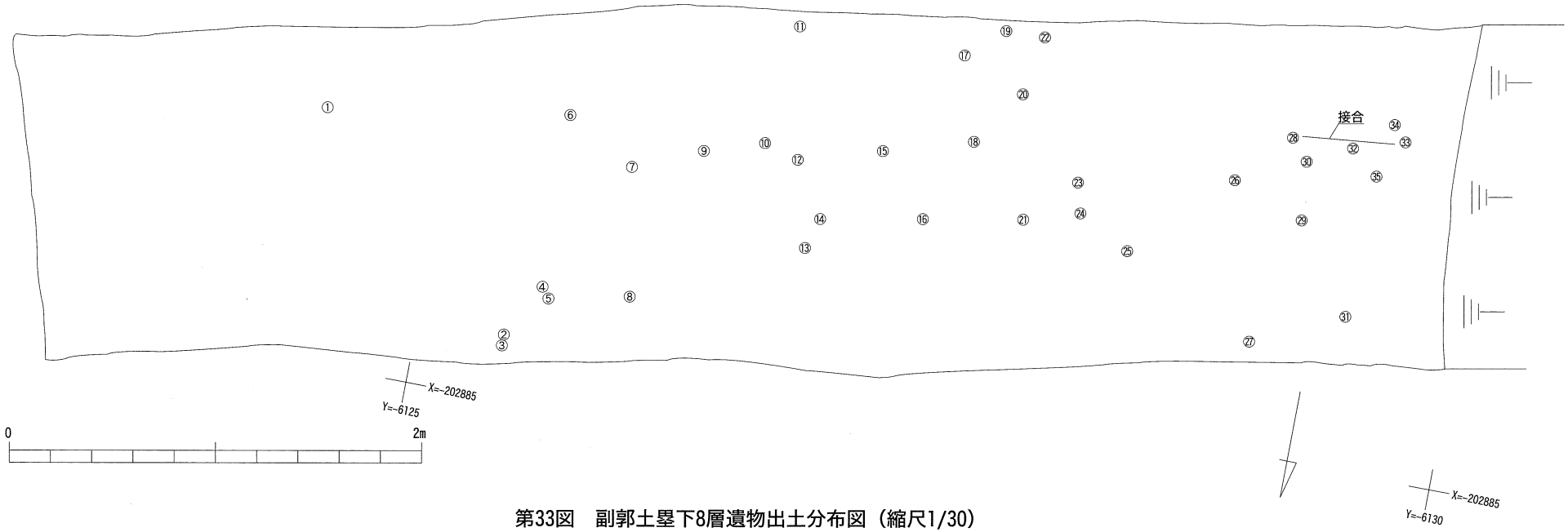
層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 褐色	シルト	
3層	10YR4/6 褐色	シルト	愛島軽石をブロック状に少量含む
4層	10YR4/4 褐色	シルト	愛島軽石をブロック状に少量含む 暗褐色シルトをブロック状に含む 第2土墨積土
5層	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む 明褐色シルトをブロック状に多量に含む
6層	7.5YR5/6 明褐色	シルト	愛島軽石をブロック状に少量含む
7層	10YR5/4 黄褐色	砂質シルト	
8層	10YR7/8 黄橙色	砂礫	愛島軽石層 (Ac-Md)

註記表4

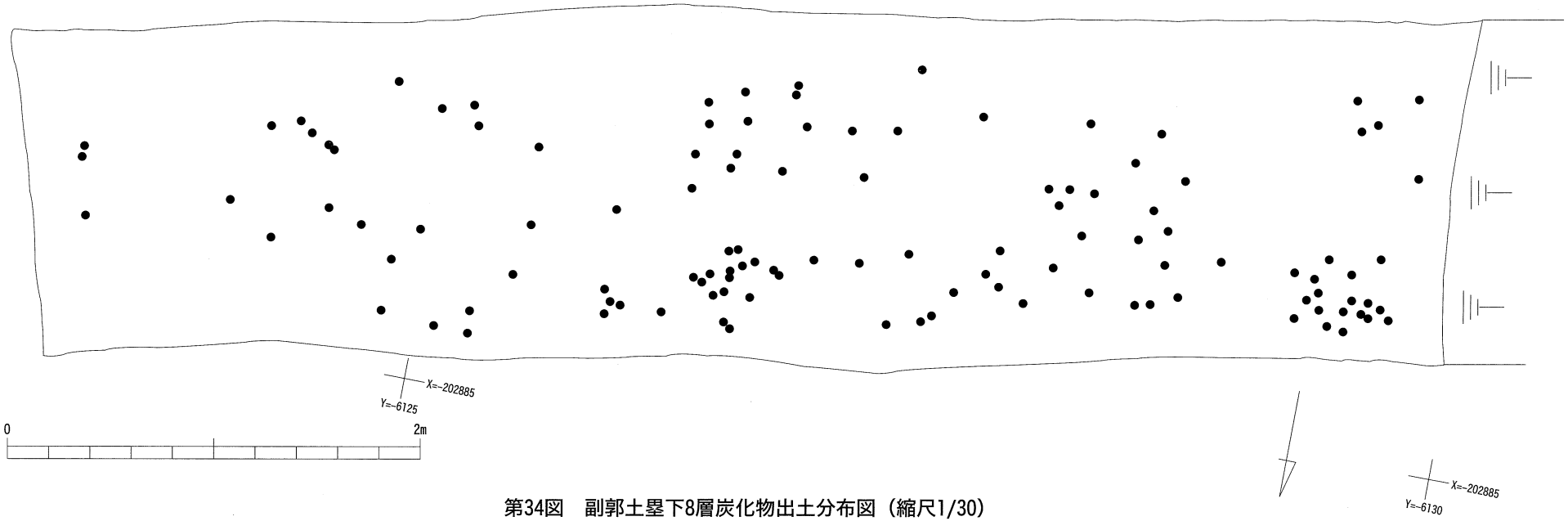
層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
3層	10YR4/4 褐色	シルト	

第2表 第21トレンチ断面土層註記表

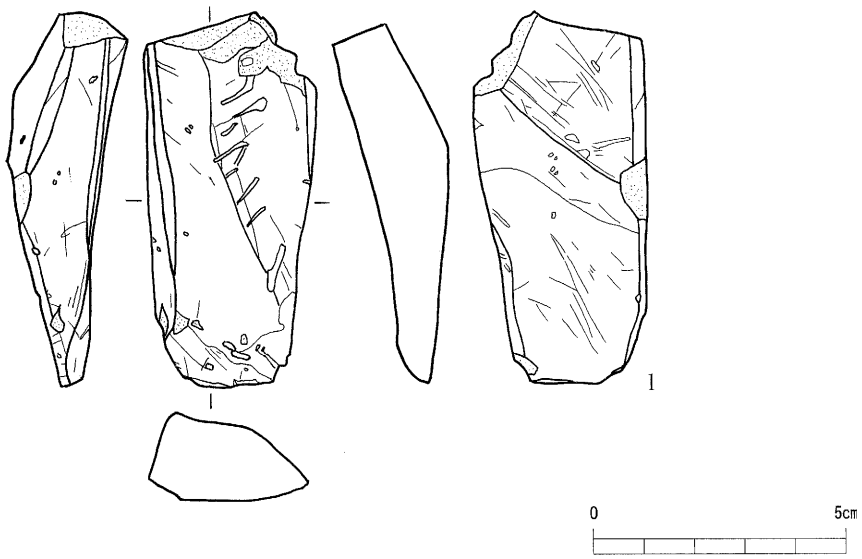
ルトで、川崎スコリアの細粒を僅かに含む層である。出土した遺物は、石器37点と縄文土器片1点である。石器の分布は東西5.2mあるが、特に土墨の真下から西側にかけて多く、縄文土器片は堀切の斜面から東へ40cmのところから出土した。遺物の周りからは、炭化物も多数認められた（第33・34図参照）。炭化物の分布も、石器などの分布と同様に土墨の真下から西側にかけて多かった。石器は、スクレイパーの破片2点（図版第35図2・3：写真図版第223図2・3）、二次加工のある剥片1点だけである（図版第35図4：写真図版第223図4）。その他は、石核7点、剥片26点、砕片1点である。石材は、玉髄とデイサイト質珪化凝灰類が多く、中には接合する玉髄の剥片も2点あった（図版第36図1～3：写真図版第223図5～7）。縄文土器片は、暗灰色で繊維を含むが、非常に摩滅しており文様は不明である（図版第35図6：写真図版第224図10）。8層の層厚は、17～24cmである。9層は、にぶい黄橙色砂質シルト層であったが遺物の出土は無かった。10層は愛島軽石層で、その上面にはかなりの凹凸が認められた。



第33図　副郭土塁下8層遺物出土分布図（縮尺1/30）

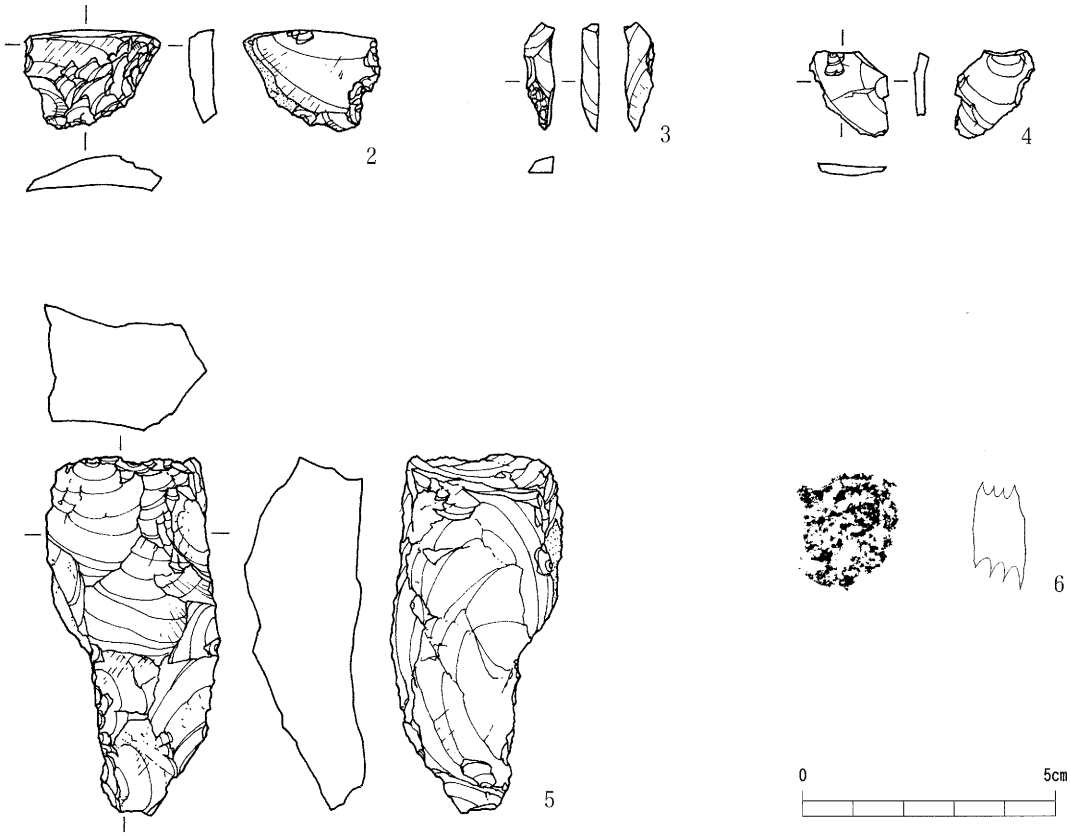


第34図　副郭土塁下8層炭化物出土分布図（縮尺1/30）

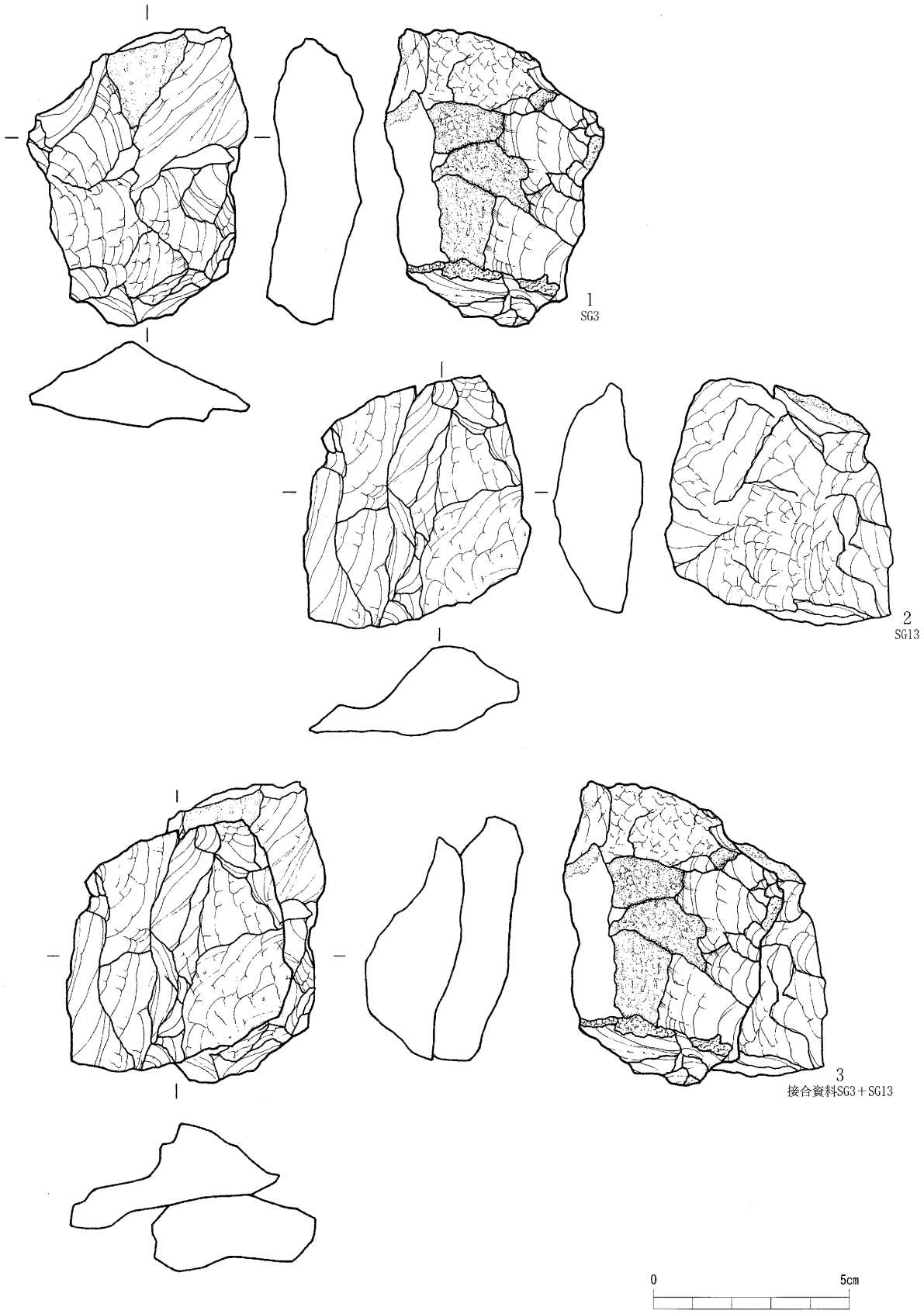


第21トレンチ出土　石製品観察表

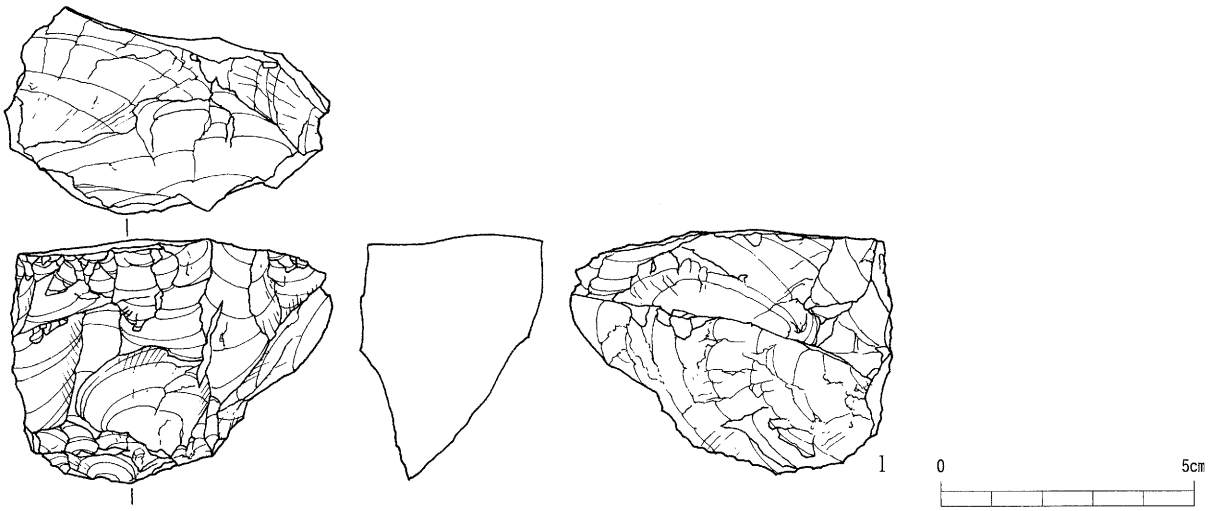
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
第35図1	SG135	副郭土塁下	7b層	石製品	砥石	76	34	21	51	デイサイト	破損	第223図1



第35図　副郭土塁下出土遺物①（縮尺2/3）



第36図　副郭土塁下出土遺物②（縮尺2/3）



第37図　副郭土塁下出土遺物③（縮尺2/3）

第21トレンチ副郭土塁下８層出土　石器観察表

第33図	図版番号	登録番号	種　別	石　材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備　考	写真図版
①		ＳＧ31	剥片	デイサイト質珪化凝灰岩	33.7	27.3	11.1	8.3		第223図10
②		ＳＧ29	剥片	珪質頁岩	50.3	23.2	17.8	20.7		
③		ＳＧ30	剥片	デイサイト質凝灰岩	14.6	7.2	3.7	0.2		
④		ＳＧ32	剥片	デイサイト質凝灰岩	29.8	21.1	11.8	3.3		
⑤		ＳＧ33	砕片	デイサイト質珪化凝灰岩	8.6	6.8	0.9	0.1		
⑥		ＳＧ11	剥片	デイサイト質珪化凝灰岩	24.7	13.9	2.1	0.6		第223図11
⑦		ＳＧ10	剥片	デイサイト質凝灰岩	72.3	44.2	17.7	46.8		第223図９
⑧		ＳＧ34	剥片	デイサイト質珪化凝灰岩	18.9	10.2	2.1	0.3		
⑨	第35図４	ＳＧ９	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩(珪化が著しい)	21.3	12.8	3.0	0.7		第223図４
⑩	第35図３	ＳＧ27	スクレイパー	デイサイト質珪化凝灰岩	21.2	5.9	3.3	0.4	破損	第223図３
⑪		ＳＧ28	剥片	デイサイト(珪化が著しい)	13.0	11.1	2.1	0.2		
⑫		ＳＧ25	剥片	デイサイト(珪化が著しい)	11.9	11.0	0.9	0.1		
⑬		ＳＧ26	剥片	デイサイト質珪化凝灰岩	20.9	15.1	1.9	0.3		
⑭		ＳＧ８	剥片	デイサイト質珪化凝灰岩	27.1	24.3	10.2	4.3	加熱痕	第223図12
⑮		ＳＧ24	剥片	デイサイト質凝灰岩	27.0	11.2	9.1	0.7		
⑯		ＳＧ22	石核	玉髄	69.0	45.1	44.0	124.4		第223図14
⑰		ＳＧ23	剥片	玉髄	57.3	50.1	22.2	48.6		第224図６
⑱		ＳＧ７	剥片	デイサイト質凝灰岩	18.9	12.2	7.2	0.9		
⑲		ＳＧ35	剥片	デイサイト質凝灰岩	24.2	20.2	8.9	1.7		
⑳		ＳＧ６	剥片	デイサイト質凝灰岩	25.4	16.1	12.0	2.0		
㉑	第35図５	ＳＧ21	石核	玉髄	72.2	41.3	25.6	65.3		第223図８
㉒		ＳＧ20	石核	玉髄	66.5	52.0	32.1	124.8		第224図１
㉓	第35図２	ＳＧ19	スクレイパー	珪質頁岩	27.0	19.3	6.8	3.2	破損	第223図２
㉔		ＳＧ18	剥片	玉髄	36.8	13.2	4.9	1.5		第223図13
㉕		ＳＧ５	石核	珪化木（玉髄化が著しい）	65.8	65.8	26.3	128.6		第224図５
㉖		ＳＧ４	剥片	流紋岩（珪化）	75.6	26.8	19.9	18.9		第224図３
㉗		ＳＧ17	剥片	玉髄	25.2	18.1	7.0	2.5		
㉘	第36図１	ＳＧ３	剥片	玉髄	81.9	61.0	24.0	105.6	ＳＧ13と接合	第223図５
㉙		ＳＧ１	石核	玉髄	114.6	85.7	76.4	687.0		第224図２
㉚		ＳＧ２	剥片	玉髄	23.0	14.3	0.7	1.1		
㉛		ＳＧ16	剥片	玉髄	15.9	10.8	5.0	0.5		
㉜		ＳＧ15	剥片	玉髄	17.8	11.6	2.9	0.6		
㉝	第36図２	ＳＧ13	剥片	玉髄	69.6	59.1	24.7	70.0	ＳＧ３と接合	第223図６
㉞		ＳＧ14	石核	玉髄	98.5	74.1	50.0	296.6		第224図７
		ＳＧ40	剥片	玉髄	72.2	66.2	22.3	102.3	地点不明（㉝の西方・堀切斜面）	第224図９
	第37図１	ＳＧ41	石核	玉髄	66.3	54.1	42.2	129.9	地点不明（㉝の西方・堀切斜面）	第224図８
		ＳＧ42	剥片	頁岩	26.3	23.3	5.5	3.1	地点不明（㉝の西方・堀切斜面）	第224図４

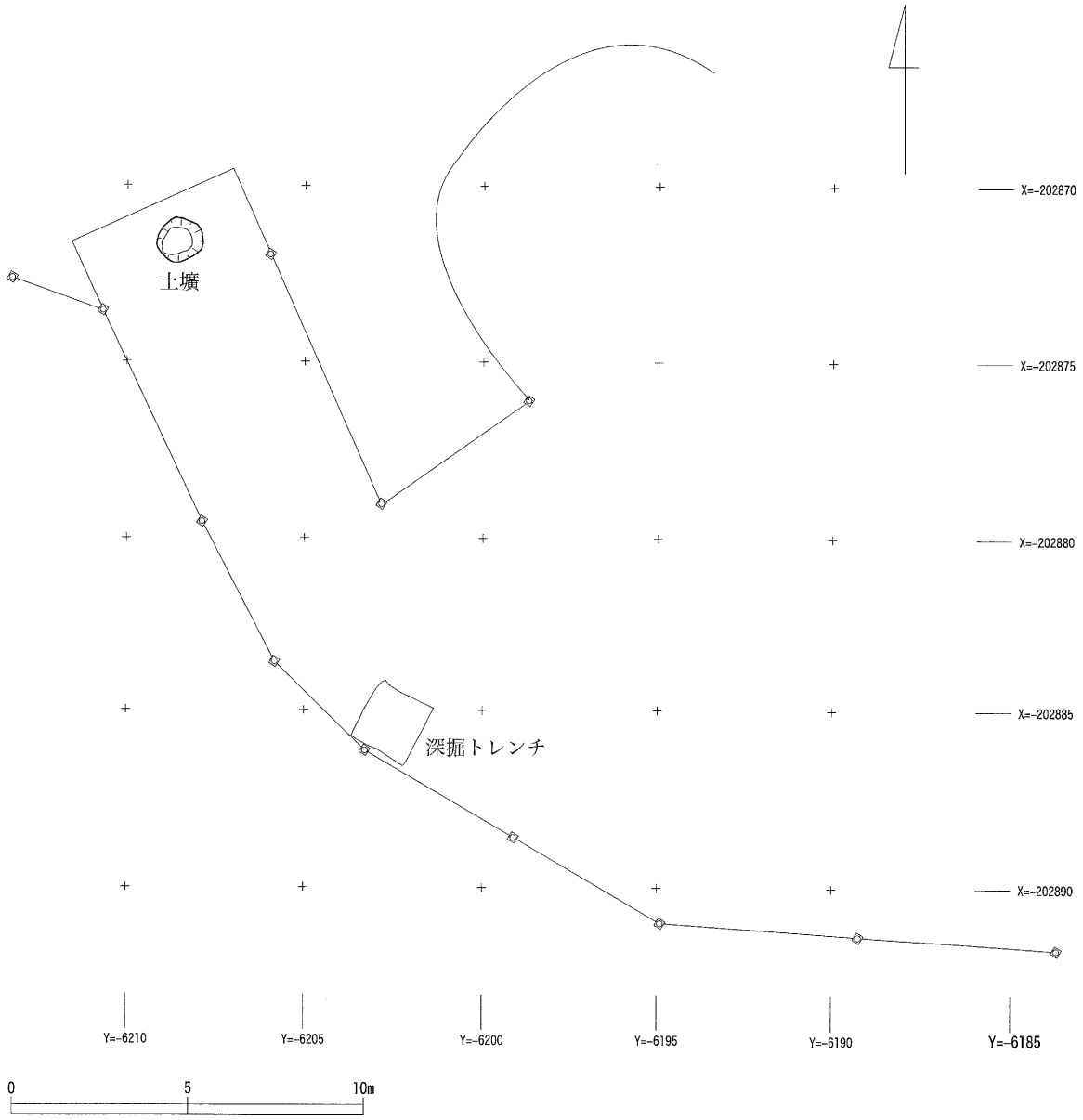
第21トレンチ副郭土塁下８層出土　土器観察表

第33図	図版番号	登録番号	種 別	器 種	部 位	外 面	内 面	時　期	備　考	写真図版
㉟	第35図６	ＳＧ88	縄文土器	深鉢	体部	不明	不明	早期末～前期中	繊維混入	第224図10

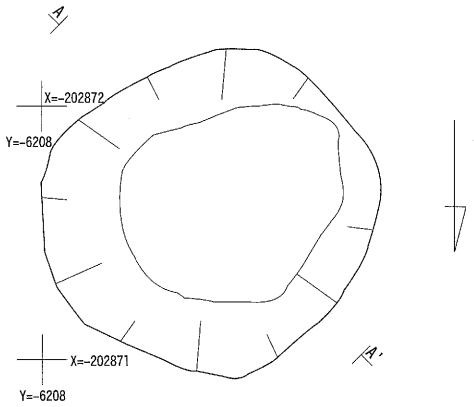
㉒A区（図版第38～45図：写真図版第211～219図）

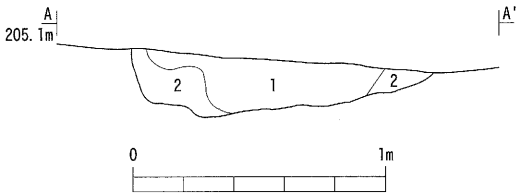
館跡西方の緩やかな斜面である。調査区の西端、２層上面で土壙が１基確認された。平面形は円形で、長径1.35m、短径1.2m、深さ0.24m、壁面は緩やかに立ち上がり、底面は窪んでいる。壁面から底面にかけては、先の尖った棒状の道具で掘ったものと思われ、かなりの凹凸がみられる。堆積土は２層あり、１層には炭化物が多量に含まれており、縄文土器片が１点出土した（図版第40図１：写真図版第225図１）。

Ａ区の基本層序を観察するため、西南端に1.5m×２mの深掘トレンチを設定し、地表面から2.2mまで掘り下げた。堆積層は全部で20層あり、４層と９層から縄文土器片と石器などが僅かに出土した。その中から、縄文土器片５点、スクレイパーと剥片各１点を図示した（図版第43図１～７：写真図版第225図２～８）。地表面から約1.2m下で、川崎スコリア層が確認され、層厚は約13cm である。また、Ａ区内の西南部からは、縄文土器・弥生土器・土師器などの小破片や、打製石斧・スクレイパーなどの遺物を表採した（図版第44図１～10、第45図１・２：写真図版第225図９・10・第226図１～10）。



第38図　Ａ区遺構・深掘トレンチ配置図（縮尺1/200）





A区土壙土層註記表

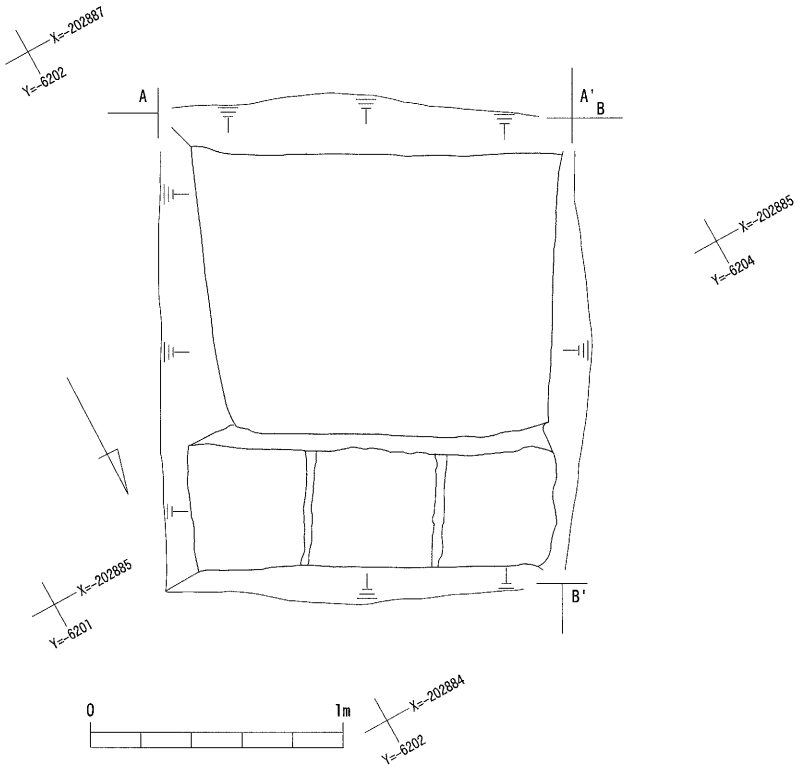
層位	土色	土質	備考
1層	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を多量に含む 黄褐色土を含む
2層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む 焼土を少量含む

第39図 A区土壙（縮尺1/30）

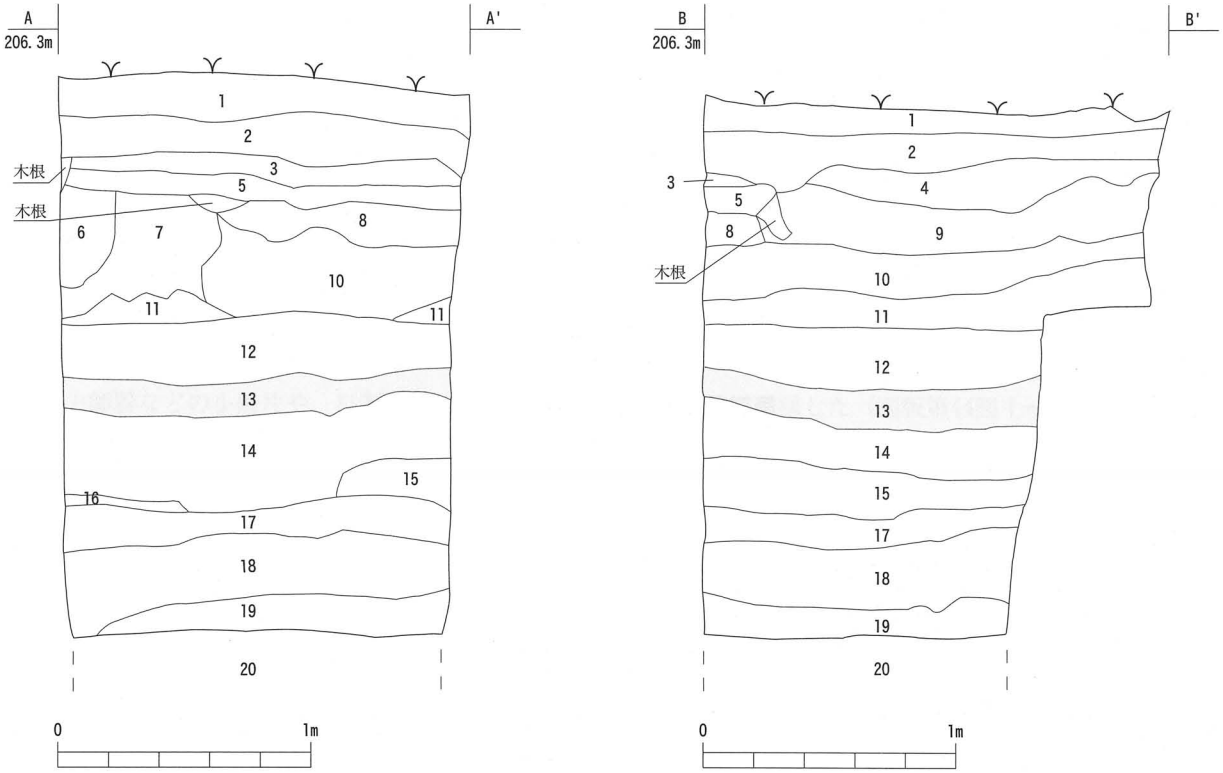
A区土壙出土 土器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第40図1	SG86	A区土壙	2層	縄文土器	深鉢	口縁部	LR(横位)	ナデ	前期前葉	繊維混入	第225図1

第40図 A区土壙出土遺物（縮尺2/3）



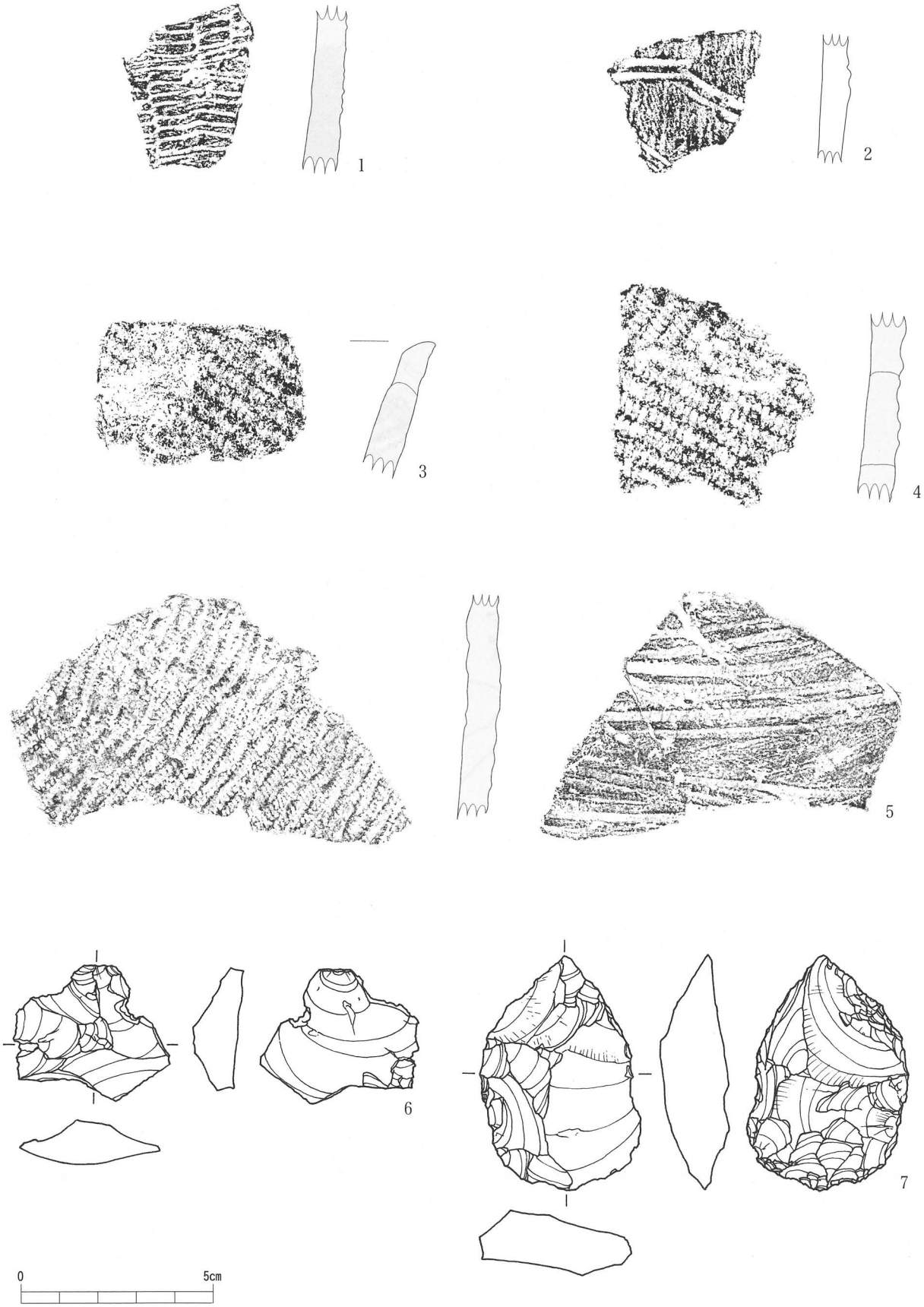
第41図 A区深掘トレンチ（縮尺1/30）



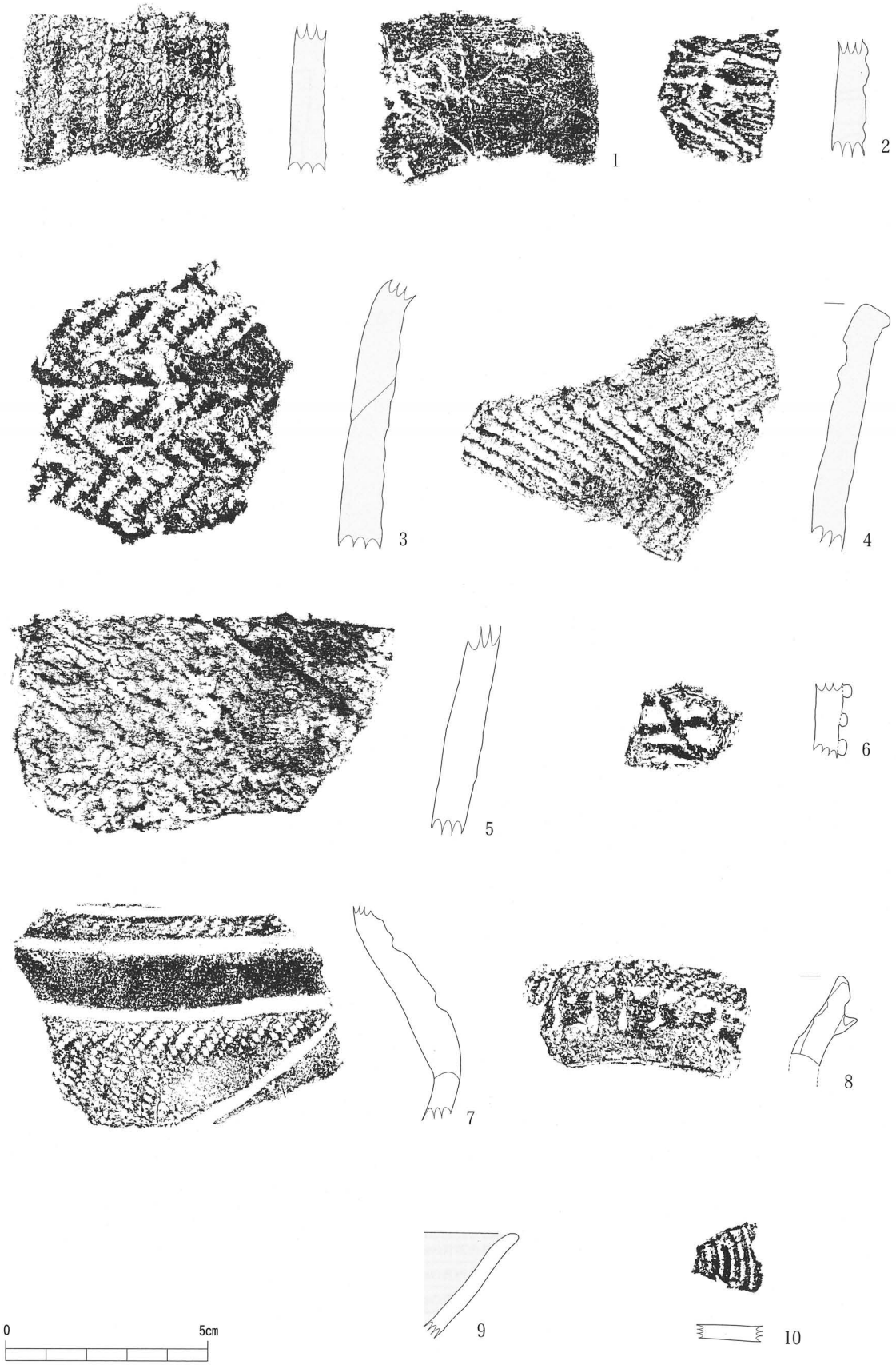
A区深堀トレンチ土層註記表

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土 1cm～3cmの粘土を含む
2層	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色土をブロック状に含む 1cm～3cmの粘土を含む
3層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	1cm～3mの粘土を含む
4層	7.5YR4/4 褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む 1cm～3cmの粘土を含む 縄文土器片・剥片・砕片を含む
5層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	1cm～3cmの粘土を含む 炭化物を底辺に少量含む
6層	10YR4/6 褐色	シルト	1cm～3cmの粘土を含む
7層	10YR4/6 褐色	シルト	1cm～3cmの粘土を含む 炭化物を少量含む
8層	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	1cm～3cmの粘土を含む
9層	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	1cm～3cmの粘土を含む 縄文土器片・剥片・砕片を含む
10層	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	9層よりやや黄色 1cm～3cmの粘土を含む
11層	10YR4/6 褐色	シルト	10層よりやや黄色 1cm～3cmの粘土を含む
12層	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	0.5cm～2cmの川崎スコリアの塊を含む
13層	5YR5/6 明赤褐色 10YR6/6 明黄褐色	スコリア	川崎スコリア層（Za-Kw）
14層	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	0.5cmの角閃石を少量含む 0.2cm～0.5cmのスコリアの塊を少量含む
15層	10YR6/6 明黄褐色	粘土	0.5cm～1.5cmの青灰色角礫を少量含む 0.1cm～0.3cmのマンガン粒を少量含む
16層	10YR6/6 明黄褐色	粘土	15層よりやや黄色 0.2cm前後の青灰色角礫を少量含む 0.1cmのマンガン粒を少量含む
17層	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	0.2cm～1.5cmの青灰色角礫を少量含む 0.1cmのマンガン粒を多量に含む
18層	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	0.3cm～1.5cmの青灰色角礫を多量に含む 0.05cmのマンガン粒を多量に含む
19層	10YR7/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	0.1cm～0.5cmの青灰色角礫を多量に含む 0.05cm以下のマンガン粒を多量に含む
20層	10YR7/4 にぶい黄橙色	砂	0.2cm～0.5cmの青灰色角礫を多量に含む

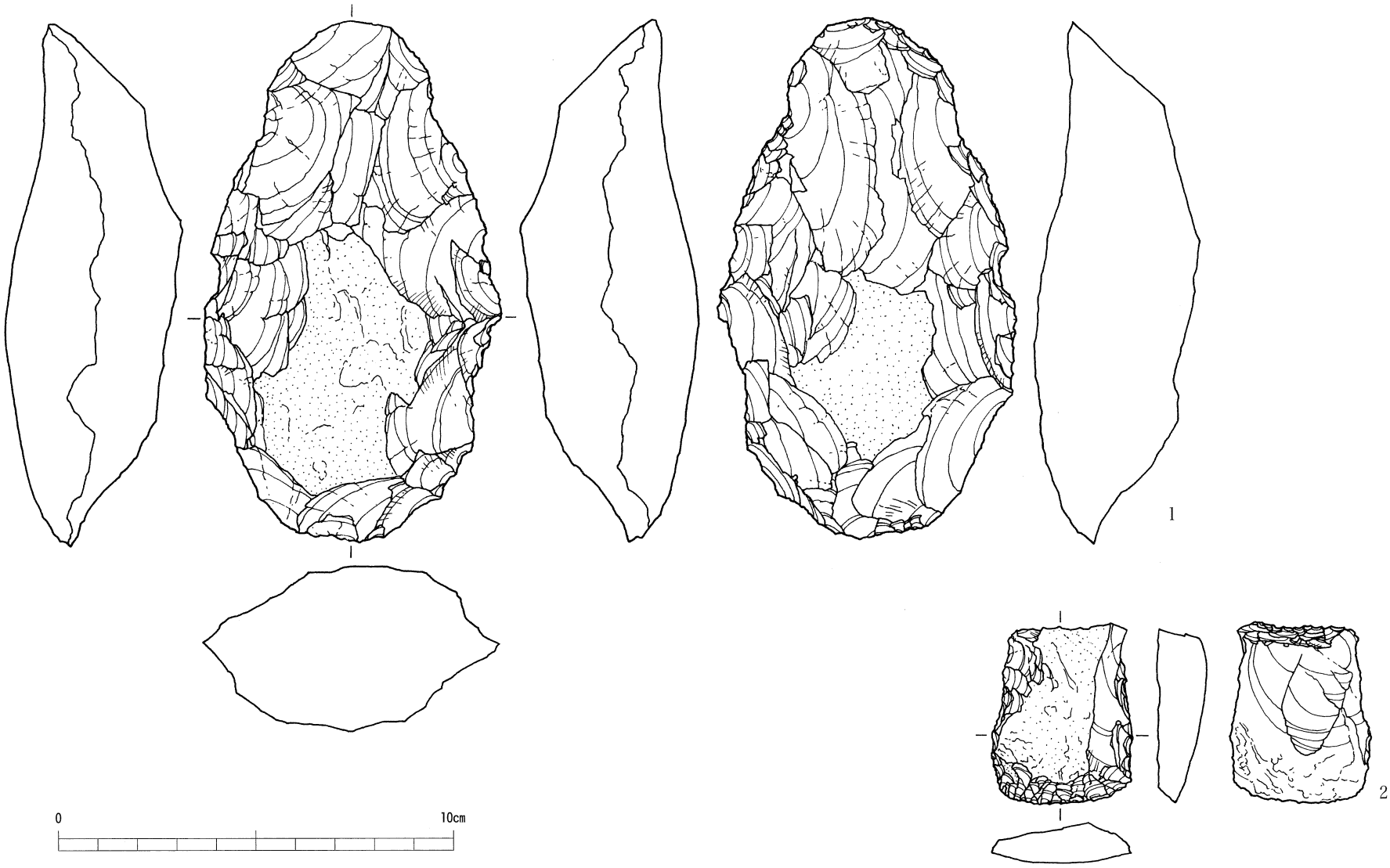
第42図 A区深掘トレンチ断面（縮尺1/30）



第43図　A区深掘トレンチ出土遺物（縮尺2/3）



第44図　A区表採遺物①（縮尺2/3）



第45図　A区表採遺物②（縮尺2/3）

A区深掘トレンチ出土　土器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第43図1	SG92	A区深堀	4層	縄文土器	深鉢	体部	葺瓦状撚糸文（R）横位	ミガキ	大木2a式	繊維混入	第225図2
第43図2	SG94	A区深堀	4層	縄文土器	深鉢	体部	条痕→同時二本沈線	ミガキ			第225図3
第43図3	SG93-2	A区深堀	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	縄文（RL）横位	ナデ	早期末～前期初頭	繊維混入	第225図4
第43図4	SG93-8	A区深堀	4層	縄文土器	深鉢	体部	羽状縄文（RL-LR）	ナデ	早期末～前期初頭	繊維混入	第225図6
第43図5	SG91-1	A区深堀	9層	縄文土器	深鉢	体部	LR（横位）	貝殻条痕文	早期後葉	繊維混入	第225図5

A区表採　土器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真図版
第44図1	SG98-2	A区	表採	縄文土器	深鉢	体部	縄文（RL）斜位	ナデ	早期後葉～前期初頭	繊維混入	第225図9
第44図2	SG85	A区	表採	縄文土器	深鉢	体部	葺瓦状撚糸文（L）	ミガキ	大木2a式	繊維混入	第226図1
第44図3	SG98-1	A区	表採	縄文土器	深鉢	体部	非結束羽状縄文（RL-LR）	ナデ	前期初頭	繊維混入	第225図10
第44図4	SG97-1	A区	表採	縄文土器	深鉢	口縁部	結束第1種羽状縄文(RL-LR)	ヨコナデ	前期前葉（上川名～大木1式）	繊維混入	第226図3
第44図5	SG114	A区	表採	縄文土器	深鉢	体部	側面ループ文	ミガキ	大木2a式	繊維混入	第226図4
第44図6	SG99	A区	表採	縄文土器	深鉢	体部	粘土紐貼付文	不明(風化)	大木4式		第226図2
第44図7	SG107	A区	表採	弥生土器	壺	体部	LR横位→変形工字文→ミガキ	ミガキ	前期後半～中期前半（鱸沼式）		第226図5
第44図8	SG87	A区	表採	弥生土器	深鉢	口縁部	縄文（LR）、交互刺突文	ナデ	天王山式		第226図6
第44図9	SG112	A区	表採	土師器	坏	口縁部	ロクロ調整	ナデ→ミガキ	表杉ノ入式	内面黒色処理	第226図7
第44図10	SG105	A区	表採	土師器	坏	底部	回転糸切	不明(風化)			第226図8

A区深掘トレンチ出土　石器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第43図6	SG54	A区深堀	4層	剥片	珪化凝灰岩(珪化が著しい)	36.7	34.3	15.8	12.4		第225図7
第43図7	SG49	A区深堀	9層	スクレイパー	玉髄	61.8	42.1	18.7	50.4		第225図8

A区表採　石器観察表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第45図1	SG63	A区	表採	打製石斧	デイサイト	132.8	76.0	39.9	407.0		第226図10
第45図2	SG80	A区	表採	スクレイパー	珪岩（鉄石英）	45.2	37.0	12.1	24.5		第226図9

（8）まとめ

①中世

館跡内に設けた21箇所の調査区のうち、遺構が確認された調査区は17箇所であった。それらの遺構を、主郭・副郭・腰郭や堀切などの遺構ごとに調査結果をまとめる。

主郭の中央よりやや東方には、南北方向に延びる段状遺構がある。この段の下に設定した第8トレンチからは、段状遺構とほぼ平行する溝状遺構と掘立柱建物跡が確認された。掘立柱建物跡は、溝状遺構を切っているので、掘立柱建物跡の方が新しい。この掘立柱建物跡と溝状遺構などのある面は、地山を削平して整地されている。段状遺構は、断面を断ち割って観察した結果、表土を地山面まで削り整地した後、再度積み土をして整地している。主郭の東北端と北端に設定した、第7トレンチと第11トレンチからは、積み土をした整地層が確認された。東南端に設定した第6トレンチからは地山に掘られたピットが、東北端に設定した第7トレンチからは、整地層に掘られたピットが確認された。これは、土塁の無いところに建てられた柵か塀の柱穴と思われる。西側から南側にかけての土塁は、地山を削り出して築かれているが、一部は積み土をして高くしている。以上の調査結果からすると、主郭の平場は、ほとんどが地山を削平して整地され、削られた土は段状遺構と平場の縁辺部に積んで整地したものと考えられる。

副郭の東側、平場部分の第16トレンチからは、ピットなどは確認できなかったが、地山を削平して整地した平坦面が確認された。西側にある土塁は、第21トレンチの断ち割り状況から、第2堀切を造った際に出た地山の愛

島軽石を積んで構築されていた。

副郭の西側には、第２堀切と第３堀切、その間に第１土塁と第２土塁という四重の防御線があり、西側からの尾根沿いに攻撃してくる敵を意識した防御構造になっている。これは、菅生館跡の南側から東をまわって北側にかけては急斜面であるが、西側には斜面が無くほぼ平坦な面で、攻撃され易いことによるものと考えられる。

第１腰郭の、第１・２・３・４・５トレンチからは、ピット・土壙・溝状遺構などが確認された。特に第１・２トレンチはピットの数が多く、ここには掘立柱建物あるいは柵や塀などの構造物が建てられていたものと考えられる。第５・６トレンチの、主郭の斜面下に当たるところからは溝状遺構が確認されたが、これは排水のために造られたものと考えられる。

第２腰郭の第14トレンチからは、ピットが６個確認されたが、その中の３個は直径が70～90cmと菅生館跡の中でも大きなピットである。このピットは、第２腰郭の縁辺部ではなく、腰郭のほぼ中央部なので、柵や塀ではなく掘立柱建物の掘り方である可能性が高いものと考えられる。

副郭北側の斜面下にある通路状遺構の、第19・20トレンチからは溝状遺構が確認された。これは、東西方向にある通路状遺構と平行し、通路状遺構の中ほどから西側にある溝状遺構と接続するものと思われる。この溝状遺構は、それほど深いとは思えないので、その機能に関しては排水用であると考えられる。

紫桃正隆氏は、『史料仙台領内古城・館』第４巻の中で菅生館跡の略図を公表されており（文献３）、その図中に大手門と搦手を入れている。大手門とされた地点は、主郭の東南下にある第３腰郭の中ほどである。この場所は、第３腰郭の中央から東北方に約1.4mの段を上がると、主郭と櫓状遺構との間に出るところで、門跡の遺構は現地表面からは確認できなかった。しかし、この場所以外には、門を造れる適当な場所はみられないので、ここが門跡の最も有力な地点の一つと思われる。また、紫桃氏は搦手と思われる場所を、第１腰郭から第５腰郭へ一段降りて、さらに第19腰郭へと下る付近としているが、現状の観察では明確に搦手とは確認できなかった。

また、館跡内には井戸跡や豊富に水が湧くような地点は見つからなかったので、常に館内で生活することは難しいと思われる。したがって、菅生館に関係する武士は、平時は水場のある山麓近くの平地に居住し、有事の際に館へと登ったものと考えられる。

遺物は、第８・９・13トレンチから中世陶器と中国製磁器の破片が出土した。中世陶器は、すべて在地産の甕の破片で、年代は13世紀後半から14世紀前半である。中国製磁器は、染付（青花）文様のある椀か皿の小破片で、年代は16世紀である。そのほか、石臼・石鉢・土師質土器・木製椀の破片も各１点出土または表採した。

菅生館跡の年代は、出土した陶磁器から鎌倉時代後期に築造され、その後戦国時代に再び使用されたものと考えられる。しかし、調査結果からは戦国時代に使用された際に、当初築造された館の構造がどの程度変更されたかということについては判らなかった。館主については、江戸時代の記録では菅生助八郎と伝えているが、これを裏付けられるような遺物の出土はなかった。『伊達世臣家譜』によると、菅生助八郎は、文禄４年（1595）に伊達政宗から菅生村に100石を給されたが、16世紀の中国製磁器の小破片はそれを裏付ける資料かもしれない。それよりも、新しい時代の遺物の出土は無かったので、菅生助八郎が栗原郡刈敷村に改められた後はすぐに廃城になったものと思われる。その年代は、慶長から元和年間（1596～1624）頃と推定される。刈敷村に移ってからの菅生氏の動向については不明であるが、『維新前本村内在住藩士食禄及人名』には「一、三百石　大藩士　刈敷村　菅生助八郎」と記されている（文献12）。

②縄文時代～古代

第８トレンチ・第13トレンチ・第21トレンチからは石器などが出土したので、菅生館跡の主郭から副郭にかけ

ての尾根上には、縄文時代の遺構があったものと推測されるが、築城によって大部分が破壊されたものと思われる。しかし、第21トレンチの副郭西側は、土塁の積み土によって縄文時代の包含層が残存しており、８層から37点の石器と縄文土器片が１点出土した。この８層の土壌からは、テフラ分析により火山ガラスが僅かに検出され、これは姶良Ｔｎ火山灰と阿蘇４テフラに由来する可能性が高いという結果が出ている（付編参照）。石器の周辺からは、炭化物も多く検出され、その中から１個を分析した結果、それはクリであった。石器には、スクレイパーの破片２点と二次加工のある剥片が１点だけで、トゥールが非常に少ない傾向にあり、ほとんどが石核や剥片である。また、２点だけであったが接合資料もあり、これは石器の製作をこの場所で行っていたことを示すものである。調査区の幅は1.6mほどであったが、ほぼ全面で石器などが出土したので、この分布は調査区の南側および北側にも延びるものと思われる。また、第１土塁からも剥片などが２点出土しているので、第２堀切を越えた東西14mの範囲まで石器の製作場であった可能性もある。

石器には、時代的な特徴を有するものが無く、石器から年代を特定することは出来なかった。年代を推定できる遺物は、同一の層から１点だけ出土した縄文土器片である。この縄文土器片は繊維を含む土器であるが、風化のために文様がまったく残っていないので、型式名などは判らない。繊維土器は、一般的に縄文時代早期末葉から前期中葉とされているので、石器もこの頃のものと考えられる。しかし、８層中に包含されていた炭化物の放射性炭素年代測定からは、補正年代で3044±38という縄文時代後期後葉頃という測定結果が出たので、繊維土器の相対的な年代とはかなり離れたものとなった。

出土した石器の石材は、玉髄と玉髄化した珪化木が最も多く16点(43%)、デイサイト質珪化凝灰岩７点(19%)、デイサイト質凝灰岩７点（19%)、デイサイト２点（５%)、珪質頁岩２点（５%)、頁岩１点（３%)、珪化凝灰岩１点（３%)、流紋岩１点（３%）となる。全体的には、玉髄・デイサイト質珪化凝灰岩・デイサイト質凝灰岩の３種が多く用いられている。デイサイト・珪化凝灰岩・流紋岩については、すべて珪化が著しいものである。縄文時代の石器に最も多く用いられた珪質頁岩は、わずかに２点と少ない傾向にある。

デイサイト質珪化凝灰岩類や珪質頁岩・流紋岩などの産出地は不明であるが、玉髄と玉髄化した珪化木については菅生館跡に比較的近いところから産出している。それらは、菅生館跡の東方約２kmの坪沼川上流域から、西南方約7.5kmの新川上流域にかけての地域で、地形的には低い丘陵地帯である。藤原二郎氏や高橋健寿氏の分布調査によると、坪沼川上流域で７箇所、新川上流域で22箇所の計29箇所において玉髄の産出が確認されている。これらの玉髄は、珪化木が何らかの作用によって玉髄に変化するものとされ、これは上部中新統白沢層の軽石質凝灰岩層中に埋没していたものが、表層崩壊や地滑りなどによって地表に露出したものであるという（文献13)。

玉髄製の石器は、村田町大字小泉の賀篭沢遺跡に代表される新川流域遺跡群において多数出土している。この遺跡群は旧石器時代後期で、玉髄を原石として石器の製作を行った原産地遺跡である（文献14)。縄文時代における玉髄の使用については、菅生館跡周辺での発掘調査例が少ないのでよく判っていないが、菅生地区の西南方に隣接する、足立字乗越にある縄文時代後期の東足立遺跡では、珪質頁岩を主要な石材としているが、石鏃や不定形石器の一部に玉髄が用いられている。石鏃では、22%が玉髄、65%は珪質頁岩で、石錐・石匙・篦状石器などには玉髄製のものが無く、３cm以下の小型の石器のみに玉髄が用いられている（文献15)。これは、東足立遺跡においては石器の大きさによって、石材の使い分けがあったことを示すものである。また、村田町大字足立字寺入にある寺入Ｂ遺跡においても玉髄製の鋸歯縁石器が出土している(文献16)。仙台市太白区坪沼字相ノ原にある相ノ原遺跡では、縄文時代後期初頭の層から玉髄製の石器が僅かに出土している（文献17)。さらに、村田町大字村田字迫にある村田城跡でも、弥生時代の遺物包含層中から玉髄の剥片や砕片を採集したことがある。

このことから、村田町の北部地域において、在地の石材である玉髄は旧石器時代後期には主要な石材として用

いられていた。縄文時代早期末葉から前期中葉においても、原石の大半は玉髄であったが珪質頁岩が少量用いられるようになり、縄文時代前期後葉から縄文時代後期の間のいずれかの時期に玉髄と珪質頁岩の逆転が起こり、それ以降は珪質頁岩が主流になるようである。しかし、まったく玉髄が使われなくなるのではなく、弥生時代に入っても石器の一部に玉髄が用いられたものと推測される。これは、今後の菅生館跡の周辺地域、村田町北部から北方に隣接する仙台市太白区坪沼などにおける調査例の増加と、その玉髄が新川流域か坪沼川上流域から供給されたものなのかという化学的分析を含めた検討が必要と思われる。

A区からは、土壙1基と遺物包含層が確認された。土壙の年代は、繊維土器片から縄文時代前期前葉である。深掘トレンチの遺物包含層からは、縄文時代早期後葉から前期初頭にかけての土器と石器が出土した。また、A区内の西南部からは縄文時代早期から前期の土器、弥生土器、平安時代の土師器片なども表採したので、A区の西南方に続く平坦面には、これらの時期の遺構が存在する可能性が高いものと考えられる。

引用・参考文献

1. 菅生地区農林業等活性化推進連絡会議(編)『菅生ふるさと探訪―菅生地区農林業等活性化推進連絡会議活動記録集―』村田町　平成11年3月31日
2. 『柴田郡誌』 柴田郡教育会　大正14年10月15日
3. 紫桃正隆 『史料仙台領内古城・館』第4巻　宝文堂　昭和49年7月20日
4. 「仙台領古城書上」 延宝年間(『仙台叢書』第4巻　107～143頁　仙台叢書刊行会　大正12年9月10日)
5. 「仙台領古城書立之覚」 (『宮城県史』第32巻　108～160頁　宮城県史刊行会　昭和45年3月31日)
6. 「柴田郡菅生村風土記御用書出」 安永6年(『宮城県史』第28巻　391～397頁　宮城県史刊行会　昭和36年9月10日)
7. 『伊達世臣家譜巻之十二』平士之部 (『伊達世臣家譜』第2巻　仙台叢書刊行会　昭和12年3月27日)
8. 宮城県姓氏家系大辞典編纂委員会 『宮城県姓氏家系大辞典』 角川書店　平成6年7月8日
9. 「大崎義宣起請文」 (『宮城県史』第30巻史料集Ⅰ　350頁　宮城県史刊行会　昭和40年3月31日)
10. 「伊達政宗山追人数書」 (『大日本古文書家わけ第三』伊達家文書之二　451～466頁　東京大学出版会　昭和57年5月25日)
11. 村田町史編纂委員会 『村田町史』 村田町　昭和52年3月
12. 志波姫町史編纂委員会 『志波姫町史』 志波姫町　昭和51年10月
13. 大場正善 「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について―東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髄原産地遺跡からの予察―」『宮城考古学』第6号　1～34頁　宮城県考古学会　平成16年5月15日
14. 東北学院大学佐川ゼミナール 「賀篭沢遺跡2005年度発掘調査の成果」『平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』1～6頁　宮城県考古学会　平成17年12月18日
15. 黒川利司 「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ　185～280頁　宮城県教育委員会　昭和56年9月25日
16. 手塚　均 「寺入B遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第120集東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ　107～112頁　宮城県教育委員会　昭和61年3月31日
17. 主浜光郎・佐藤　淳 「相ノ原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第217集相ノ原・大貝中・川添東遺跡―国道286号線(赤石工区)改良工事関係発掘調査報告書―　20～163頁　仙台市教育委員会　平成9年3月

付編　菅生館跡副郭土塁下出土遺物の年代に関わる自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

村田町に所在する菅生館跡は、仙台平野南西方に分布する高舘丘陵の尾根上に位置する。発掘調査では、戦国時代の菅生館を構成していたと考えられる整地層や堀切、土塁などの遺構が確認されているが、土塁の下位の褐色土層からは、スクレイパー、コア、フレイク、チップなどの石器および繊維土器の小片が多数の炭化物を伴って出土している。

本報告では、上述した石器および土器に関わる年代資料を得ることを目的として、伴出した炭化物の放射性炭素年代の測定および包含層中に含まれる指標テフラの検出を行う。

1.　試料

放射性炭素年代測定の対象とした試料は、第21トレンチの副郭土塁下から出土した石器に伴う炭化材１点であり、テフラ分析の対象とした試料は、同地点から採取された石器、土器および炭化物を包含する褐色の土壌１点である。炭化材の注記等については、測定結果を呈示した表１に併記する。

発掘調査所見では、試料が採取された地点の層序を、表土を１層、表土下の自然土壌を２層、その下位の土塁を構成する盛土を３～５層に分層し、盛土の下位に認められた褐色土を６層、暗褐色土を７層、その下位の褐色土を８層、その下位の角礫を多量に含む黄橙色の砂質土壌を９層、最下位の愛島軽石層を10層としている。年代測定試料およびテフラ分析試料の採取された遺物包含層は８層に相当し、８層中には川崎スコリアの細粒を僅かに含んでいるとされている。なお、愛島軽石の噴出年代は９～10万年前、川崎スコリアの噴出年代は３万年前以前とされている（町田・新井、2003）から、９層の形成年代は愛島軽石噴出以降、８層の形成年代は川崎スコリア噴出以降と考えられる。

2.　分析方法

(1)　放射性炭素年代測定

試料は、土壌や根などをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去し、その後HCIにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCIによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト･鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) テフラ分析

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表１に示す。試料は3,040±40BPを示す。表２には暦年較正結果を示す。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正するこ

表１　放射性炭素年代測定結果

試料名	注記など	種　類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
炭化物	副郭土塁下石器 SG5の10cm北 H.17.9.29	炭化材(クリ)	3,040± 40	-25.80±0.72	3,060± 40	9106-1	IAAA-51799

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
炭化物	3,044±38	σ	cal BC 1,383 — cal BC 1,333	cal BP 3,333 — 3,283		0.469	9106—1
			cal BC 1,324 — cal BC 1,266	cal BP 3,274 — 3,216		0.531	
		2σ	cal BC 1,413 — cal BC 1,208	cal BP 3,363 — 3,158		0.992	
			cal BC 1,201 — cal BC 1,196	cal BP 3,151 — 3,146		0.005	
			cal BC 1,138 — cal BC 1,135	cal BP 3,088 — 3,085		0.003	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) １桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、２σは95%である
5) 相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

とである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。今回の試料には、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差をσとして計算させた結果、試料の暦年代はcalBC1,383-1,266となる。

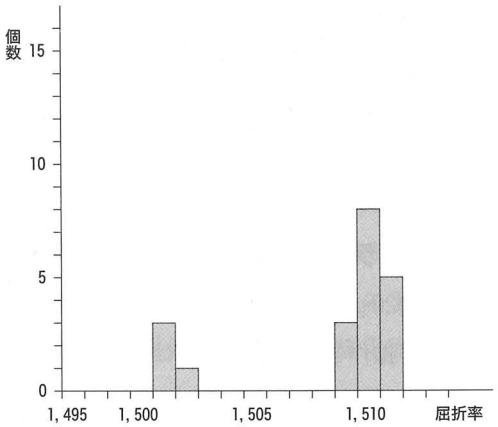


図1　火山ガラスの屈折率測定結果

(2) テフラ分析

処理後に得られた砂分は、石英や長石粒が主体をなし、また斜方輝石や角閃石などの重鉱物粒や安山岩、凝灰岩などの岩石片も少量混在する。テフラの本質物と考えられる砕屑物は、無色透明または淡褐色を呈するバブル型火山ガラスが、極めて微量認められた。

なお、極めて微量認められた火山ガラスを摘出し、その屈折率を測定したところ、n1.499-1.500のレンジとn1.507-1.510のレンジの2つの屈折率のレンジが得られた。

4. 考察

放射性炭素年代と考古学における時期区分との詳細な対応については、現在様々なデータが取られており、検討の途上にあることから、ここでは詳細な議論は行わない。一般的な年代観からいえば、今回の炭化物試料から得られた放射性炭素年代は概ね縄文時代後期の終わり頃に相当すると言って良い。

一方、8層（遺物包含層）中から極めて微量ながらもバブル型火山ガラスが検出されたことから、8層の形成以前あるいは形成途上でガラス質テフラの降灰があり、その砕屑物である火山ガラスが、8層を構成している褐色土壌の母材の一部として混入し、8層中に拡散していると考えられる。したがって、8層中に包含される遺物の年代は、ガラス質テフラの降灰年代より以降であるといえる。

試料中より検出された火山ガラスの形態および屈折率、さらには八木・早田（1989）に記載されている高舘丘陵周辺のテフラの産状と8層が愛島軽石の上位であるという層位関係を合わせて考えると、屈折率の低い火山ガラスは姶良Tn火山灰（AT：町田・新井、1976）、屈折率の高い火山ガラスは阿蘇4テフラ（Aso-4：町田ほか、1985）に由来する可能性が高い。

ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）、宮入ほか（2001）など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井、2003）。町田・新井（2003）は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。一方、Aso-4の噴出年代については、南関東など他のテフラとの層位関係や深海

底堆積物の酸素同位体比層序などから、8.5～9万年前頃とされている（町田・新井、2003）。

以上述べた放射性炭素年代測定結果およびテフラの産状から、8層中の遺物の年代は、古くともAT降灰以降であり、かつ縄文時代後期頃まで新しくなる可能性がある。ただし、年代の確定には、今後の周辺地域における類例の調査分析による検討が望まれる。

引用文献

古澤　明、1995、火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別。地質学雑誌、101、123-133。

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫、1995、南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代。第四紀研究。34、377-379。

町田　洋・新井房夫、1976、広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―。科学、46、339-347。

町田　洋・新井房夫、2003、新編　火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢、1985、阿蘇4火山灰―分布の広域性と後期更新世示標層としての意義―。火山、30、49-70。

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗、1987、姶良Tn火山灰の14C年代。第四紀研究、26、79-83。

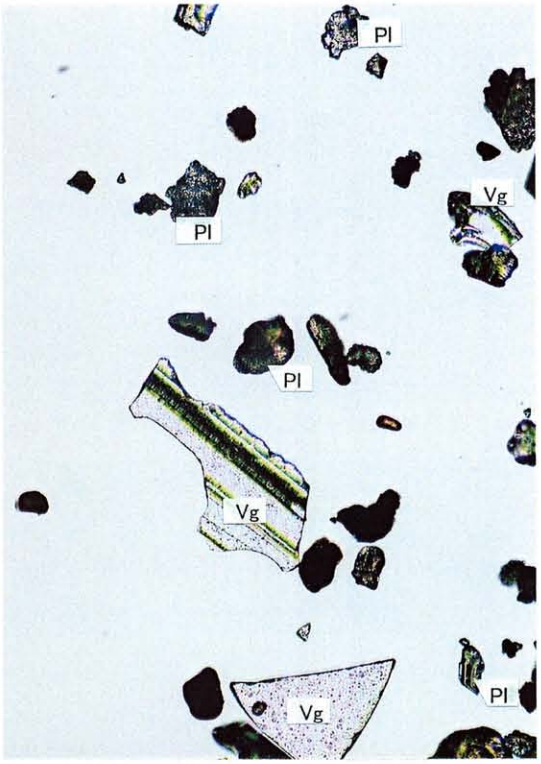
宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎、2001、姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック（演旨）。地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM）、2001、Qm-010。

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦、1993、四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討―タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代―。地質学雑誌、99、787-798。

八木浩司・早田　勉、1989、宮城県中部および北部に分布する後期更新世広域テフラとその層位。地学雑誌、98、39-53。

図版1　テフラ

1.　砂分の状況（第21トレンチ・副郭土塁下8層）



2.　火山ガラス（第21トレンチ・副郭土塁下8層）
PL：斜長石　Vg：火山ガラス

1.5㎜　1　　0.2㎜　2

写　真　図　版

第46図　菅生館跡遠景（西南から）

第47図　菅生館跡遠景（東から）

第48図　主郭（西北から）

第49図　主郭（東南から）

第50図　主郭西側の土塁（東南から）

第51図　主郭西側の土塁（東北から）

第52図　主郭南側の土塁（東北から）

第53図　主郭南側の土塁（西北から）

第54図　主郭東南角の土塁（北から）

第55図　主郭の段状遺構（東北から）

第56図　主郭の段状遺構（南から）

第57図　副郭（西から）

第58図　副郭（東から）

第59図　副郭の土塁（東から）

第60図　副郭の土塁（南から）

第61図　櫓状遺構（西南から）

第62図　櫓状遺構（東南から）

第63図　櫓状遺構（北から）

第64図　櫓状遺構の土塁（南から）

第65図　第１堀切（南から）

第66図　第１堀切（東北から）

第67図　第１堀切（東から）

第68図　第１堀切の西斜面（東北から）

第69図　第２堀切（南から）

第70図　第２堀切（北から）

第71図　第２堀切の北端（南から）

第72図　第２堀切（東から）

第73図　第３堀切（北から）

第74図　第３堀切北部・両側の土塁（西南から）

第75図　第３堀切（東南から）

第76図　第４堀切（東から）

第77図　第４堀切（西から）

第78図　第１土塁（北から）

第79図　第２土塁（北から）

第80図　通路状遺構（西南から）

第81図　溝状遺構（東から）

第82図　第１腰郭北部（東南から）

第83図　第１腰郭中部（北から）

第84図　第１腰郭東部・角柱は三角点（西北から）

第85図　第２腰郭西部（東南から）

第86図　第 2 腰郭東部（西北から）

第87図　第 3 腰郭西端（西から）

第88図　第 3 腰郭中央部（西北から）

第89図　第 3 腰郭南端（南から）

第90図　第 4 腰郭（西南から）

第91図　第 5 腰郭（北から）

第92図　第 5 腰郭（南から）

第93図　第 6 腰郭（東南から）

第94図　第７腰郭（西北から）

第95図　第８腰郭北端（西北から）

第96図　第８腰郭中央部（西から）

第97図　第９腰郭（西北から）

第98図　第10腰郭北端（北から）

第99図　第10腰郭東部（南から）

第100図　第10腰郭中部（東南から）

第101図　第10腰郭西部（西北から）

第102図　第10腰郭西部（西から）

第103図　第10腰郭西端（西北から）

第104図　第11腰郭（西南から）

第105図　第11腰郭（東北から）

第106図　第12腰郭（東南から）

第107図　第12腰郭（南から）

第108図　第13・14腰郭（東から）

第109図　第13・14腰郭（西から）

第110図　第15腰郭（西北から）

第111図　第16腰郭（東南から）

第112図　第17腰郭（南から）

第113図　第18腰郭（東南から）

第114図　第19腰郭（南から）

第115図　第20腰郭（南から）

第116図　第21腰郭（西南から）

第117図　第22腰郭（西南から）

第118図　第１トレンチ調査前状況（東南から）

第119図　第１トレンチ遺構確認状況（西南から）

第120図　第２トレンチ調査前状況（南から）

第121図　第２トレンチ遺構確認状況（西北から）

第122図　第２トレンチ西南壁断面（東北から）

第123図　第３トレンチ調査前状況（東南から）

第124図　第３トレンチ遺構確認状況（西北から）

第125図　第４トレンチ調査前状況（西北から）

第126図　第４トレンチ遺構確認状況（東南から）

第127図　第５トレンチ調査前状況
（東南から）

第128図　第５トレンチ遺構確認状況（北から）

第129図　第５トレンチ北壁断面
（南から）

第130図　第６トレンチ調査前状況（東南から）

第131図　第６トレンチ調査前状況（東北から）

第132図　第６トレンチ遺構確認状況（東北から）

第133図　第６トレンチ遺構確認状況（西北から）

第134図　第６トレンチ・溝状遺構確認状況（西北から）

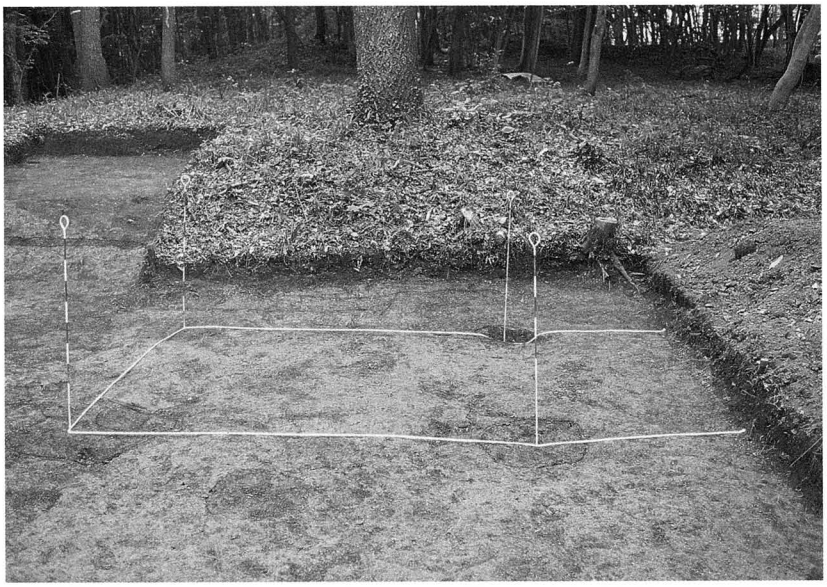
第135図　第７トレンチ調査前状況（東から）

第136図　第７トレンチ遺構確認状況（東北から）

第137図　第７トレンチ・ピット確認状況（西南から）

第138図　第８トレンチ調査前状況（東南から）

第139図　第８トレンチ遺構確認状況（東南から）



第140図　第８トレンチ・掘立柱建物跡確認状況（東から）

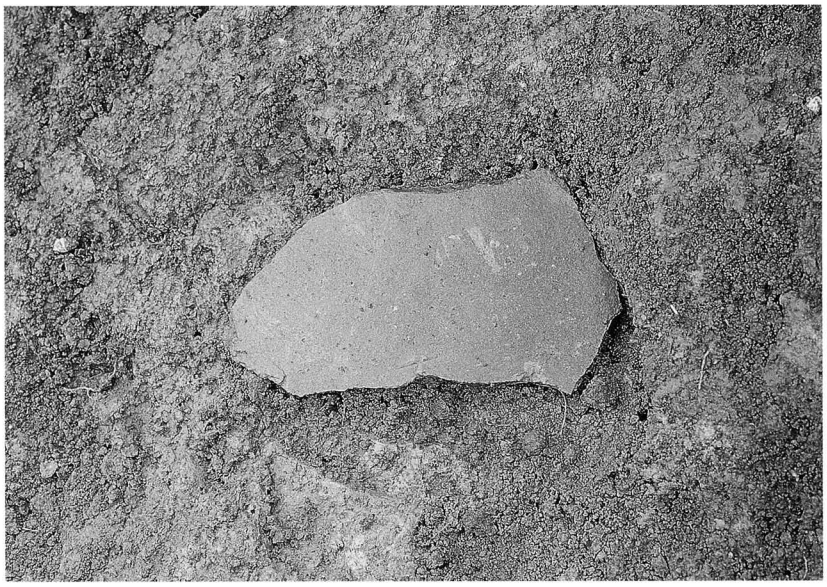
第141図　第８トレンチ・整地層確認状況（東から）

第142図　第８トレンチ・整地層断ち割り部分断面(北から)

第143図　第８トレンチ・石核SG44出土状況（南から）

第144図　第９トレンチ調査前状況（南から）

第145図　第９トレンチ遺構確認状況（東から）



第146図　第９トレンチ・中世陶器SG128出土状況（北から）

第147図　第10トレンチ調査前状況（東南から）

第148図　第10トレンチ確認状況
（東南から）

第149図　第11トレンチ調査前状況
（東北から）

第150図　第11トレンチ遺構確認状況（東北から）

第151図　第11トレンチ遺構確認状況（西南から）

第152図　第12トレンチ調査前状況（東から）

第153図　第12トレンチ確認状況（西北から）

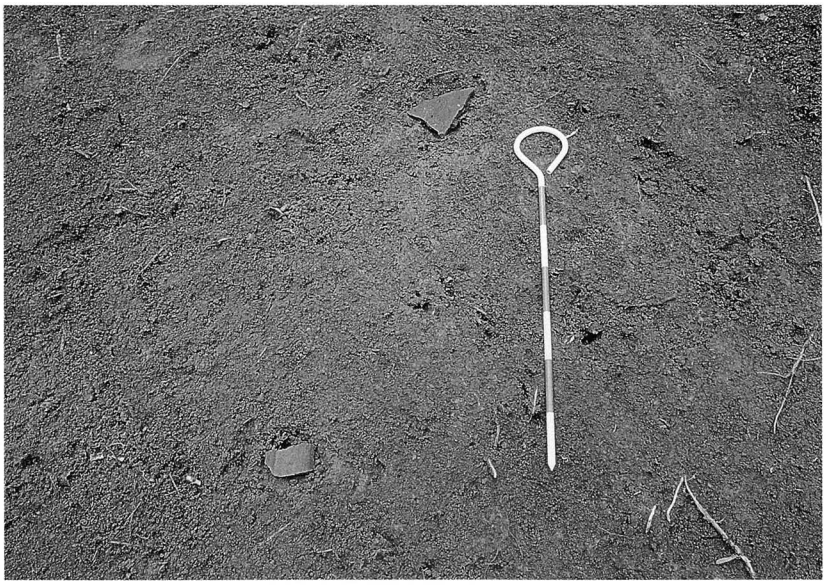
第154図　第13トレンチ調査前状況
（東北から）

第155図　第13トレンチ調査前状況
（南西から）

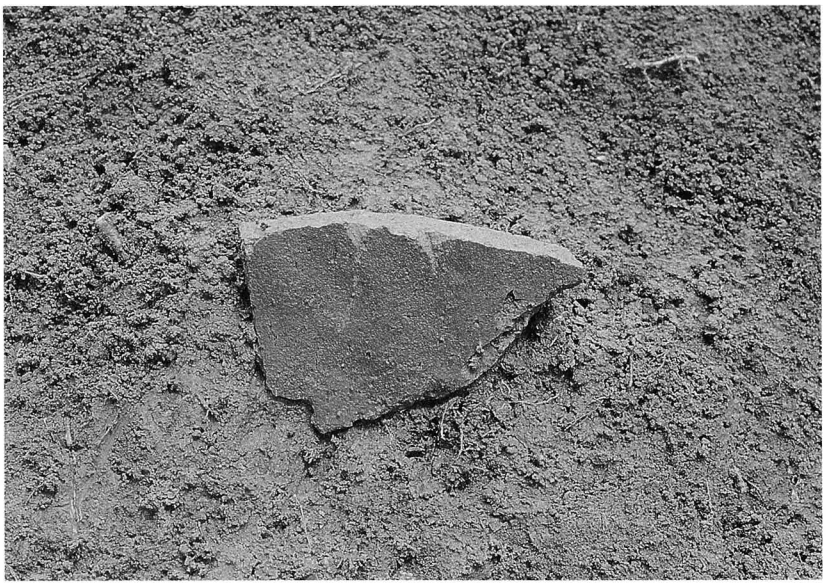
第156図　第13トレンチ遺構確認状況・土塁部分（北から）

第157図　第13トレンチ遺構確認状況（西南から）

第158図　第13トレンチ・土塁部分断面（西北から）



第159図　第13トレンチ・中世陶器SG120・SG121出土状況（東北から）



第160図　第13トレンチ・中世陶器
SG118出土状況
（東北から）

第161図　第13トレンチ・中世陶器
SG129出土状況（東から）

第162図　第13トレンチ・剥片
SG37出土状況（東から）

第163図　第14トレンチ調査前状況（北西から）

第164図　第14トレンチ遺構確認状況（東南から）

第165図　第15トレンチ調査前状況（北から）

第166図　第15トレンチ確認状況
（北東から）

第167図　第16トレンチ調査前状況・主郭西側土塁
（東南から）

第168図　第16トレンチ調査前状況・第１堀切部分
（東南から）

第169図　第16トレンチ調査前状況・第１堀切部分（西北から）

第170図　第16トレンチ遺構確認状況・主郭部分（東南から）

第171図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切東斜面（西北から）

第172図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切底部（東北から）

第173図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切西斜面（東南から）

第174図　第16トレンチ遺構確認状況・第１堀切西斜面の土塁（東北から）

第175図　第16トレンチ遺構確認状況・副郭部分（西北から）

第176図　第16トレンチ・第１堀切底部断面（東北から）

第177図　第16トレンチ・第１堀切西斜面中間部断面（東北から）

第178図　第17トレンチ調査前状況
（北から）

第179図　第17トレンチ確認状況
（北西から）

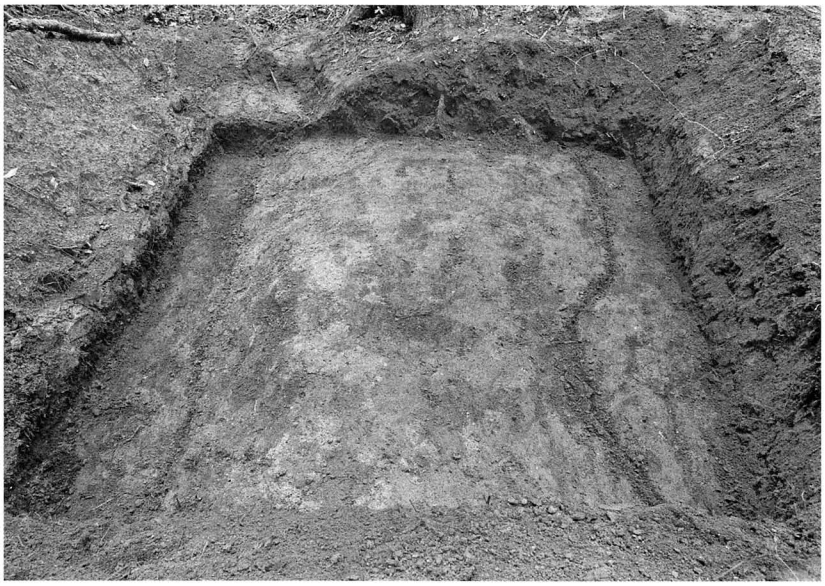
第180図　第18トレンチ調査前状況
（東南から）

第181図　第18トレンチ確認状況
（東北から）

第182図　第19トレンチ調査前状況
（西から）

第183図　第19トレンチ遺構確認状況（東から）

第184図　第20トレンチ調査前状況（東から）



第185図　第20トレンチ遺構確認状況（東から）

第186図　第21トレンチ調査前状況・第２堀切東斜面（西から）

第187図　第21トレンチ調査前状況・第3堀切西斜面（西から）

第188図　第21トレンチ遺構確認状況・副郭土塁部分（東から）

第189図　第21トレンチ遺構確認状況・第2堀切西斜面（西から）

第190図　第21トレンチ遺構確認状況・第１土塁部分（北から）

第191図　第21トレンチ遺構確認状況・第２土塁部分（北から）

第192図　第21トレンチ遺構確認状況・第３堀切東斜面（西から）

第193図　第21トレンチ遺構確認状況・第３堀切西斜面（東から）

第194図　第21トレンチ・第２堀切断面（西北から）

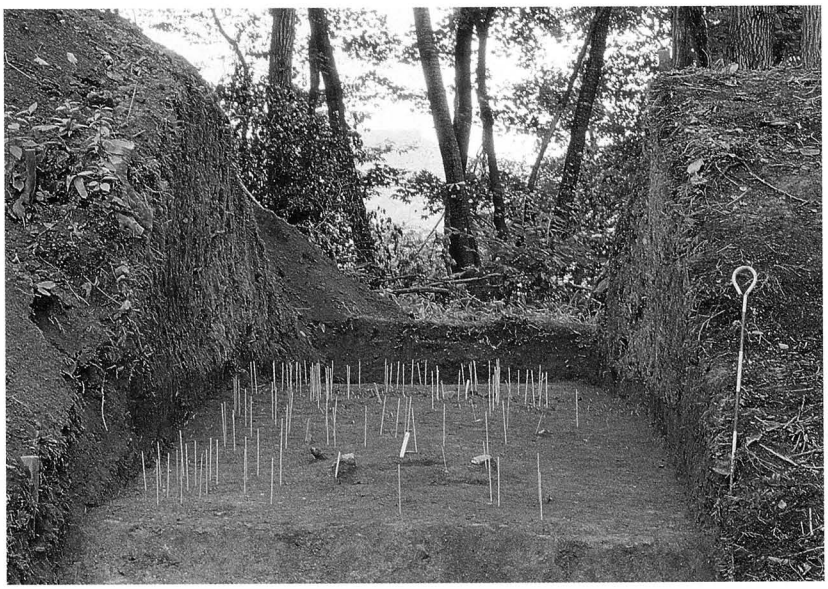
第195図　第21トレンチ・第２堀切底部断面（北から）

第196図　第21トレンチ・第３堀切
底部断面（北から）

第197図　第21トレンチ・副郭土塁
断ち割り状況（東から）

第198図　第21トレンチ・副郭土塁
下の砥石SG135出土状況
（東から）

第199図　第21トレンチ・第１土塁と第２土塁の断ち割り状況（西から）



第200図　第21トレンチ・副郭土塁下の炭化物出土状況（西から）

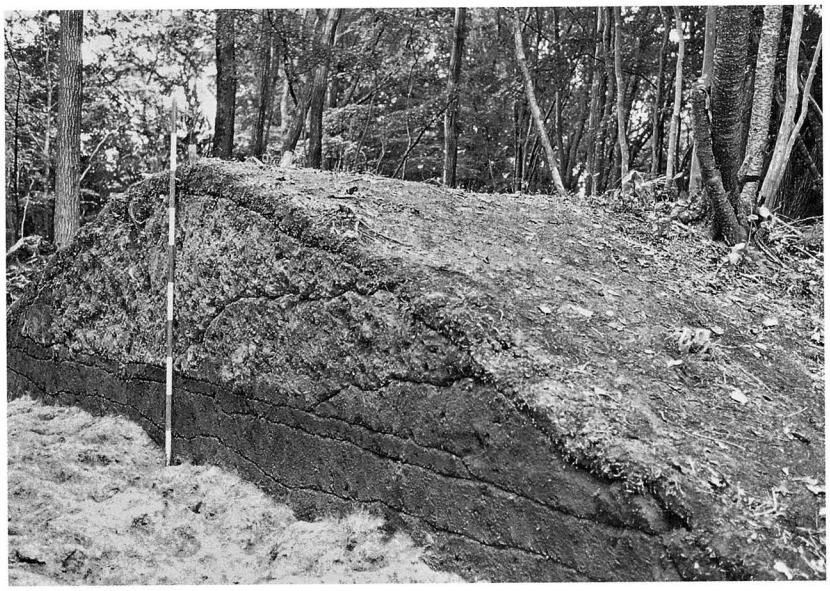
第201図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況（東から）

第202図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況（西から）

第203図　第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況（南から）

第204図　第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパーSG19出土状況（西南から）

第205図　第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパーSG27出土状況（西から）



第206図　第21トレンチ・副郭土塁の断ち割り断面（西北から）

第207図　第21トレンチ・第１土塁の断ち割り断面（北から）

第208図　第21トレンチ・第２土塁の断ち割り断面(北から)

第209図　第21トレンチ・副郭土塁下の愛島軽石層上面(東から)

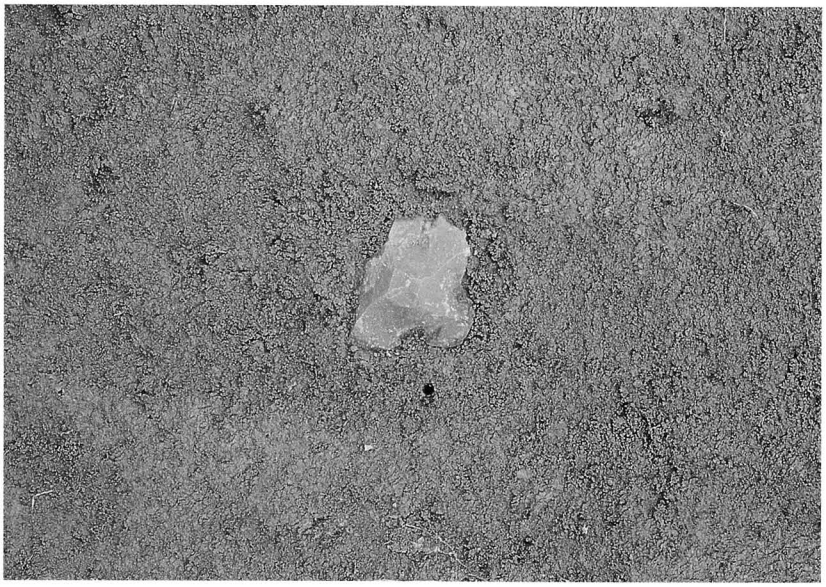
第210図　第21トレンチ・第１土塁と第２土塁下の愛島軽石層上面（西から）

第211図　A区の調査前状況
（西北から）

第212図　A区・土壙
（東北から）

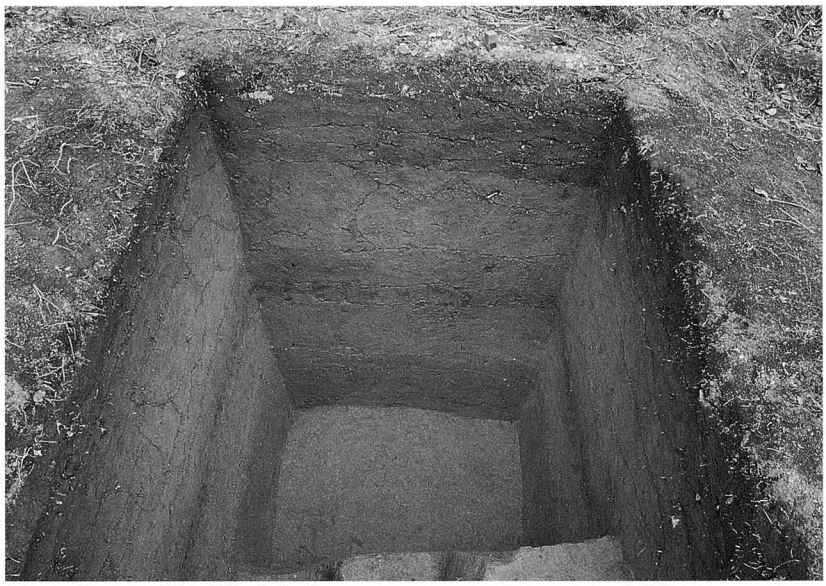
第213図　A区・土壙断面
（東北から）

第214図　A区深掘トレンチ・4層からの縄文土器SG91-1出土状況（南から）

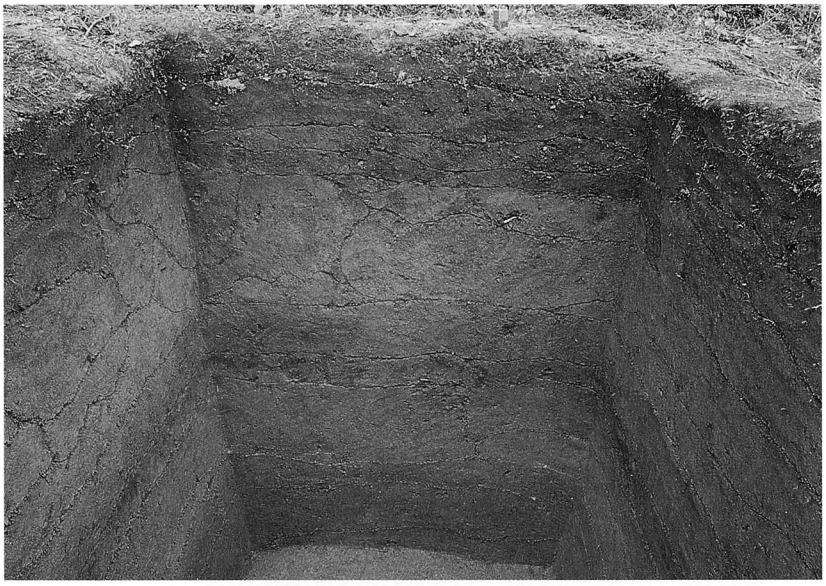


第215図　A区深掘トレンチ・4層からの剥片SG54出土状況（東南から）

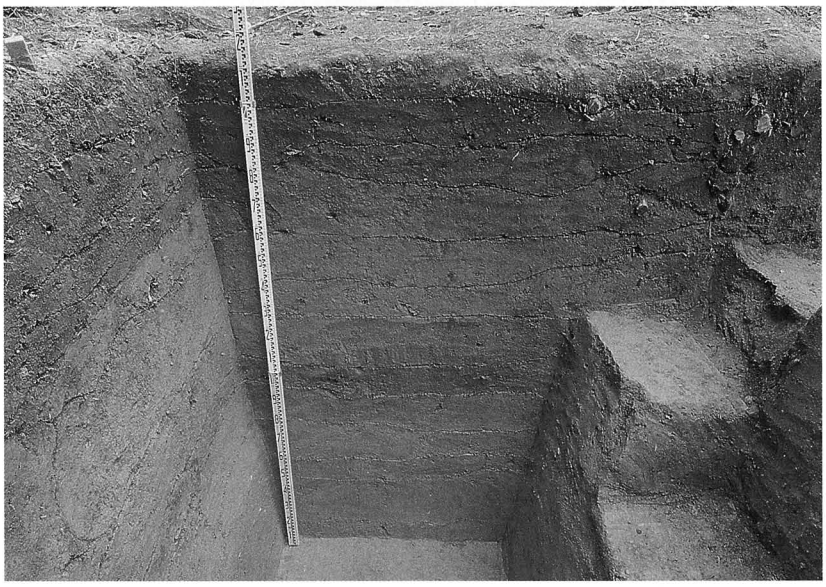
第216図　A区深掘トレンチ・川崎スコリア層上面（東南から）



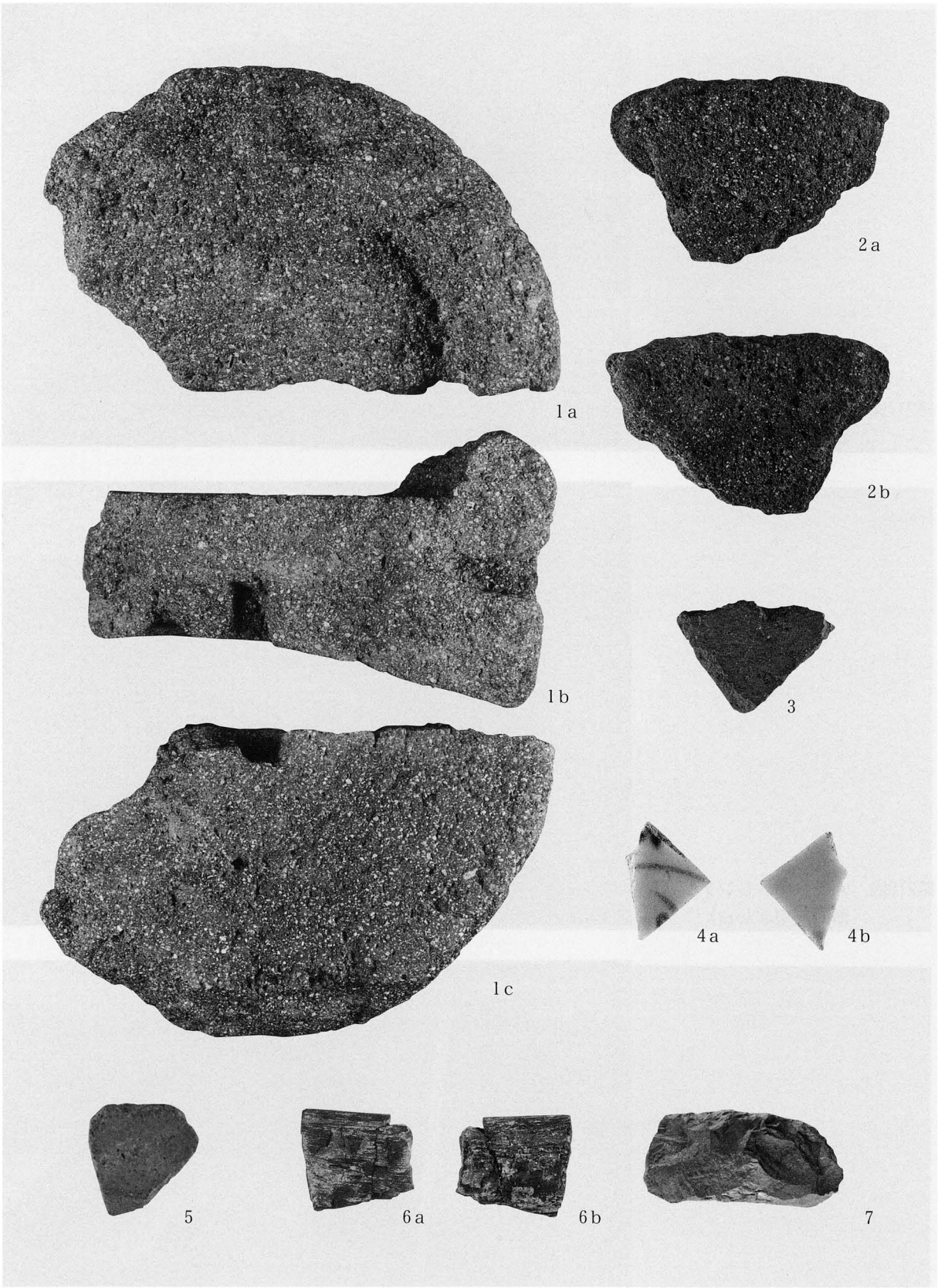
第217図　A区深掘トレンチの最終状況（東北から）



第218図　A区深掘トレンチ・南壁断面（東北から）

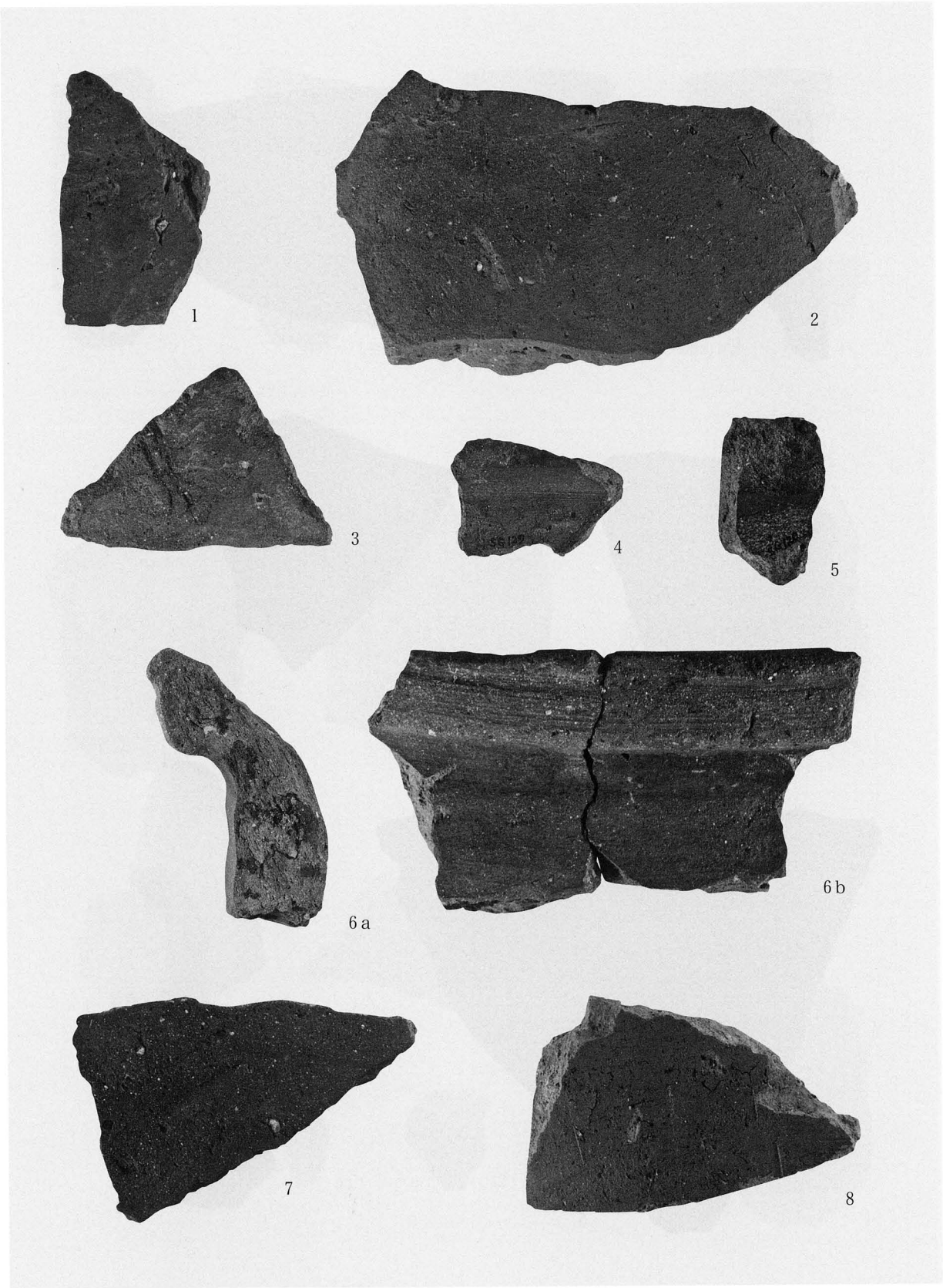


第219図　A区深掘トレンチ・西壁断面（東南から）



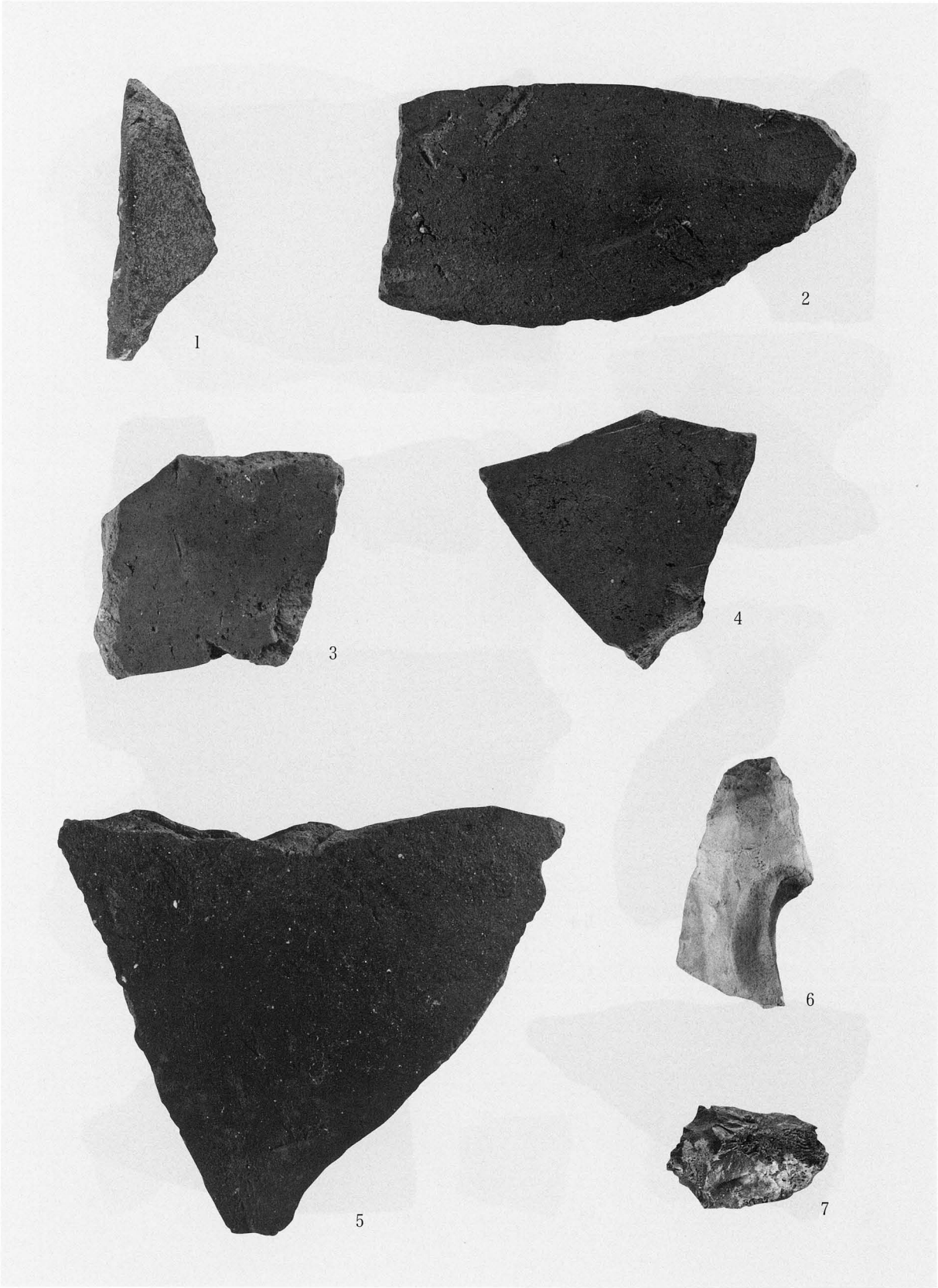
1. 石臼（第6トレンチ・SG137）　2. 石鉢（櫓状遺構・SG136）　3. 陶器（第8トレンチ・SG125）　4. 中国製磁器（第8トレンチ・SG133）　5. 土師質土器（第8トレンチ・SG117）　6. 椀（第8トレンチ・SG134）　7. 石核（第8トレンチ・SG44）

第220図　第6トレンチ・第8トレンチ・櫓状遺構遺物（縮尺は1・2が1/3、4～6は1/1、3・7は2/3）



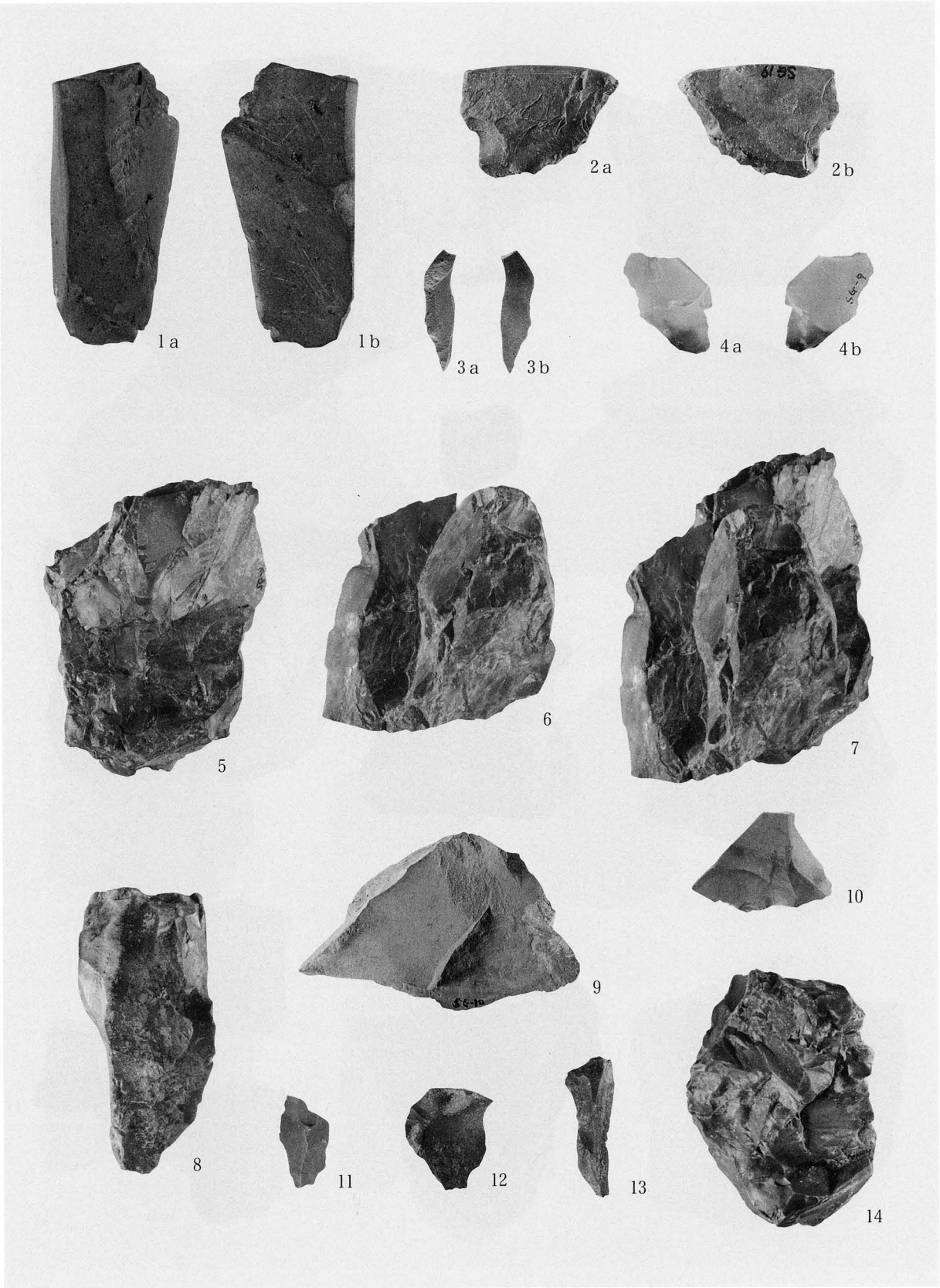
1. 陶器（第９トレンチ・SG126）　2. 陶器（第９トレンチ・SG128）　3. 陶器（第９トレンチ・SG127）　4. 陶器（第13トレンチ・SG129）　5. 陶器（第13トレンチ・SG120）　6a. 陶器断面の漆付着状況（第13トレンチ・SG123）
6b. 陶器（第13トレンチ・SG123＋SG132）　7. 陶器（第13トレンチ・SG119）　8. 陶器（第13トレンチ・SG118）

第221図　第９トレンチ・第13トレンチ遺物（縮尺は2/3）



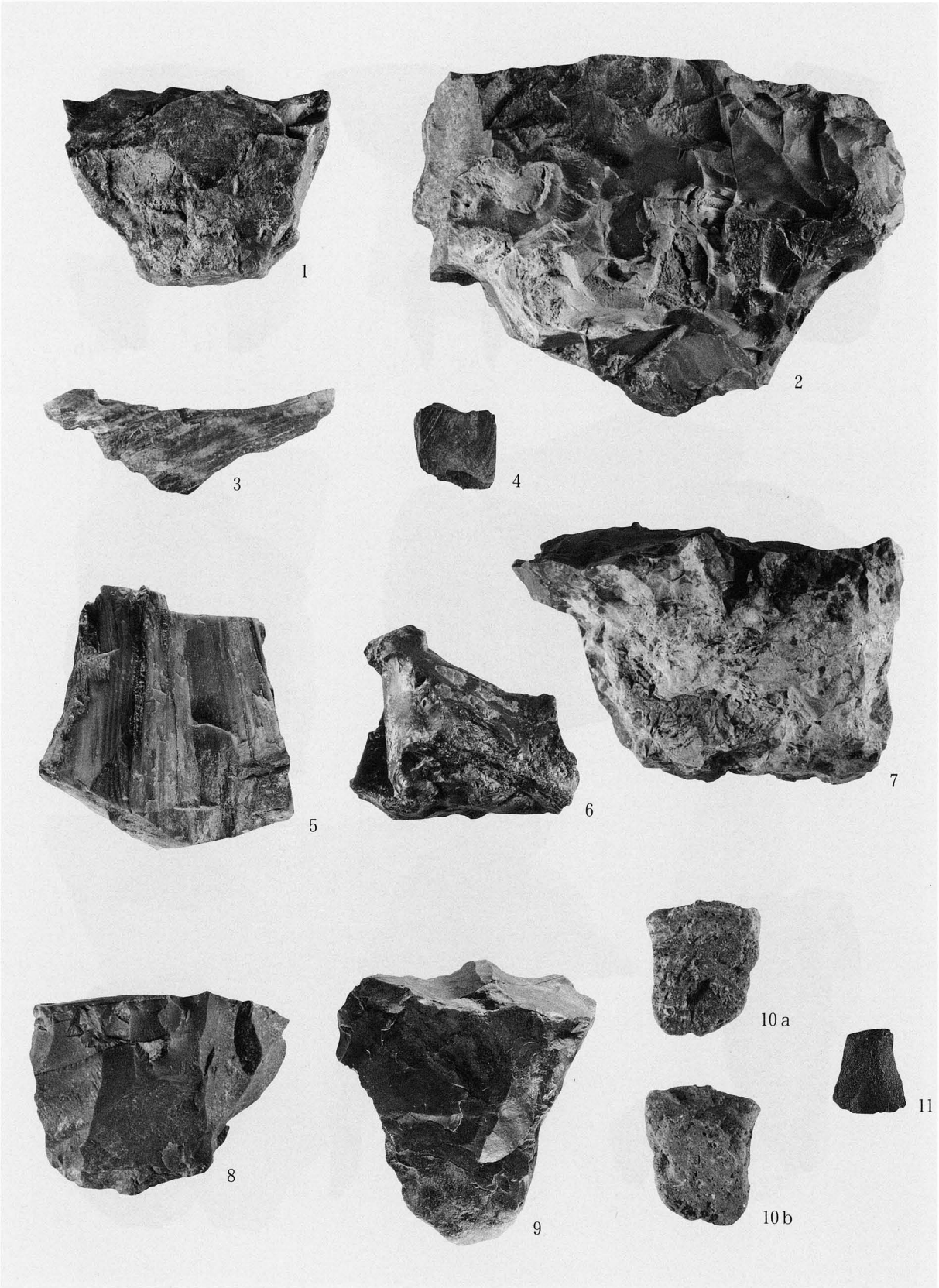
1. 陶器（SG122）　2. 陶器（SG121）　3. 陶器（SG124）　4. 陶器（SG130）　5. 陶器（SG131）
6. 箆状石器（SG36）　7. 剥片（SG37）

第222図　第13トレンチ遺物（縮尺は2/3）



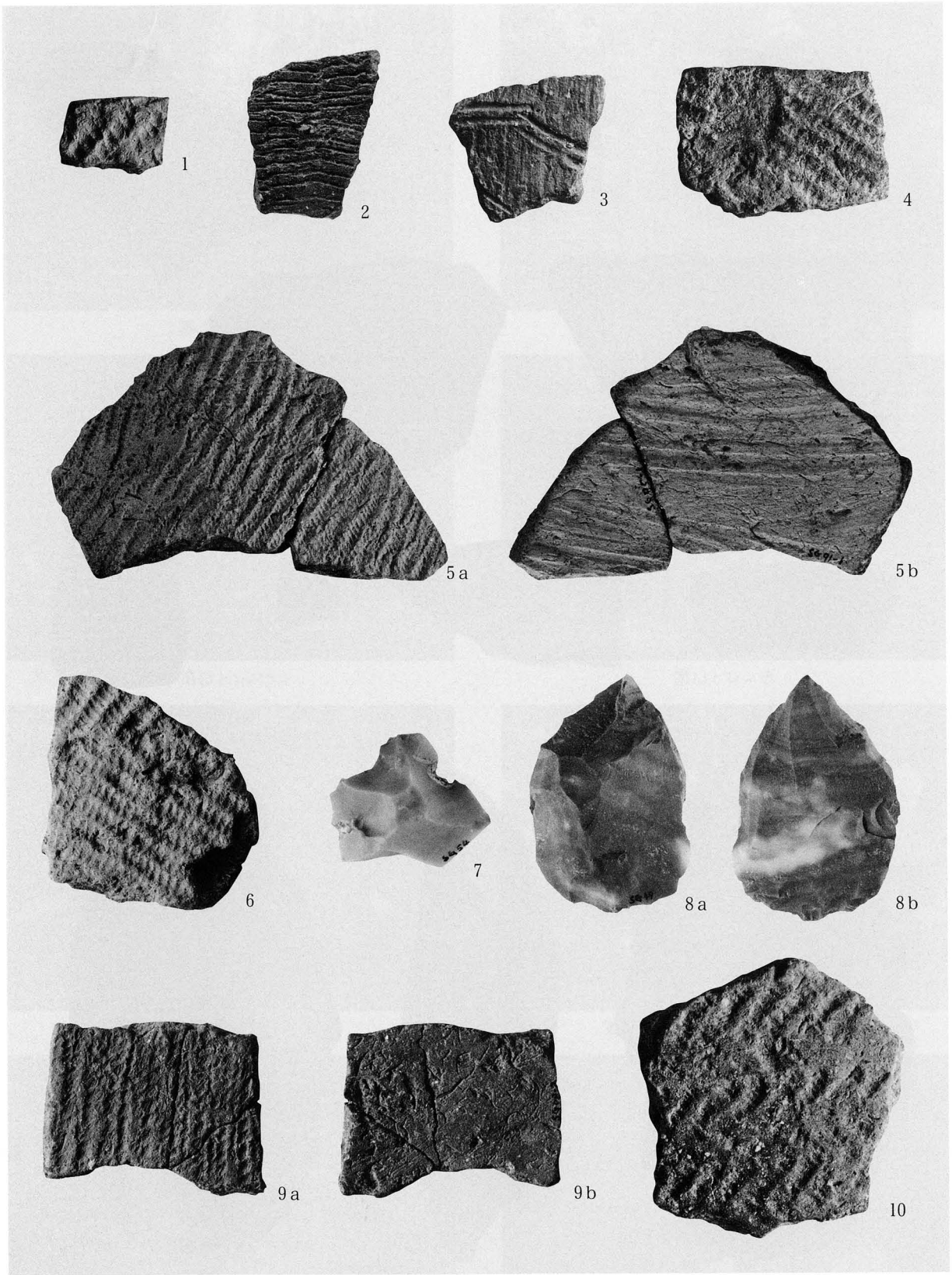
1. 砥石（SG135）　2. スクレイパー（SG19）　3. スクレイパー（SG27）　4. 二次加工ある剥片（SG9）　5. 剥片（SG3）　6. 剥片(SG13)　7. 剥片の接合資料(SG3＋SG13)　8. 石核(SG21)　9. 剥片(SG10)　10. 剥片(SG31)　11. 剥片（SG11）　12. 剥片（SG8）　13. 剥片（SG18）　14. 石核（SG22）

第223図　第21トレンチの副郭土塁下遺物（縮尺は１・５～14が2/3、２～４は1/1）



1. 石核（SG20）　2. 石核（SG1）　3. 剥片（SG4）　4. 剥片（SG42）　5. 石核（SG5）　6. 剥片（SG23）
7. 石核（SG14）　8. 石核（SG41）　9. 剥片（SG40）　10. 縄文土器（SG88）　11. 剥片（SG46）

第224図　第21トレンチの副郭土塁下・第１土塁遺物（11のみ第１土塁：縮尺は10のみ1/1、他は2/3）



1. 縄文土器（土壙・SG86）　2. 縄文土器（深掘トレンチ・SG92）　3. 縄文土器（深掘トレンチ・SG94）　4. 縄文土器（深掘トレンチ・SG93-2）　5. 縄文土器（深掘トレンチ・SG91-1）　6. 縄文土器（深掘トレンチ・SG93-8）
7. 剥片（深掘トレンチ・SG54）　8. スクレイパー（深掘トレンチ・SG49）　9. 縄文土器（表採・SG98-2）　10. 縄文土器（表採・SG98-1）

第225図　A区遺物（縮尺は2/3）

1. 縄文土器 (SG85)　2. 縄文土器 (SG92)　3. 縄文土器 (SG97-1)　4. 縄文土器 (SG114)　5. 弥生土器 (SG107)
6. 弥生土器 (SG87)　7. 土師器 (SG112)　8. 土師器 (SG105)　9. スクレイパー (SG80)　10. 打製石斧 (SG63)

第226図　A区表採遺物（縮尺は2/3）

第３トレンチ

第８トレンチ

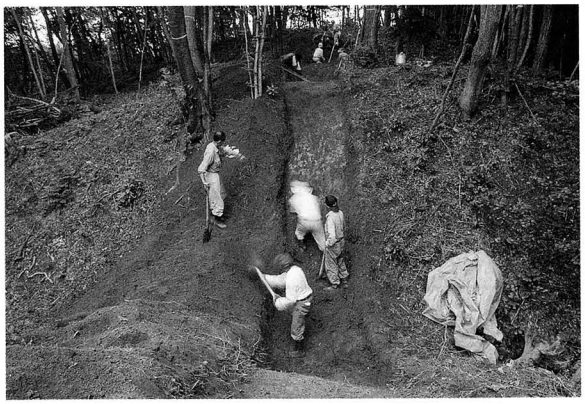
第13トレンチ

第13トレンチ

第16トレンチ（第１堀切底部）

第16トレンチ（第１堀切西斜面）

第21トレンチ（第１土塁・第２土塁）



第21トレンチ（第３堀切東斜面）

第227図　発掘調査風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	すごうたてあと
書名	菅生館跡
副書名	
巻・次	
シリーズ名	村田町文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	石黒伸一朗
編集機関	村田町教育委員会
所在地	〒989-1305 宮城県柴田郡村田町大字村田字迫6 TEL 0224-83-2037　FAX 0224-83-2487
発行年月日	西暦 2006年3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
菅生館跡（すごうたてあと）	宮城県柴田郡（みやぎけんしばたぐん）村田町大字（むらたまちおおあざ）菅生字館（すごうあざたて）	04322	07025	38° 10′ 15″	140° 45′ 00″	2005.08.08 ～ 2005.10.21	445㎡	県営中山間地域総合整備事業ほ場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菅生館跡	城館跡	中世	堀切、土塁、掘立柱建物跡、溝状遺構、土壙、ピット、整地層、	中世陶器、中国製磁器、石臼、砥石、石鉢、縄文土器、石器、	

村田町文化財調査報告書第22集

菅　生　館　跡

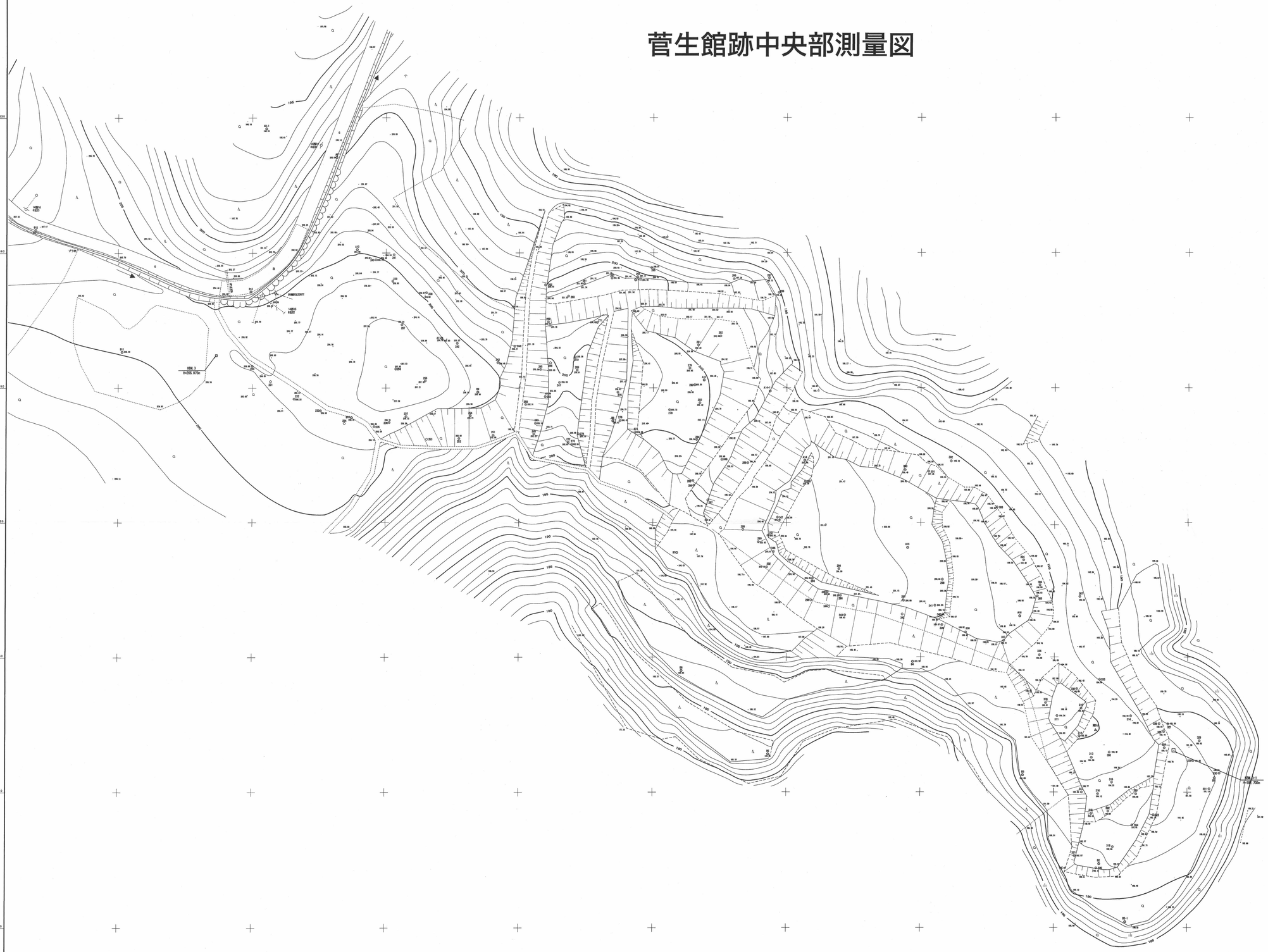
発行日　平成18(2006)年3月24日

発　行　村田町教育委員会
宮城県柴田郡村田町大字村田字迫6

印　刷　今野印刷株式会社
宮城県仙台市若林区六丁の目西町2－10

付図 菅生館跡中央部測量図

菅生館跡中央部測量図



縮尺500分の１